

第〇1講 「品詞」「文。」のルール「語句節」「動詞の活用」概論

ようこそ論理英文法の世界へ！

本書を開いたこの日こそが英語のできる人材になる転機（転換点）です
英語を得意科目にして、英語論文が読める書ける、外国人と対等に渡り合える、そんな有用な人材になるぞという気概で、最後まで諦めず読破する覚悟で臨んでください

単なる例文の羅列や統一性のない場当たりの説明に過ぎない騙りものの現行英文法という災厄から脱却し、偽りデタラメ英文法・マガイモノ英文法に騙されて明るい有望な未来をつぶされないようにしましょう

本稿は、全く新しい論理的体系的な英文法を学び、辞書さえあればスラスラ読める英文読解力を付け、次に辞書さえあればサクサク書ける英作文力を付け、さらには、英作文の時間を短縮し話せるようにし、読解力・発信力を身に付ける基盤となる科学的英文法を提示します（リスニングは体育・音楽のような別科目と考えてください）

「英文法力⇒英文読解力⇒英作文力⇒英語を話す力（読める→書ける→話せる）」という黄金の流れを脳内に創りましょう（現代文学習との関係について、第02講の講末を参照してください）

本稿の英文法体系は、化学のように、言語現象の論理体系化を目指したもので、理系のための英文法解説書ともいえるものです

宇宙の物質や現象を論理的に探究し説明するのが化学ですが、人間の言葉も「宇宙の中の現象」ですから、全て完全論理で説明できるのです

周期表のように、ほとんどの項目を表にできるのです

ここに、文系の感情論の騙り英文法ではなく、「論理英文法」を顕現提示します

文系の英語力保持は当然（常識的最低素養）ながら、理系こそ、英文法力をもとに、英語論文をスラスラ読み情報を得て、英語論文をサクサク書き成果を発信できる語学に秀でた研究者・技術者をめざしましょう（最近のノーベル賞受賞者の方々が異口同音に英語力をつけなければならないと言っているのをご存じでしょう）

なお、本稿は、自由頒布版です

英語に困っている方・英語に頑張りたい方々等々に広めてあげてください

（中学生・高校生・大学受験生・大学生・大学院生・社会人等の多くの方々に読んでいただきたいものです）

2015年4月改訂版

本講では、言語（英語）の構造について、まずは理解しておきたい事項の概説をします
次講以降の理解の基盤となるものですので、完全理解と完全暗記をお願いします

I 「単語と品詞」

『文。』を「構成」している「単語」は、その「性格（質）」によって、いくつかの種類・グループに分類されています

分類された個々のグループ名としては、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」「副詞」等があります（まずは、この5品目を完全理解です）

これらのグループの総称を「品詞」というのです

本書では、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」「副詞」を「名形自他副」等と略します

- ①、まずは、「品詞」のうち、「名詞」と「形容詞」を確実に「認識」してください
- ②、次に、「動作」をあらわす「単語」である「動詞」は、「自動詞」と「他動詞」に、常にきっちり分けて考えるようにしなければなりません（「厳格区別」です）
- ③、その後、ハブカレモノの「副詞」の理解に入ります

本書では、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」が、『文。』を「構成」する「基本的な品詞」なので、「基本4品詞」「構成4品詞」と位置づけて進行します
ちなみに、「副詞」は「部外者的な品詞」です（常にハブいてやりましょう）

ちよいと、老婆心・・・すんません

理系、研究者・技術者は、アイディアが大事と言われています

そのアイディアのどこからくるのでしょうか

夢で見たという科学者もいますね

まあ、それはそれとして、多くの研究者・技術者にその夢を見てもらいたいのですが、どうすれば、発想壮大でアイディアが豊富に湧いてくるのでしょうか

多数、要因はあるでしょうが、本稿では、楽に「古文」「漢文」に親しんでもらうということを提案します（しかも「古文」「漢文」が楽勝になれば、大学受験も楽勝！）

論理英文法の体得により、外国語のような「古文」「漢文」に簡単に多く接し、理系の方々にも文系の素養を身に付けてもらい、発想の豊かな理系人になっていただければと思います

ここを深く認識せずに、笑い流すと、破綻が待ってます

「単語と品詞」の基本事項（「基本4品詞」）

「名詞」

『文。』の中心的な位置（「主体・主語」や「客体・目的語」）につく「単語」・「品詞」で、「モノやコトの名称」をあらわします（主に、世の「現事象」の「主体」か「客体」となる）

「形容詞」

「名詞」を「修飾」したり、「名詞」の「状態」を「説明」したりする「単語」・「品詞」です（「名詞」を直接修飾する場合と「主語」たる「名詞」を「述語」として説明する場合の2仕様ある）

「自動詞」

『文。』の主題に位置する「名詞」（「主体・主語」）の「動作」のうち、「他者」を巻き込まない、「主体」単独の「動作」をあらわします

「他動詞」

「主体」の「動作」のうち、「他者（客体）」を「巻き込む動作」をあらわします

以上が、『文。』の「基本4品詞」、「構成4品詞」です

「名詞」が本当にわかること（第07講の講末参照）と「形容詞」の認識・理解と、「自動詞」と「他動詞」をしっかりと分ける態度が、最初の関門です

「品詞」に対する本当の認識・理解がないと、「単語」もなかなか頭に入らず、暗記も非効率です

「品詞」の理解があれば、「単語の役割」を考えながら記憶できるので定着が違います（「品詞」を認識・意識して単語は覚えるべし！）

ここで、いったん仲間外れにしなければならない「副詞」について言及しておきます

「副詞」

- ① 「動詞」「形容詞」「副詞」「文全体」を修飾し、
 - ② 「時」「場所」「程度」「頻度」「目的」「手段」「理由」「条件」「譲歩」「否定」「付帯状況」「結果」等を表す
- 『文。』の骨格をなすものではなく、場面状況を表す舞台背景的要素です

II

『文。』は「演劇」と似ています！

人間が、高度に何か（世の現事象）を言い表し書き表す場合には、『文。』を使います
そして、『文。』には、5種の動詞が支配するルールがあります（いわゆる「5文型」）

一方、「演劇」には、「監督」「役者（主役・脇役）」「衣装」「（舞台）背景」等があります
（作文者・話者がプロデューサーです）

『文。』も同様に、①〈主語〉が「主役」で、②「動詞」が〈影の支配者的役柄の役者兼「監督」〉です（〈主語〉というのは狭小矮小なので、本書では「主役」と呼びます）

「主役」を補佐する「脇役」もありますね
これが、③「主役」を説明する「補（佐）役」です（従来は、狭小矮小的に〈補語〉
といわれていましたが、本書では、「補役」と呼びます）
「補役」が登場する場合は、ライバルや相手役が登場しない「一人芝居」同様なので、
「主役」を説明するための「自動詞」という「役者兼監督」が演出指揮します

それから、「主役」のライバル役（敵役）・相手役が登場する場合もありますね
この相手役は、『文。』では、④動作の対象であり、「目的役」と本書では呼びます
ここでは、他者他物に働きかける「他動詞」という「役者兼監督」が演出指揮します

ここまでが、『文。』の「基本的な構成要素」です

①「主役」②「自動詞」「他動詞」③「補役」④「目的役」です

そのほかに、⑤「衣装」と、⑥「（舞台）背景」があります
すなわち、『文。』では、⑤「名詞修飾」の「形容詞」であり、⑥「場面状況」をあらわす「副詞」です（⑤⑥は「構成要素」ではありません）
なんといっても、⑤と⑥は、「付属的な要素」であるということを認識理解することが
重要です

主役 〈+名詞修飾形容詞〉	自動詞	補役 〈+名詞修飾形容詞〉
	他動詞	目的役 〈+名詞修飾形容詞〉
富リ言司		

III

「3種の言葉の単位」

「名詞」「形容詞」「副詞」には、小中大の3種の形態があります

小型が「語」、中型が「句」、大型が「節」です

「句」「節」の存在理由は、人間の思考や表現の発達発展に単語の数や造語のスピードが追い付かなかつたり、高度な内容を表現しなければならなくなったからでしょう
ここでは、「語」とは「1語のもの」をいい、「句」とは「2語以上の集合体（のうち、文の形態を含まないもの）」であり、主に「成句詞（前置詞）」を使って中型の「形容詞」「副詞」をつくります（「成句詞（前置詞）」は道具であり手段の「詞」です）

「節」とは「文そのものを名詞化・形容詞化・副詞化したもの（大型の名形副）」という程度の理解をここではしておいてください（詳しくは第6講以下と第22・23講）

「品詞」と「言葉の形態3種」のまとめ

「品詞」と「語句節」		「詞」の形態		
		（単）語	句	節
品詞 の種類	名詞	①名語	②名句	③名節
	形容詞	④形容語	⑤形容句	⑥形容節
	副詞	⑦副語	⑧副句	⑨副節

英語の例を挙げておきます

- ①「boy」②「a tall boy」③「that he is a teacher」
- ④「pretty」⑤「in trouble」⑥「関係代名詞 + she met」
- ⑦「yesterday」⑧「in the morning」⑨「when they went to Tokyo」

「品詞」のまとめ

総称	品詞称	各称	役割
「品詞」	「名詞」	「名語」	「主目補」になる
		「名句」	
		「名節」	
	「形容詞」	「形容語」	①「補役」になる
		「形容句」	②「名詞修飾形容詞」になる
		「形容節」	「名詞修飾形容詞」になる
	「副詞」	「副語」	「場面状況」を設定する 「役外状況族」
		「副句」	
		「副節」	

IV

「動詞」は活用して名形副化する！

日本語の動詞は、「未然・連用・終始・連体・假定・命令」と「活用」すると学習します

では、なんのために活用するのでしょうか

その実態は、動詞を活用させることにより、「動詞」そのものや「文全体」を「名詞化」「形容詞化」「副詞化」させることです（「名形副化」と略します）

日本語の動詞の活用ではわかりにくいですが、例えば、「走る」という動詞が活用し、「走り」という連用形は「名詞化」し（君の走りはイイね）、「走る」という連体形は「形容詞化」しているのです（走る亀）

「走りながら」「走るとき」「走れば」等は副詞化です

そして、英語の「動詞」の「活用」には、

- ①「不定詞」（「t o d o」）
 - ②「能動分詞」（「～i n g・d o i n g」）（「現在分詞」といわれている）
 - ③「受動分詞」（「～e d」）（「過去分詞」といわれている）
 - ④「完了分詞」（「～e d」）（「過去分詞」といわれている）
- というような4種類の「活用」があります

- ① の「不定詞」は、ご存じの通り、「名詞的用法」「形容詞的用法」「副詞的用法」の3種の展開をしております
- ② の「～i n g形」は「能動事態・状態・状況」を表し、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」しています
従来、それぞれ、〈動名詞〉〈進行形〉〈分詞構文〉と呼ばれていましたが、そのように分断する必要はなく、「不定詞」と同様にまとめて考えましょう
本書では、「能動活用」「能動分詞」と考えます
- ③ の「～e d形」は「受動状態・状況」を表し、「形容詞化」「副詞化」しています
従来、〈受動態〉〈分詞構文〉と呼ばれているものですが、本書では、「受動活用」「受動分詞」と考えます
- ④ の「～e d形」は、「完了状態」を表し、「形容詞化」します
本書では、「完了活用」「完了分詞」と考えます

そうすると、「～e d形」は、動詞の同じカタチの活用形態に「過去形態」「受動形態」「完了形態」が同居していますが、日本語の「れる・られる（受動・可能・尊敬・自発）」のように同一の形態のなかに様々な「状態・状況」が同居していると考えます（あとは、詞の位置や前後関係等で確定されます）

（詳しくは、第10講以下で）

第02講 『文。』に「文役」、「語句節」と「品詞」

本講では、

① 「基本3『文。』」の理解と「文役」の認識（「動詞」の観点からは「基本3種」）

② 「構成4品詞」の確実な認識と深い理解

を目指します（ここが、我慢の「基本3『文。』」の認識です、馬鹿にしないでください！）

I 『文。』の種類

『文。』の理解としては、まずは「基本的な3『文。』」の完全理解からはじめましょう

「基本3『文。』」

- ① 「何(主役)」が、「どうする」。(「主役」の「自分だけの動作」をあらわします)
- ②A 「何(主役)」が、「何」だ。(「主役」の「職業・地位・内容」をあらわします)
- ②B 「何(主役)」が、「どんな」だ。(「主役」の「性質・状態」をあらわします)
- ② 「何(主役)」が、「何」を、「どうする」。(「主役」の「他者を巻き込む動作」をあらわします)

『文。』には、基本的に「3『文。』」しかありませんといいながら、4種ありますが、②のA②のBの違い、すなわち、Aの「名詞による言い換え」と、Bの「形容詞による状態説明」の違いは読解上大変重要で、本来的には、「基本4『文。』」というべきでしょう

『文。』というものは、「動作」をあらわす「単語」すなわち「動詞」という「品詞」に支配されていて、それにより、「語順」があらかじめ慣習的に決まっているので、「作文者」は、その「ルール」に従って、「単語」を並べていくのです

『文。』は「(おもちゃの)回送貨物列車」のようなイメージで考えてください
作『文。』は、「動詞」を司令塔として慣習的に決まっている規則に従って並んでいる「空の貨物車」があるところに、作文者が伝えたい内容に応じて、必要な「単語(句節)」を的確に据えていくようなものです

ここから、厳格な「ルール」「規則性」をもった『文。』の「構造」をみていきます
細かい「ルール」はいったん措いて、「根本的なルール」を認識・理解し覚えないと、今後の積み上げが不能となり、あとが崩れ去るので注意してください

では、『文。』をつくっている「空の貨物車両」と「語順」についてみていきましょう

「『文。』の中心・主体」は「主役」で、脇に「補役」「目的役」

『文。』をつくっている「空の貨物車両」のうち、≪「何」が≫にあたる「『文。』の中心・主体」の部分「主役」と本書ではいいます（≪主語≫では狭小ですね）

それ以外以降の部分には、「主役」を補佐する「補役」と主役の相手役の「目的役」がありますね（≪補語≫≪目的語≫では狭小ですね）

『文。』をつくっているこれらの「空の貨物車両」には、それぞれ名称があります

①	主 部	述 部
	「何」が、	「どうする」。
貨車の名称	主 役	自動詞

例文 「タロー」が、「走る」。

②A	主 部	述 部
	「何」が、	「何」だ。
貨車の名称	主 役	補 役（「だ」「です」が自動詞に相当する）

例文 「タロー」が、「キャプテン」だ。

②B	主 部	述 部
	「何」が、	「どんな」だ。
貨車の名称	主 役	補 役（「だ」「です」が自動詞に相当する）

例文 「タロー」が、「おだやか」だ。 「タロー」は、「やさしい」です。

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「何」を、	「どうする」。
貨車の名称	主 役	目的役	他動詞

例文 「タロー」が、「ボール」を「蹴る」。

『文。』の「空の貨物車両」の名称としては、「主役」「自動詞」「他動詞」「目的役」「補役」の5種しかありません

これらは、『文。』の中での「役割」を示しています

本書では、これらの総称を、『文。』中の「役割」ということで「文役」と呼びます

≪「貨車」＝「文役」≫です

「補役」とは、《「主役」を「補って」説明する「役割」》という意味です

「目的役」とは、《「動作」の「目的・対象物」を示す「役割」》を意味します

系念 禾尔	『文。』中の役割の呼称
文役 『文。』中での「役割」 『文。』中の「空の貨物車両」	主 役
	自動詞
	他動詞
	目的語
	補 役

「文役」は、『文。』中での「役割」であることをしっかり認識・理解してください

Ⅱ 「文役」に「語句節」と「品詞」

『文。』の中で、規則的に並んでいる「空貨車」すなわち「文役」には、配置できる「語句節」「品詞」が本来的に決まっています（以下の表を参照してください）

「語句節」は、その「性質」に応じて、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」などと、いくつかの種類に分類されています（この分類のグループ名の総称が「品詞」です）
（「動詞」と一括せずに、常に「自動詞」と「他動詞」に「厳格区別」しましょう）

『文。』の「構造」に関する場合、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」の4品詞を考えれば十分です（この「構成4品詞」略して「名形自他」をしっかり認識してください）

《「語句節」の「性質」に着目した分類の「総称」》を「品詞」といいます
《『文。』中の「役割」》が「文役」です
「語句節の性質による分類＝品詞」「文中の役割＝文役」を確実に理解してください

次は、どの「品詞」がどんな「文役」になれるかの理解です

「名詞」 → 「主役」・「目的役」・「補役」になれる
「形容詞」 → 「補役」になれる ……というだけのことです

では、「文役」と「品詞」の関係を確認します

①	主 部	述 部
	「何」が、	「どうする」。
文役	主 役	自動詞
品詞	名 詞	自動詞

②A	主 部	述 部
	「何」が、	「何」だ。
文役	主 役	補 役
品詞	名 詞	名 詞

②B	主 部	述 部
	「何」が、	「どんな」だ。
文役	主 役	補 役
品詞	名 詞	形容詞

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「何」を、	「どうする」。
文役	主 役	目的役	他動詞
品詞	名 詞	名 詞	他動詞

「品詞」は、「語句節」の「性質」であることをしっかり認識・理解してください

「補役」には、②A「何だ」という「名詞補役」と、②B「どんなだ」という「形容詞補役」の2種類あることに注意してください

名詞補役（何だ）②A	「主役」の「職業・地位・内容」をあらわす
形容詞補役（どんなだ）②B	「主役」の「状態・性質」をあらわす

②Aは「名補」②Bは「形補」と、本書では略称します

①～③のような『文。』の「形態（型）」は、「作文者」が「どんなことをどう伝えたい」のかということから選択された「自動詞」もしくは「他動詞」によって支配されていることを確実に認識してください（ある意味、「動詞」は影の支配者なんですね）

「文役」と「品詞」のまとめ

文 役	品 詞
主 役	名 詞
目的役	名 詞
補 役	名 詞・形容詞
自動詞（「述語動詞」ともいう）	自動詞
他動詞（「述語動詞」ともいう）	他動詞

「構成要素」と「構造把握」

「文役」は『文。』中の「役割」の総称ですが、『文。』をどうつくっているのかという「組成」の観点からは、『文。』の「構成要素」と呼ぶこともできます

≪「文役」＝「構成要素」≫と考えてください

『文。』の「構成要素」とは、『文。』をつくる「必須の要素」ということです
また、『文。』中の役割（「文役」）を確定していくことを「構造把握」をいいます

「文役」

（ ＝

「構成要素」

）

「文役」とは、『文。』の「ルール」に従った、『文。』中の「役割」をあらわす総称で、本書では、『文。』を「構成」する「空の貨物車両」と例えてきました
「主役」「自動詞」「補役」「他動詞」「目的語」の5種類のみしかありません

「品詞」

「語句節」の性質に着目した分類の視点からの「総称」で、主に「名形自他＋副」

「構成4品詞」

『文。』の「文役（構成要素）」には、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」の4種しかねない

「初歩の段階」では、「英文」中の「品詞」と「文役」を丁寧に確定させていくのが、「英文読解」を上達させる「確実なルート」です

これを、「品詞分解（作業）」といいます、「構造把握」ともいうのです

「文役」は「主役」「自動詞」「補役」「他動詞」「目的役」で、『文。』の「組成」の視点から見ると「構成要素」であり、本書では、まとめて「主自補他目」「主自他目補」「主目補」等と略して表記したりします

それでは、「文役」と「品詞」の関係について、「英文」で見てみましょう

①	主 部	述 部
	「何」が、	「どうする」。
英文	T a r o	r u n s .
文役	主 役	自動詞
品詞	名 詞	自動詞

②A	主 部	述 部	
	「何」が、	だ（です）	「何」
英文	T a r o	i s	c a p t a i n .
文役	主 役	自動詞	補 役
品詞	名 詞	自動詞	名 詞

②B	主 部	述 部	
	「何」が、	だ（です）	「どんな」
英文	T a r o	i s	k i n d .
文役	主 役	自動詞	補 役
品詞	名 詞	自動詞	形容詞

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「どうする」。	「何」を、
英文	T a r o	k i c k s	a b a l l .
文役	主 役	他動詞	目的役
品詞	名 詞	他動詞	名 詞

『文。』の「イメージ」

『文。』という「舞台」の上で、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」という「俳優」陣が、「プロデューサー（作文者）」に選ばれて、「主役」「自動詞」「他動詞」「補役」「目的役」という「配役」について、様々な現事象を演じて伝達しているのです
第05講で学習しますが、舞台の「場面状況」「背景」が「副詞」なのです
「場面状況」「背景」が「配役外」「構成要素外」なのはわかりますね

本講の習得内容のまとめです

【 『文。』 の解析・読解の視点 】

- ① 「語句節」が『文。』中でどんな役割（「文役」）をしているのか（「文役」の確定）
- ② 「文役」には、どんな「品詞」が据えられているのか（「品詞」の確定）

『文。』の「構造把握」には、①と②の往復思考が大切なのです（「品詞分解（作業）」）

「名詞補役」は深すぎる・・・

「名詞主役」を「名詞補役」で「言い換える」ことは、恐ろしいほど深いものです

「職業・地位・内容」のうち「内容」と分類されるものが、怖いのです

「名詞」につきましては、「第07講」以下で、追々触れていきますが、様々な「名詞」（第15講参照）で、「主題・主役」を「言い換える」のです

「名詞」で「名詞」を説明するのは至難の業なのです（「形容詞」で「説明」するのは困難さのレベルが違います）

この「言い換え」は、「現代文」の訓練で鍛えるしかないでしょう

次講では、「自動詞」と「他動詞」について、詳しくみていきましょう

ここで、英語長文読解の勉強の開始時期や前提について一言させていただきます

高校初級中級レベルの現代文や現代文の語彙力の完成もないのに、英語長文を読んでも「砂上の楼閣」を地で行くようなものですよね

ですから、①現代文の基礎的問題集と②現代文用語集とさらには③漢文の基礎的問題集をある程度完成させてから、はじめて英語長文に進むべきです

というのも、当然、日本語で読めないレベルのものを英語で読もうなんていのは、時間・労力の無駄ですからね

日本語力や現代文のレベルを上げてから、英語長文読解に入りましょう

それまでは大学受験対策レベルの英文法問題集をの繰り返しや大学受験単語集の暗記につとめるべきです

重要な点を繰り返します

1. 文系で漢文を受験に使わないとしても、たった1冊の漢文問題集をやるかやらないかで読解力や人間力の深みが変わってきますので、必ず早めに仕上げてください
2. 理系の方でも、国語力は人間力・論理力・思考力・英文読解力の基盤ですから、漢文も含めて極力早めにやってください

第03講 厳格区別、「自動詞」と「他動詞」

「英文法」の学習において、「名詞の認識」「形容詞の理解」「自動詞と他動詞の厳格区別」「副詞の疎外」が、はじめの「関門」です

これらを乗り越えれば、けっこう見えてくるものがあります

また、「be 動詞」と「一般動詞」の区別なんて、ほとんど意味がありません
（「be 動詞」は「特殊な自動詞」というだけのことです）

本講では、「自動詞」と「他動詞」の違いを、「認識・理解」します

自動詞	「主役」の「動作」のうち、「他者」を巻き込まない、「主役」単独の一人だけの「動作」をあらわす
他動詞	「主役」の「動作」のうち、「他者（対象物）」を「巻き込む動作」をあらわす

I 「自動詞」は2種ある

「自動詞」には、①「自動詞」だけで意味が完結し「補役」の助けを必要としない「自立動詞」と、②「補役」により「主役」を説明・補完する「補完動詞」の2種があります（従来の完全自動詞だ不完全自動詞だという空疎な名称には言及する価値もありません）

これら、「自立動詞」と「補完動詞」の区別を確実に認識しなければなりません

①「自立動詞」は「主役の単純な動作」であるのに対し、②「補完動詞」は「主役」の「職業・地位・内容」を④「名詞補役」で、「状態・性質」を⑤「形容詞補役」であらわすという大きな違い、すなわち、①②の「補役の有無」や、④「名詞補役」か⑤「形容詞補役」かという重大な特徴を確実に認識・理解する必要があるのです

「自動詞」のまとめ

①	自立動詞	「主役」の単純な「動作」をあらわす 「補役」は必要ない
②④	「補完動詞」＋「名詞補役」	「主役」の「職業・地位・内容」をあらわす
②⑤	「補完動詞」＋「形容詞補役」	「主役」の「状態・性質」をあらわす

本書では、「自立動詞」の『文。』を「自立文型」と呼び、「補完動詞」の『文。』を「補完文型」と呼びます（従来の第Ⅰ文型だとか番号を振って何の効用があるのでしょうか）
（ついでに、略しまして、④は「名補文型」、⑤は「形補文型」と呼ぶべきでしょうね）

①「自立動詞」の例文です

A g h o s t i s .	「幽霊は存在する。」
T a r o r u n s .	「タローは走る。」
H a n a k o s l e e p s .	「ハナコは眠る。」

②「補完動詞」の例文です

① T a r o i s c a p t a i n . 「タローはキャプテンです。」
名詞補役（職業・地位）

② T a r o i s k i n d . 「タローはやさしいです。」
形容詞補役（性質・状態）

ここで、「r e m a i n」という単語を辞書で引いてみて、「補完文型」を確実に実感・認識してください

II 「他動詞」には「対象物」が伴う

「他動詞」には、「関渉動詞」「授与動詞」「拈術動詞」の3種がありますが、本講の段階では、「関渉（かんしょう）動詞」のみを確実に認識・理解してください

「授与動詞」は第18講で、「拈術（かくじゅつ）動詞」は第19講で学習します

「他動詞」は、「主役」が「他者（対象物）」に「働きかける動作」をあらわし、その中で、「対象物・目的物」＝「目的役」がひとつで、最も基本的な「他動詞」を「関渉動詞」と本書では呼び、「関渉動詞」が使われている『文。』を「関渉文型」と呼びます（一般には、第Ⅲ文型といいますが、番号呼称には辟易ですね）

T a r o <u>k i c k s</u> <u>a b a l l</u> .	「タローはボールを蹴る。」
関渉動詞	目的役

「他動詞」は、「動作の対象」としての「他者」「対象物」「目的物」、『文。』の「文役」でいう「目的役」が必要なことをしっかり認識・理解してください

次講では、「品詞」の理解のための先陣ともいうべき、「形容詞」についてみましょう

第04講 「品詞」の理解の関門「形容詞」

「品詞」の本当の理解は、「形容詞」の認識・理解と親しみからと、「副詞」の認識・理解と排除・疎外からはじまりますと言っても過言ではないでしょう
まず本講では、「形容詞」を認識・理解し、親しみを感じられるようになりましょう

はじめに、≪「形容詞」は、「名詞」の「状態・性質」を示す「品詞」である≫という大前提を認識・確認してください

ここで、「形容詞」の活躍する場は、Ⅰ「名詞修飾」と、Ⅱ「補役（主語修飾）」の2つあることを覚えてください（Ⅰ直接密着的な活躍か、Ⅱ『文。』中での間接説明補完的活躍かの違いを認識してください）

Ⅰ	名詞を修飾する 名詞修飾用法 (限定用法)	主に「名詞」の前に置かれて、①「名詞」の「状態・性質」（「名詞修飾」）を示し、②結果的に、「名詞」の範囲を限定することになる（「名修形」と略します）
Ⅱ	「補役」になる 補役用法 (叙述用法)	「自動詞」の後に置かれて、「主役」の「性質・状態」を「説明」する（「形容詞補役」で「形補」と略します）（『文。』の「構成要素」となっていることが重要）

「名詞修飾用法」の「形容詞」を「役外装飾族」と命名します（詳しくは後述）

Ⅰ 「名詞修飾用法」

I k n o w a c l e v e r b o y .
他動詞 **名修形** **中心名詞・中心目的語**

- ①「賢い」というのは、「少年」（名詞）の「状態・性質」を示しています
- ②「少年」が、「賢い」という「形容詞」によって、数多くいるだたの「少年」から、少数の「賢い少年」に「限定」されています

「限定」されるというのは、多数存在する「名詞」の中から、「形容詞」により、範囲が狭められ、話題になっている「名詞」が「少数化」「特定化に接近」することです

『文。』中での「名詞修飾形容詞」の行方・運命

ここで、重要なのは、「名詞修飾形容詞」の「運命」です

上記の例文では、『文。』の構成上、「b o y」が「目的語」で「構成要素」ですが、「c l e v e r」は『文。』の「構成要素」ではなく、「b o y」を「修飾」しつつ、構成上は「b o y」に「吸収」され「消滅」していくのです

そして、「構成要素」で「目的役」となっている「b o y」を「中心名詞」「中心目的語」と呼びます（「主役」の場合は「中心主語」で、「補役」の場合は「中心補語」です）（「中心名詞」は「中心主目補」の総称です）

このように、「名詞修飾形容詞」は「中心名詞」を修飾し、「中心名詞」に「吸収され・消滅する」運命にあり、「構成要素」とは無関係なのです

「名詞修飾形容詞」を「役外修飾族」と命名し分類することは後述します

「名語」と「名句」

a	h a n d s o m e	c l e v e r	b o y
名修形	名修形	名修形	名語（中心名詞）

これらは、4つの「単語」で構成されていますが、4つの「単語」を独立させて意味をとっても何の効果効用もありません

「4単語」で、ひとつの「意味のあるまとまり」としてとらえるのが通常です
そして、この「まとまり」を、「句」といいます（「名句」）

この「まとまり」が『文。』中にあったとすれば、真に「構成要素」として働くのは、「中心名詞」の「b o y」だけで、その他の3つの「単語（形容詞・形容語）」は、「衣装やアクセサリー」にすぎず、『文。』中では、構造上は「中心名詞」に「寄生」しているだけで、役割的には「中心名詞」に「吸収され消滅」してしまうのです
このような、「中心名詞」を核とし、様々な「（名修）形容詞」を伴った「意味のあるまとまり」を「名句」といいます（「定義」）

「b o y」は「1単語」なので「名語」ですが、「a b o y」は「名句」なのです
このように、《「複数の単語の意味のあるまとまり（集合体）」》を「句」といいます（ただの「群衆」とは異なる有機的集合体すなわち「社団」的なものを認識してください）（ここで・・・、「社団」・・・、わからない語は逐一きちんと辞書で調べるクセをつけてくださいよ）
他には、「形容句」と「副句」が重要です（第6講で学習します）

『文。』の「構成要素」の観点からのまとめ

I	名詞修飾用法	「中心名詞」を修飾し、吸収され、『文。』の「構成要素」ではなく、構造上は役に立っていない
II	補役用法	『文。』中で、「補役」という「構成要素」として、構造上、重要な働きをしている

「役外装飾族」（役者の衣装やアクセサリーのようなものです）

「名詞修飾形容詞」は、「文役・構成要素」ではなく「配役外」で、中心となる「名詞を装飾」するに過ぎない存在なので、本書では、「役外装飾族」と名付けます
「役者（中心名詞）」と「衣装・アクセサリー（名詞修飾形容詞）」の関係ですね

II 「補役用法」

① That boy is clever .
自 形容補語

もう、説明はいりませんね

「clever」が、『文。』中で、「形容詞補役」として、「重責」を果たしています

② Taro is a clever boy .
名修形 名修形 中心補語

名句で補役（名補句）

この例文では、文法的・構造的には、「タロー」が「少年」だ、という「中心補語」に重点がおかれた表現となっています（文脈的意味では、「賢い」ということが重要かもしれませんが・・・）

「clever」は「アクセサリー」に過ぎませんので、「clever」を取っても、「Taro is a boy .」で、「補完文型（名補文型）」であることに変わりはありません

しかし、①の『文。』で、「clever」を取ると、「Taro is .」となり、「タローは存在する」と、「自立文型」になってしまいます

取り去ると『文。』のかたちが変わってしまうような位置や働きにある「語句節」を「文役」や「構成要素」というのです

それにしても、「形容詞」という呼称はわかりにくいかもしれませんね
名前を示す「品詞」が「名詞」なら、「名詞」の「状態」を示す品詞は、本来「**状態詞**」とでもいうべきでしょうか（実態的には「**評価詞**」ともいえます）

「彼は病気だ」「ヤツは馬鹿だ」という場合、「病気だ」「馬鹿だ」というのは、「状態・性質」を示す「形容詞補役」なのが認識・理解できるようになりましたか

「名詞補役」と解すると、「職業・地位」や「モノ・コト」的に扱うことになり、「病気」「馬鹿」という「モノ・コト」とまるで着ぐるみ扱いのようになってしまいますよ

次講では、「英文読解」の「邪魔者」である「副詞」についてみていきます

合言葉は、「邪魔者は排除する」です

でも、「場面状況」を設定する、縁の下や場外の重要な担当者・裏方なんですね

.....

本講の補足確認点

本講の段階では、「補役」に関しては、「主役」を説明する「主格補役」のみを考え、「目的役」を説明する「目的格補役」については視野に入れておりません（第19講参照）

第05講 まずは、「副詞」を「排除」すべし

「形容詞」を理解し、「副詞」が解れば、「品詞」の理解はおおよそ終わったも同然と言っても過言ではないでしょう（あとは、どんどんみえてきます）

「副詞」は、はじめのうちは暗記することが多く大変に思えますが、覚えてしまえば「英文読解」が非常に楽になりますので、しっかり認識・理解・暗記してください
そして、《「副詞」は、『文。』の「構造把握」のために「排除」する》が合言葉です

本講では、「副詞」の正体について、詳しく見ていきます（正体を知り排除するのです）
今まで見てきた「名詞」「自動詞」「他動詞」「形容詞」は、「文役・構成要素」でしたが、「副詞」は「構成要素」ではありません（「構成要素」外の邪魔者なのです）
ですから、「構造把握」のために、「副詞」（敵）を知り「ハブ」くのです

また、『文。』全体の意味の観点からは、実態的には、《「副詞」は、『文。』の「場面状況」を設定している》ということを認識・理解してください（「舞台背景」の設定）

「役外状況族」

「副詞」は、「文役・構成要素」ではなく、外から『文。』の場面状況を設定している」という意味で、「役外状況族」と本書では呼びます（舞台の背景といえます）
本来、「副詞」というわかりにくい命名よりは、「状況詞」とでもいうべきものです

まずは、「副詞」という名前がわかりにくいですね

「副える」ということですが、何に副えるのでしょうか

まずは、「形容詞」「動詞」『文。』にそえているということを認識してください

実態は、主語自体の「状態」は「形容詞」、主語の外部環境の「状況」は「副詞」と理解してください（「形容詞」は「衣装・アクセサリ」、「副詞」は「舞台背景」ですね）
従いまして、「形容詞」は「状態詞」、「副詞」は「状況詞」なのです

まずは、「副詞」の「役割」と「きまり」を具体的にみていきます

「副詞三原則」

「副詞三原則」というものがあり、まずは、これを覚えなければなりません

原則Ⅰ <<「副詞」の「性質」>>

原則Ⅱ <<「副詞」の「意味内容」>>

原則Ⅲ <<「副詞」の「修飾先」>>

「完全暗記」だ！ ガンバロウ！！

原則 I

「副詞」の「性質」

- 1、「文役」「構成要素」「主自補他目」にはなれない
- 2、『文。』のどこにでも置かれる（文頭・文中・文末）
- 3、意味の強い「副詞」が文頭にくると、「倒置」が起きやすい

3は、本講の段階では、重要性が低いので、触れません
本講では、「2、」について見ていきます

He met that girl .

「時をあらわす副詞」の「yesterday」は、この英文の、どこにでも置けます

(① 頭,) He (, ②文中・挿入,) met (, ③,) that (, ④,) girl (, ⑤文末).

①の「文頭」（カンマを後ろにつけることが多い）、⑤の「文末」（カンマを前につけることがある）は当然のことながら、②の「文中」（「挿入」といい、前後にカンマを置くことが多い）も可能であります。④は、「that girl」という「名句」の「まとまり」の中に「挿入」するのは意味が不明瞭となり、「句」や『文。』を完全に分断してしまうので、通常はありえないでしょう

③は、「他動詞」と「目的語」の間であり、④ほどの緊密性はないので、可能ではあります。かなり修辭的表現を狙ったものとなるでしょう

ここでは、「カンマ（コンマ）」というものに注目しておいてください

「カンマ」は、『文。』の「構造」をわかりやすくしてくれているものなので
多くは、「副詞」との絡みで使われます（「同格（第07講参照）」でも使われます）
すなわち、「副詞」があることを明示してくれているのです

「挿入」で「カンマ」がないとわかりにくいときがあるので、「カンマ」で「副詞挿入」を明示してくれているのです

特に、「挿入」の場合、両端に「カンマ」があることに注意してください

「カンマ」から「カンマ」は「()」で括って、「副詞挿入」として「排除」して、「構造把握」をしてください

He met (, yesterday,) that girl .

「挿入」の「副詞」の「yesterday」は「()」で括り、「排除」しましょう

原則Ⅱ

「副詞」の「意味内容」

「副詞」の「意味内容」としては、

①「時」②「場所」③「程度」④「頻度」⑤「目的」⑥「手段」⑦「理由」⑧「条件」⑨「譲歩」⑩「否定」⑪「付帯状況」⑫「結果」⑬「その他」など、様々あります

①～⑫は「完全暗記」するのが得策です

覚えるのは、はじめのうちは大変ですが、日常生活で意識したり、英文を注意して見ていれば、すぐに慣れます

では、「疑問副詞」を利用した、次の表を参考にして、「副詞」のイメージをつくりあげてください

簡略な意味	疑問副詞	日本語での意味内容	英語の語句節例
①時（いつ）	w h e n	～のとき	today tomorrow
②場所（どこで）	w h e r e	～のところで	here there
③程度（どのくらい）	h o w	どのくらい	hard
④頻度（どのくらい）	h o w ～	どのくらい	often sometimes
⑤目的（なんのために）		～のために	不定詞句、so that 節
⑥手段（どうやって）	h o w	～で	by 語句、with 語句
⑦理由（なぜ）	w h y	なぜなら	because 節
⑧条件（もし～なら）		（もし）～なら	if 節
⑨譲歩（～だけれども）		～だけれども	though 節

⑩「否定」の「n o t」も「副詞」です

以下の「否定の副詞」も覚えてください（「n o t」と同時に使うことはありません）

⑩否定 4 単語

h a r d l y	ほとんど～ない
s c a r c e l y	
r a r e l y	めったに～ない
s e l d o m	

「n o l o n g e r（もはや～ない）」等は、「群否定副詞」と考えてください

⑪「付帯状況」は、本講では扱いません（別巻でとりあげる予定です）

⑫「結果」は「不定詞」の講で説明します（第11講参照）

原則Ⅲ

「副詞」の「修飾先」

「形容詞」は「名詞」を「修飾・説明」するのに対して、

「副詞」は、①「動詞」、②「形容詞」、③「副詞」、④「『文。』全体」を「修飾」します

① He runs fast. (速く走る)

自 ← 副

② He is very fast. (とても速い)

副 → 形補

③ He runs very fast. (とても速く)

副 → 副

④ Truly, he runs fast. (本当に、)

副 → 『文。』

「副詞」は、構造上は、「動詞」「形節詞」「副詞」「『文。』全体」に吸収され・消滅する「文役外」「役外族」なのがわかりますよね
「役外状況族」という命名が実感できますでしょうか

ちなみに、

本書では、「間投詞」は、感情をあらわす、独立的な「副詞」と考えます
「oh」「thanks」など

「副詞」は「動・形・副・『文。』」に「副える」というところからの命名でしょうが、いまひとつわかりにくいですね

分析的視点からは、「形容詞」は「中心名詞」やその他の「名詞」の状態を示す「状態詞」と命名されるべきで、「副詞」は「中心名詞」やその他の「名詞」の外の状況を示したり、「動作（動詞）」の状況や「形容詞」の状況を示す「状況詞」と命名されるものであるべきことを実感できたでしょうか

ここまでは、「単語」で、「品詞」（主に「名詞」「形容詞」「副詞」）、「文役」「構成要素」（「主役」「目的役」「補役」）を考えてきましたが、これからは、「意味のある大きなまとまり」すなわち「句」と「節」で、より大きな「名詞」・より大きな「形容詞」・より大きな「副詞」を見ていきます（中型や大型の「名形副」）

次講で、「句」からはじめましょう

「本講」から「第09講」まで、「品詞」の拡大、すなわち、「句」「節（『文。』の転換）」を学習します

第06講 「前置詞」なんて空疎な呼称はやめて、『成句詞』+「後属役名語句」=「形容句か副句』でいくべし！

（「前置」って何の前に置くの、「名詞」っていうわけ、で、だから何が起こるの・・・）
本書では、「前置詞」という形式的で空疎な品詞名をやめて、「形容句」または「副句」をつくるという実質的役割に着目してあらたに命名し、「成句詞」とよびます

いよいよ、「単語」のレベルを離脱して、「複数の単語による意味のあるまとまり（語集団）」すなわち「句」「節」のレベルに入って、「品詞」が拡大していきます
英語の「構造」がどんどんわかってきて、楽しくなりますよ（「複雑高度化の実感！」）

本講では、「句」についてみていきます（「名句」は「第04講」参照）

「句」ってなんですか・・・、からはじめましょう

表現を拡張させるために、ふたつ以上の単語を連携させて、「1単語」ではあらわせない複雑高度な意味を、単語の集団で新たに作り上げていくのが「句」です

「句」は、ほとんどが「成句詞（前置詞）」によってつくられます

「成句詞」による「句」は、「意味のあるまとまり」として、「形容詞」か「副詞」としてしか働きません（「名句」の代用の場合もありますが、稀有です）

「句」による「形容詞」「副詞」ですから、「形容句」「副句」と呼びます

ある「状態」「状況」が1語の「形容語」「副語」であらわせないような場合は、「成句詞」を使って、複数の単語を連携させて、新たな「形容詞」「副詞」をつくっていくのです

例えば、「今夜に」は「tonight」の1語の単語がありますが、「朝に」は1語の単語がなく「in the morning」の3単語による「句」であらわし、「成句詞」が必要なのです

また、使い慣らされているせいか、「成句詞」が消えてしまっているものもあります
例えば、「every day」「last year」などがそうです

このような場合は、一見、ただの「名句」に見えてしまうので、注意が必要です

成句詞

成句語（前置詞）

成句句（群成句詞）（群前置詞）

複数の単語が集合して、一語の「成句詞」として働いている場合もあります（群成句詞）

「後属役」「後属語」「後属句」とは

「成句詞」が「支配」している「名詞」を一般には「目的語」といいますが、「他動詞」の「目的語」と「同名」で、両者の呼称が同じなのは紛らわしく、別の呼称が望ましいので、「後属役」「後属語」「後属句」とでも別に「命名」するのが合理的だと思います（「属」の字に注意、「成句詞」の「後ろ」で「従属」しているのです）

「形容句」「副句」でも、その働きは1単語の「形容語」「副語」と同じです

「成句詞」＋「後属役名詞」	「形容句」	「名語修飾」をする
		「補役」になる
	「副句」	「副詞三原則」が該当

① The girl in our class is very pretty.

中心主語	形容句	後属語	自	形補
主		役		

② The girl plays soccer in that park.

副句・場所	後属語
-------	-----

①は「名詞修飾形容句」で、②は「副句」の例ですが、「形容句」か「副句」か曖昧で、どちらとも解釈できる場合もあります

次の『文。』は要注意です

③ The girl is in good condition.

形容句の補役

この場合、「in good condition」を「よい状態の（場所に）」、「いる（is）」と状況的にとらえるよりは、「よい状態」「である」と、「状態・性質」をあらわす「形容句の補役・補句」と考えたほうが自然でしょう

（「1単語」の場合は「補語」で、「句」の場合は「補句」で、両者をあわせて「補役」と総称します）

このように、「形容句」が「補役」として働く場合もあるので、注意してください

The cherry trees are in full bloom.

この英文を実感できますでしょうか

《「成句詞」＋・・・＋「後属語（句）」》

「成句詞」を見つけたら、確実に「後属語（句）⇒名語（句）」を抑えてください
「成句詞」と「後属語」の間には、多くの「後属語を修飾する形容詞」やその「形容詞」を修飾する「副語」がある場合が多いです

それらの、「役外族」に惑わされずに、「後属語」を認識してください

「成句詞」には「○」を付け、「後属語」には「」を付けたりするとよいでしょう（くれぐれも・・・「後属語（句）」は「名語（句）」です）

《「成句詞」＋・・・「副詞」「形容詞」・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》

さらに、「後属語」の後ろには、その「後属語」を修飾する次なる「形容句」や「形容節」がくっついていたりします（「形容節」は後述します）

これらの、「形容句」「形容節」は「後属語」に吸収され・消滅する運命で、「後属語」とは一体ですから、《「成句詞」＋・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》で、どこまでが「成句詞」に支配された「まとまり」なのかを確実に認識してください

「with a deeply mysterious girl whom I met at the snow festival」

という例句をあげておきますが、習得は「基礎的英文読解」時で十分です

「前置詞」は、その性質からして、「成句詞」と命名されるべきものだということがおわかりいただけたでしょうか

そして、「look at ～」のような「自」＋「副句」を「熟語」というのはもうやめましょう

補足です

「群成句詞」（「群前置詞」）

厳密に言えば、「成句詞」というものに関しては、通常は1語のものを前提視しているのが一般で、その点で、「成句語」というべきでしょう

しかし、たまたま一語の「成句語」が無かったり、1語の「成句語」では示せない（複雑高度な内容を表したい）場合等は、数語で1語の「成句詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には「成句句」ですが、「群成句詞」ともよびます）

例えば、「in front of」です

これ以上品詞分解をしても効用はないので、1語の「成句詞」のように扱うのです
その他には、「out of」「because of」「up to」「thanks to」「as to」「by means of」「in spite of」等が有名です
これらは、一語の「成句詞」のようなつもりで覚えてしまうのが得策です

次講以降では、「句」を越えて、『文。』をまるごと、「名詞」化・「副詞」化・「形容詞」化してしまう様子を見ていきましょう・・・すなわち、「節」の学習です

(以下は、「ここで理解できたらホンモノ」という、「文法マニア」向けの記述です)・・・通常一般人は、回避してください
さらに、発展的補足です(今は読み流し、「第12講」終了後に戻ってきてください)
以下に示す、「o f 形容句の構造的由来」は、今の段階では少し難しいかもしれませんが、本書は「理解可能な順での理解の積み上げ方式での講義形態」をとっていますので、「第12講」あたりまで終了したら戻ってきて再読すれば容易に理解できるはずです(関連性から「句」をテーマにした本講で補足しましたが、本補足の完全理解のためには「第12講」までの理解が必要かと思われますことをご承知おきください)

「o f 形容句」の「構造的由来」

『 B o f A 』という形態の場合、

、
「o f A」は「形容句」で「修飾句」であり、「B」は「被修飾語句」です

「A」も「B」も「名語句」しかありません

「名語句」は「主語句(主役)」「目的語句(目的役)」「補語句(補役)」「後属語句(後属役)」にしかありません(「主役」「目的役」「補役」については、「第09講参照」)

ここで、『 B o f A 』という形態には、「元の『文。』」というものがあり、その「名詞化」であると考え、A」には、「主役由来」「目的役由来」「補役由来」の三種があるのです

特に、「補役由来」は「同格」と考えられます(「第07講」「第12講」参照)

ここで、辞書を引いて、「主格のo f」「目的格のo f」を丹念に検討し、≪「品詞」の転換(派生語)による『文。』の名詞化≫を認識・理解してください

以上の考え方は、「名詞構文」といわれているものの基本思考です

「名詞構文」という項目(講目)は、難しいイメージでぶち上げられ、一部では儲けのネタになっているようですが、ごくごく簡単なものです

「名詞構文」といわれているものの本質は、「『文。』の名詞化」(「第07講」「第09講」や「第12～14講」参照)のひとつであり、「『文。』の名詞化」という大きな視点のもとで、①「『文。』まるごとの名詞化(「第07講」参照)」②「不定詞による『文。』の名詞化(「第11講」参照)」③「分詞による『文。』の名詞化(「第12講」参照)」に続く、④「品詞の転換(派生語)を伴う『文。』の名詞化」に過ぎないのです

(ですから、「第12講」が終了した段階で、本補足に戻ってくれば、容易に理解が深化します)

第07講 「成節詞」が「名節」「副節」をつくる

言いあらわしたい「もの・こと」「状態」「状況」が、どんどん複雑高度になるにつれて、「1単語」だけの世界では、あらわすことが困難になってきます

まずは、「成句詞」を利用した「句」というレベルに、さらには、『文。』まるごとを「名詞化」「副詞化」「形容詞化」してしまおうという「節」のレベルにたどり着くのです

「今、山で、桜を見ているの。」「春の光がいっぱいです。」「桜はどんどん散っていきます。」「でも、どうしてこんなのどかな陽のもと落ち着いた心もなくあわただしく桜が散るのか寂しくなりました。」というのは、「詩」的ではありますが、一般の「説明文」としては幼すぎます

幼児のように、思いつくまま、『文。』を吐き出せばいいというものではありません

「春の光がふりそそぐ今、山であわただしく桜が散り行くのを見ながら、のどかな陽のなかにもかかわらず、落ち着いた心もなく散り急ぐ桜に私は寂しさを感じた。」とでもなるのでしょうか

一般では、「数『文。』」であらわされた同内容を「1『文。』」であらわすことが通常なのです（このような処理技術として必要なのが、「節」です）

このように、思考・伝達の高度化に伴い、一般の「説明文（評論文・論説文）」では、不明瞭にならない程度に、多くの『文。』を「1『文。』」に凝縮しようとするのです
そこでは、『文。』の「名詞化」、『文。』の「副詞化」、『文。』の「形容詞化」という「テクニック（技術・方策）」が使われるのです（『文。』の「形容詞化」は、「形容節詞」を使う特別な技術・方策なので、別に「第22・23講」で説明します）

『文。』が「名形副化」されてしまうと『文。』ではないので、「節」といいます

本講では、「成節詞」という特殊な「品詞」による《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を見ていきますが、ここでは、「成節詞（従属接続詞）」という「構成要素」外の「手段的」な「品詞」が「節」をつくるという重要な働きをしていることに注目してください（「形容節詞」も大きな「形容詞」をつくる「構成要素外的手段的な品詞」です）

複雑な『文。』は、「名節詞」「副節詞」「構成来形容節詞（関係代名詞）」「役外来形容節詞（関係副詞）」をたよりに、解きほぐせばよいのです（それぞれ順次説明します）
では、本講で、以下、《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を順次見ていきましょう

『文。』を「名詞化」「副詞化」ということは、「構成要素としての主目補」や「役外状況族」として働かせることであって、もう『文。』ではありません

「元『文。』」であって、『文。』とは呼べず、「節」と呼ぶのです

それぞれ、「名節」「副節」と呼びます

本書でいう「成節詞」は、従来「従属接続詞」といわれています

「従属接続詞」とは空疎な命名ですが、仮に「従属接続詞」という場合は、そのフルネームが重要であり、単に「接続詞」ということは許されません

というのは、「接続詞」には、「等位接続詞」と「従属接続詞」があって、それらは全く別の働きをするので、きちんと分けなければならないからなのです

しかし、本書では、両者を命名から分け、「従属接続詞」を「成節詞」と呼びます

本論からそれますが、まずは、「等位接続詞」を見てみましょう

(本書では、しばしば、「等接」と略します)

「等位接続詞」は、《「語」と「語」》、《「句」と「句」》、《「節」と「節」》、
《「『文。』」と「『文。』」》を同等に連結させます

「and」「but」「or」が代表です

「and」で、いくつか見ておきましょう

Yuki and Tomo are cousins.

「単語と単語」

They write songs in the morning and in the evening.

「句と句」

She knows that they love songs and that they want to be singers.

「節と節」

They studies music and Nari teaches them it.

「文と文」

とにかく、「等位接続詞」と「成節詞（従属接続詞）」はきっちり分けてください

「等位接続詞」は「接続詞」といってもいいでしょうが、「成節詞（従属接続詞）」は「接続詞」というよりは、《「『文。』」を「名詞化」「副詞化」する「手段的」な「品詞」》ですから、巨視的には「転換詞」とでも「命名」すべきようなものです
また、「接続詞」という名称から、「国語」の授業や試験でいう「接続詞」と一緒にしないでください

「国語」でいう「接続詞」は、「段落と段落」や「『文。』」と「『文。』」との文脈的流れを滑らかにする「副詞」的な「接続語」と呼ばれるべきものであって、「英語」の「等位接続詞」や「成節詞（従属接続詞）」とは、全く違ったものとみるべきです

では、本論の「成節詞」に入ります

（本書では、ほとんど「従属接続詞」という語を使いませんが、使う場合「従接」と略すことがあります）
（「名節」や「副節」に対して、本体の『文。』を「主節」といい、「名節」「副節」を「従属節」といって、本書では「従節」と略しますので、「従接」と「従節」の使い分けに注意してください）

「成節詞」は、『文。』を「名詞化」「副詞化」する一種の「装置」のようなもので、「成節詞」は、『文。』が「名詞化」「副詞化」されている場合の「目印」なのです

成 節 詞	
名節詞	t h a t 節・w h e t h e r 節・i f 節・w h 節
副節詞	w h e n 節・b e c a u s e 節・i f 節・t h a t 節・・・等

「名節」をつくる「成節詞」を「名節詞」とよび、「副節」をつくる「成節詞」を「副節詞」とよびます

「名詞」の働きをする「名節」をつくる「名節詞」は上記の「4種」しかありません（「w h 節」については、講を改めて、第08講で学習します）

「副詞」の働きをする「副節」をつくっている「副節詞」は、「副詞3原則」の「Ⅱ意味」の数以上に多数ありますので、講の末に、別表にまとめておきますが、今すぐに完全に覚えようとしないでください（こんなものがあるのかという程度で十分で、順次、ゆっくり覚えてください）

「成節詞」は、『文。』をまるごと「名詞化」「副詞化」するわけですから、
«「成節詞」＋「完全な『文。』»となります
「形容節詞（関係代名詞・関係副詞）」との関係で、«「成節詞」＋「完全な『文。』»という視点は重要なものですから、しっかり認識してください

では、具体的に「名節」「副節」を見ていきますが、まずは「名節」です
日本語では、『文。』に「～ということ」という「成節詞の t h a t 」にあたるものをつけるだけで、『文。』がまるごと「名詞化」してしまいます
こんなことを再認識しつつ、「名節」をみていきましょう

「名節」をつくる「成節詞」である「名節詞」は、「t h a t」「w h e t h e r」「i f」しかありません

あとは、第08講で学習しますが、「疑問詞」と呼ばれているものが、「名節」をつくり、「名節詞」を兼ねています

「名節」は、あらたなる大きな『文。』の中で、「主役」「目的役」「補役」になります

「名節」のまとめ

種 類	意 味	働く場面
t h a t 節	～ということ	「主目補」
w h e t h e r 節	～かどうかということ	「主目補」
i f 節		「目補」
w h 節・疑問詞節	(疑問詞に応じて意味多数、第08講で詳説)	「主目補」

- ① Whether he finished it is not important .

名節主役

形補

「彼がそれを終えたかどうかということは、重要ではない。」

- ② The fact is that she has been ill .

主

名節補役（名補節）

「事実は、彼女がずっと病気だったということです。」

- ③ He asked if I wanted to go there .

主

名節目的役（名目的節）

「彼は、私がそこに行くことを希望しているかどうかということを尋ねた。」

「成節詞（名節詞）」を手がかりに、(元)『文。』のような「意味のあるまとまり」として認識し、それが「主目補」のいずれとして働いているのかを確定してください
はじめのうちは、「名節主役」とか「名節補役」の確定に苦勞すると思います

また、「名節補役（名補節）」の場合は、「主役」の概念的説明になっているので、意味をとるのが大変でしょう（「問題事項」の「言い換え」という、現代文読解の要です）

まずは、「主目補」を確定し、「文法」に忠実な「直訳」に徹してください

例えば、「The fact is that～」は「熟語」で「実は～なのです」と訳すようにいわれますが、まずは、「The fact」が「主語」で、「is」が「自動詞」で、「that～」が「名節補役（名補節）」というように、「文法・品詞」的に確定させて、「事実は～ということです」と「直訳」するのが真の理解への近道です

④「主語」「目的語」「補語」というのは、「1 単語」の場合であり、「句」や「節」による場合は、「主句」「目的句」「補句」、「主節」「目的節」「補節」、総称して「主役」「目的役」「補役」と言うべきでしょう

II 「副節」

では、次は「副節」ですが、「副節」にも、「副詞3原則」があてはまります

原則Ⅰ・・・性質

①『文。』の「構成要素」である「主自他目補」には、なれない
②『文。』の「構成要素」の隙間のどこにでも置かれる（文頭・文中挿入・文末）

原則Ⅱ・・・意味

①時、②場所、③程度、④頻度、⑤目的、⑥手段、⑦理由、⑧条件、⑨譲歩、
⑩否定、⑪付帯状況、⑫結果、⑬その他様々

原則Ⅲ・・・修飾先

① 詞修飾、②形容詞修飾、③副詞修飾、④『文。』全体修飾

「副節」は「（ ）」で括り、排除して、「主節」を確定して読んでいかなければなら
ないのです（「原則Ⅰ①」）

「原則Ⅰ②」では、「（，挿入，）」に注意してください

では、多数ある「原則Ⅱ」の意味をまずは日本語で見ていきましょう

次の例文の の中には、どんなことばが入るでしょうか

「私は、私が彼女を好きになった 、彼女に告白した。」

節の意味	副 節（従属節）	主 節
時	私が彼女を好きになった <u>とき</u> 、	私は、彼女に告白した。
場所	私が彼女を好きになった <u>ところで</u> 、	私は、彼女に告白した。
理由	私が彼女を好きになった <u>ので</u> 、	私は、彼女に告白した。

日本語では、『文。』に様々な「成節語（接続助詞等）」を付けることで、『文。』を「副
節」化し、「主節」の「場面状況」を設定しています

ほかにも、「主節」を変更すれば、「条件」の「私が彼女を好きなら」、「私は、彼女に告白するでしょう。」や、「譲歩」の「私が彼女を好きになったけれども」、「私は、彼女に告白できなかった。」なども考えられます

◀◀「場面状況」の「副節」▶▶+◀◀「主節」▶▶という「構成」に着目してください

では、英文で見てください

節の意味	副 節（従属節）	主 節
時	When I liked her,	I told her love.
場所	Where I liked her,	I told her love.
理由	Because I liked her,	I told her love.
条件	If I like her,	I will tell her love.
譲歩	Though I liked her,	I couldn't told her love.

英語では、『文。』の頭に、「成節詞（副節詞）」をつけるだけなので
「形式的」に明瞭で、一見してわかります
（「副節」を「主節」の後に置くことや「主節」の中に「挿入」することも可能です）

「s o . . . t h a t ~」の「再認識」

「程度」をあらわす「副節」も見てください
「s o . . . t h a t ~」構文というものです

I was very hungry .
副 形補語

「とてもお腹が空いた」と言っても、様々な程度があります
その程度すなわち「形補語の状況（程度）」を「t h a t 副節」で具体的詳細に伝えようとするのが、この構文なのです

I was so hungry that I couldn't walk .
副 副節（「s o」の具体的詳細）・程度

「s o」で「そんなに」といっても、「どんなに」かがわからないので、「t h a t 副節」で詳しく伝えているのです

「私は、私が歩くことができなかったほど、そんなに空腹だった」と「直訳」します
「私は、空腹だったので、歩くことができなかった」というような、「慣習訳」や「感覚訳」「意識」は、「入門者」「英語苦手組」には禁物です

「意識」で喜んでいると、いつまでたっても、「文法力」「構造把握力」「論理力」はつきません

一般では、「不自然な日本語」を嫌い、「自然な意識」を強要しているようですが、「英語の苦手な人」は「語学のカン」にあふれているわけではないのですから、「語学感覚にあふれている方」のための「特殊なやり方」で浸透するはずもありません
まずは、「徹底した文法」「徹底した構造把握」に「徹底した直訳」です

そこから、多少不自然であれ、論理的に出でくる「直訳」を納得してから、「自然な日本語」とやらの、修正すればいいのです（実際は、「記述試験」対策時です）

同じ現象に対しても、「英語」と「日本語」では、受け取り方や表現には感覚等の違いがあるのですから、無理矢理、「英文」から直接に「自然な日本語意識とやら」にもっていく必要はないというか、無理です

「文法的論理的直訳」という「中間項」をはさむべきでしょう

「辞書」や「参考書」では、「苦手な学習者」のために、できれば、「直訳」「意識」の両者を併記すべきでしょうし、そうであれば、ありがたいものですね

「英文」が読めるようになることが「目的」で、そのために、様々な「手段」を考え、採用すべきであって、「自然な日本語訳」ができるようになることが「目的」ではないはずです（世間は、なんでまあ、自然な日本語訳にこだわり押し付けてくるんでしょうか）

しかも、「自然な日本語訳」が要求されるのは、「長文読解」ができるようになったあとの、「答案作成」の段階でしょう

「1『文。』の文法的英文読解」ができない人に「自然な日本語訳」を強要してみたところで、教える側の「勝ち誇り」以外に得るものがあるのでしょうか

英文読解を語る前に、論理を指導する以上、少なくとも化学と現代文と古文の大学受験指導経験は必須なのではないでしょうか（英語一科目のみの指導はあまりに狭窄に過ぎるでしょう）

「英語が苦手な方」「初級レベルの方」は、

①まず「品詞の認識」と「品詞分解」の中で、様々な「句」「節」を判別し、②「名語句節」と「形補（語句）」に注目しながら「文役」を確定し、③どの「形容詞（語句節）」がどの「名詞」にかかっているか、どの「副詞（語句節）」がどの「形容詞」「副詞」「動詞」にかかっているかを確認し、④「動詞」の使用法を確認して、「文法的な」「逐語訳」に努めてください

ここで、「英文読解」の「障害物」ともいうべき「同格」というものを紹介します

Ⅲ 「同格」

「名語句同格」

«「中心名詞」が、直前直後に置かれた「名語」「名句」により説明・限定を受ける場合»をいいます

He is our hero Saigo.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で補役だと考えます」
私たちの英雄（「説明部分」）「である」西郷（「中心補語」）

「同格」は「である」「の」で訳して、「中心補語」を具体的に説明しています

Nobunaga, a famous samurai, is a hero.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で主役だと考えます」

「有名な武将である信長は英雄だ。」「信長は、有名な武将であるが、英雄だ。」

「である」で訳す方法と、「であるが」で挿入的に訳す方法があります
「中心名詞（主語）」の「信長」を具体的に説明しています

「名節同格」

ここで、「that 節（～という）」「whether 節（～かどうかという）」を使った、「名節同格」という説明手段を紹介します（「if 節」は使えません）
ある「名語」に、「自動詞」をはさんだ「名補節」としてではなく、«直接に、「節」による説明を加えたい場合の方法»が「名節同格」です（「第12講」参照）

The fact that she knows it is a good thing.

名語 = 同格節 名補句

「名語句」＋「同格節」全体で「主役」
「～という事実」

この枠内はマニアックなので回避してください

ここで、重要な観点は、「名節同格の由来」と位置付けの大きな視点です

「同格の t h a t」を各論的に提示しても瑣末な知識の羅列の一端にすぎません

「同格の t h a t」は①何のために②何処から来たのかという視点で整理できるかが重要なのです

「The fact is that she knows it .」 という「that名節」を「補節（補役→「第09講」参照）」とした、「補完文型」である「元の『文。』」があり（②）、この「元の『文。』」全体を「名詞化」しているのです（手段）

「that the fact is that she knows it」としなくてよいのです（簡便な手段なのです）

高度な内容を「1『文。』」で提示するために、小さな『文。』を「名詞化」し、次の大きな『文。』に「主目補」として投入するのが目的です（①）

以上のように、「現象（結果）」を「原因（由来）」「目的」「手段」等から位置づけられるような視点・思考方法を身につけてください

I have the question whether she will read my letter .
名語 = 同格節

「名句」＋「同格節」全体で「目的役」

「～かどうかという疑問」

「同格節」は、実態的には「先行する名語」を後ろから修飾するような「形容節」的な働きをしていますが、「事実」や「疑問」そのものを修飾しているわけではなく、その具体的内容説明であり（「私が知っている事実」と「私があの事実を知っているという事実」との違いで、前者は、「何を（事実）」を直接修飾しています）、また「元の『文。』」では「名補節」であることから、「名節」が付加されていると考えるべきなのでしょう（「第22講」の「形容節」参照）

「同格」になる「名語」は限られていますが、ここでは深入りしません（辞書の「従属接続詞」の「t h a t」を参照してください）

「同格」の形式的特徴は、

≪「名語句」＋「t h a t」＋「完全な『文。』」≫

≪「名語句」＋「w h e t h e r」＋「完全な『文。』」≫ です

実質的特徴は、「完全な『文。』」で「名語句」を具体的に説明していることです

「同格」の「o f」

B o f A という場合のうち、

「AというB」と訳し、「o f A」が「B」の具体的内容を説明するものです
「B」に関して「A」が具体的に補足説明しているのですが、最初に説明した「名語句同格」の場合は（言い換えという性質が強いところから）「同格」といってもいいのですが、「o f A」という形からして、明らかに「形容句」であり、「同格」とはいいづらいものではありませんが、「自立文型」や「t h a t 節同格」の簡略形と考えられます（主格の「o f」と比較検証してみると、主格の場合は「o f A」の部分が「主役」に相当し、「同格」の場合は、「o f A」の部分は「補役」で「B」の部分は「主役」に相当します）
例文をあげておきますが、「同格のo f」を辞書で一通り目を通しておいってください

t h e c i t y o f Y k o h a m a → T h e c i t y i s Y k o h a m a .
横浜という都市（横浜市） 「i n」とは違いますね

t h e f a c t o f h i s k n o w i n g i t （「第12講参照」）
彼がそれを知っているという事実
→ T h e f a c t i s t h a t h e k n o w s i t .
（これは、「t h a t h e k n o w s i t」を、「分詞」を利用して簡略的に「名詞化」したものです）

次講では、「疑問詞」が「名節」をつくる様子をみてみましょう

「ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）

少し発展的な補足をいたします

「群成句詞」と同様、「群成節詞」（「群副節詞」のみ）というものがあります

「群成節詞」「群副節詞」（「群従属接続詞」）

「成節詞」の場合も、一語の「成節詞」では表せない複雑高度な場合等は、語集団で一語の「成節詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には、「成節句」ですね）
「群名節詞」はありませんが、「群副節詞」は多数あります
「a s f a r a s」が有名ですが、辞書で調べてみてください
これ以上品詞分解をしても有用ではないので、一語の「成節詞」として扱います
以下の「副詞系の使われ方」の表を参照し、辞書の例文を見てください
これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策です

副詞系の使われ方

意 味	副節詞と群副節詞		不定詞副詞的用法	分詞の副詞的用法(準副節)
①時	when, while, before after, since, till, until, once <u>as soon as</u> , <u>every time</u> <u>by the time</u> , <u>the moment</u>	as 「as 節」 の有無、 以下同様	(無)	～するとき
②場所	where		(無)	(無)
③程度	so～that, such～that	as (比較)	～するほど	(無)
④目的	(,)so that, (,)(so) that <u>in order that</u> lest, <u>for fear (that)</u> <u>in case</u>		～するために (in order to)	(無)
⑤理由	because, since <u>now that</u> , <u>seeing that</u> for (等位接続詞)	as	～して… (原因) ～するとは(判断)	～なので
⑥条件	if, unless, but, given suppose, supposing provided, providing granted, granting		～したら	もし～ならば
⑦譲歩	though, although <u>even if</u> , <u>even though</u>	as	(無)	～だけれども
⑧否定			(無)	(無)
⑨結果	, so(that)		…したその結果～	(無)
⑩付帯状況			(無)	～しながら ～して(連続)
⑪その他	as (～するにつれて) as (if) (～するように) but (～しないでは) than (～より) while (～なのに) when (～なのに) whereas (～なのに) except (～を除けば)		～なんて(感嘆) 「程度」と「判断」 の不定詞副詞的用 法は、「あとひき形 容詞」に続く副詞 系のひとつです (第19講参照)	主節と副詞節の 主語が異なる 「準副節」(独立 分詞構文)に注 意(第16講参 照)

ここで、「名詞」というものにはどんなものがあるのか考えてみましょう

I、「名詞」は「物（モノ）」をあらわす

見たり、触れることができる様々な物的な存在に名前をつけて、認識区別する（「分節する」という） 例えば、「石」・・・

II、普通の人間には見えない「モノ」や伝説上・想像上の「モノ」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な観念的なモノに名前をつけて分節する
例えば、「神」「妖精」「オーラ」「幽霊」「龍」「鬼」「麒麟」

III、ある程度見て取れる「コト」をあらわすこともできる

宇宙の中の、出来事（現象）を一言（単語）で分節することができる
例えば、「火事」「事件」「爆発」「活躍」「平和」

IV、見えない「コト」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な精神的なことに名前をつけて分節する
例えば、「愛情」「根性」「勇気」

（ここで、物的なもの（無機物と有機物）と精神的なものを区別・認識してください）

V、他の「品詞」を転用して、「名詞」化することもできる

日本語では、用言の「活用」や「接尾語（語末の変化）」で対応しています

例えば、「読む」は「動詞の終止形」ですが、「連用形」の「読み」は「名詞」として転用され、例えば、「読みが甘い」と「主語」に使えます

また、「形容詞」の「美しい」の「語幹」に接尾語「さ」をつければ、「美しさ」という「名詞」になります

英語では、「不定詞」「分詞」や「派生語」による変形が該当します

（「形容詞」happy → 「名詞」happiness）

VI、単語としてあらわせない複雑高度なことでも、『文。』全体そのものを「名詞」化することで名詞として表すこともできる

例えば、「彼は彼女を愛している。」は『文。』ですが、「彼が彼女を愛していること」は『文。』が「名詞」化されているので、『文。』の中で、「主目補」になれるのです

このように、『文。』をつくり、最後に「こと」をつければ、『文。』全体として「名詞」になれるのです

さらに、補足です

少し（かなり）難しい内容なので、はじめは読み流すか飛ばしてください

「第14講」まで読み終わったら返ってきてください（第14講末に再掲します）

「転用副節詞」

- ①「名語句」＋「同格のthat節」全体を副詞として働かせたい場合、
「名語句＋that」が「副節詞」として作用します（「群副節詞」の一種）
多くの場合、「that」が省略されますので、実質的には「名語句」が「副節詞」として働いているので、「名語句の副節語句への転用」といえます
「the instant (that)節」参照
- ②「動詞」の活用形態である「能動分詞」と「受動分詞」で、その「動詞」が「他動詞」で「that節」に従えることができる場合、「分詞＋that」が「副節詞」の働きをする場合があります（第14講の⑨の表を参照）
「that」は省略される場合がほとんどなので、「分詞」自体が「副節詞」の働きをしています
「動詞」の「活用形」たる「分詞の副節詞への転用」といえます
- ② 成句詞＋名語句＋同格that」全体が「副節詞」として働いている場合もあります
「on condition that」参照

これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策ですが（「群副節詞」）、ただ、以上のような成立過程を認識理解していることが理解の論理経過として肝要です

「同格のthat節」の発展的研究

以下の考え方は、「第23講」を読み終わってから検討してみてください

「同格のthat節」の発生由来としては、「In fact」というような『文。』全体を修飾する副句中の名詞の「fact」を「先行詞」にして『文。』を「名詞化（名句化）」しているのではないかと考えられます

そうすると、「同格のthat節」は「形容節」と考えられます

In fact, she knows it.

→ the fact that she knows it

ここでの「that」は「役外来形容節詞」と考えられます

第08講 「疑問詞」も「名節」をつくります！

「疑問詞」は、正確には、「疑問代名詞」「疑問形容詞」「疑問副詞」です

「名詞」「形容詞」「副詞」を意識しない、単なる「疑問詞」という呼称はやめましょう（例えば、「What time is it?」の「What」は「疑問形容詞」です）

「名節」をつくるのは、本来、「成節詞」です

本講では、《「疑問詞」が「名節」をつくる》ということで、「疑問詞」が「成節詞（名節詞）」を兼ねているということを見ていきます

すなわち、「疑問詞」兼「成節詞（名節詞）」であり、「疑問成節詞」「疑問名節詞」とでも「命名」すべきものを見ていきます（もちろん、前講でみたように、「when節」「where節」等の「疑問副詞由来の副節詞」が「副節」もつくっています）

「疑問詞」と「品詞」・「文役」

例	文	「品詞」と「文役」
Which	is better ?	「名詞」・「主語」
What	happenes ?	「名詞」・「主語」
What	did he say ?	「名詞」・「目的語」
Who	is she ?	「名詞」・「補語」
Whose	book is this ?	「形容詞」・「役外名修」
When	did he go home ?	「副詞」・「役外状況」・「時」
Where	does she live ?	「副詞」・「役外状況」・「場所」
Why	did he write it ?	「副詞」・「役外状況」・「理由」
How	did you get it ?	「副詞」・「役外状況」・「手段」

「疑問詞」のある『文。』については、「疑問文」の語順ではなく、普通の『文』と同じ語順にすると、「名節」になり、「主目補」になることができます

本書では、「疑問名節」「wh名節」と呼称します

たとえば、上の7番目の例文で、

「where she lives」とすると

「彼女がどこに住んでいるかということ」という「名節」になります

ある意味、「where」は、「どこに」と「ということ」の2回訳されているとも考えられます

「成節詞（名節詞）」の「that」や「whether」を文頭にいちいちつけることなく、「疑問副詞」に「成節詞（名節詞）」の役割も担わせているのです
すなわち、「疑問副詞」と「成節詞（名節詞）」の「兼任」なのです（「疑問名節詞」）

上記の例文を「名節」化して見ましょう

「疑問詞」と「wh名節」

例	文	日 本 語 訳
which	is better	どちらがより良いかということ
what	happens	何が起こったかということ
what	he said	彼が何を言ったかということ
who	she is	彼女が誰であるかということ
whose	book this is	これが誰の本であるかということ
when	he went home	いつ彼が家に帰ったかということ
where	she lives	どこに彼女が住んでいるかということ
why	he wrote it	なぜ彼がそれを書いたかということ
how	you got it	どうやってあなたがそれを手に入れたかということ

≪「疑問代名詞」＋「不完全な『文。』」≫≪「疑問副詞」＋「完全な『文。』」≫という点を確認・認識してください（「疑問代名詞」自体が、「文役」となっています）

「関係代名詞」の「what」という考え方は不要、「wh名節」にすぎない

「 what he said 」は「彼が言ったこと」と「意識」されています
また、この「what」は、「関係代名詞」だと一般にいられています
「the thing that he said」と同内容だということです
「the thing that = what」という「眉唾公式」まで用意されています（「先行詞」のない「関係代名詞」だなんて、何を血迷っているのでしょうか）
確かに、「the thing that he said」の「that」は、「the thing」という「先行詞」があるので「関係代名詞」でしょう
しかし、「 what he said 」には、「先行詞」は無く、上記の表の他の「疑問詞節」は「疑問詞」だといいながら、「 what he said 」の「what」を殊更に「先行詞のない関係代名詞」だという必要があるのでしょうか
「意味的同内容」であるという現象面だけを捉えて異種のものを同一平面状で扱うという勇み足で、論理的統一性をみだすようなことをする必要はないでしょう

本書では、「w h a t」を「疑問名節詞」と考えます

「彼が何を言ったかということ」(直訳)から「彼が言ったこと」(意識)へと「意識」しているだけのことにすぎないのに、文法的問題を無駄に複雑曖昧な解決へと持ち込むことなく、単純明快に、できる限り「文法的根拠」をもとに「直訳」をし、それから「意識」へ「変換」という「段階」を確実に踏むようにすればよいのです

「w h a t h e s a i d」

「疑問名節」であって、「関係代名詞」によるという曖昧なものではない

「w h a t h a p p e n s」というのも同様に、「何が起こっているのかということ(直訳)」「起こっていること(意識)」という「2語」の「疑問名節」です

「w h a t h a p p e n s」

2語でできている、「疑問名節」である

それから、「w h a t I a m」を「現在の私」と訳すのは、なぜでしょうか

「I a m ～」は、現在形なので「(今)」をつけて「私は(今)～です」と訳します

「W h a t a m I ?」は、「私は(今)何なのでしょうか」と訳します
「名節」にした「w h a t I a m」は、「私が(今)何であるかということ」と「直訳」し、それを「現在の私」と意識されているのです

「w h a t I a m」

単なる「疑問名節」であり、「意識」に惑わされ振り回されるな

ただの、「熟語丸暗記」よりも、多少「論理分析」してみてもいかがでしょうか
それでは、これに類する主な「疑問名節」と「意識」をあげてみましょう

「what」の「疑問名節」と「意訳」

例	文	意 訳
what	Taro was	過去のタロー
what	he was ten years ago	10年前の彼
what	she used to be	かつてそうであった彼女
what	I have been	さっきまでの私
what	they will be	将来の彼ら
what	Japan should be in the future	未来におけるあるべき日本

「疑問名節」であることを認識して、「文法的直訳」を検討してみてください

「wh節」と「成節詞」

「wh節」は「名節」ですから、「主目補」になれます

ここで、少し注目してもらいたいのが、「後属役」や「目的役」です
 (「役」とは、「他動詞」や「成句詞」の「目的」になっている「語・句・節」の総称です)
 「wh節」は、「成句詞」の「後属節」や「他動詞」の「目的節」には一般的になる
 ことができます

ただ、「if節」は「成句詞」の「後属節」にはなれません

また、「that節」も、一部例外を除いて、原則的には、「成句詞」の「後属節」
 にはなれません

○ 「成句詞」 + 「wh節」

× 「成句詞」 + 「if節」

▲ 「成句詞」 + 「that節」

例外の「成句詞」 「except」「but」「besides」「in」等

これは、使用者の習慣であって、論理ではないので、覚えるしかありません

「w h 句」とは

「what to do」「when to go」「how to do」等は、見慣れているでしょう

これらは、「wh名節」の変形であり、「主語」の表記が不要な場合で、「不定詞」を使った「軽量型」の表現です

「wh準名節」「wh名句」と呼称されるようなものです
機能的には、「wh名節」と同じで、「主目補」になります

「wh名節」

what I (sould) do (私が何をすべきかということ)

「wh準名節」「wh名句」

→ what to do (何をしたらよいかということ)

(「第11講」参照)

「疑問詞」が「副節」をつくる

本講では、「疑問詞（名形副）」が「名節」をつくと銘打ってまいりましたが、「疑問詞（副）」が「副節」をつくる場合を補足させていただきます

おなじみの「when～」以外の、他の有名な例文をあげます

Where there is a will, there is a way.

「疑問副詞」の「when」「where」の他には「疑問詞」が「副節」をつくる場合は限られています

また、「ever」を語尾につけることにより、「譲歩」等の意味で「疑問詞」が「副節」をつくる場合を拡張させています（「複合関係詞」といわれているものです）
これらの点は、細かい事項なので、別巻で詳述する予定です

最後に、ちょっと、今さらながら確認ですが、

「Whose book is this?」と

「Whose is this book?」との「文法的違い」は大丈夫ですよ

本講までにより、「品詞」の3形態である、「語」「句」「節」が出そろったので、次講では、より大きな視点を持って、「品詞」と「文役」についてまとめましょう

第09講 大きな「品詞」と「文役」のまとめ

第06講と第07講で、「句」と「節」の学習をし、「詞」の形態が出そろいましたので、本講では、「品詞」と「語句節」、それらと「文役」との関係性をまとめてみます

既習のように、「句」は「成句詞」によって「形容句」「副句」がつくられ、「節」は「成節詞（名節詞と副節詞）」によって「名節」「副節」がつくられるのですから、「成句詞」や「成節詞」は、新たに大きな「名詞」「形容詞」「副詞」（略して「名形副」）をつくるための「品詞」であることがわかります（「品詞」の拡大と「手段詞」）

すなわち、「成句詞」による「形容句」「副句」や「成節詞」による「名節」「副節」は生来的な「名形副」ではなく、したがって、「成句詞」や「成節詞」はつくられた「名形副」のための「手段的な品詞」なのです（本書では、「手段詞」と命名します）

その他の「手段詞」としては、「形容節」をつくる「構成来形容節詞（関係代名詞）」と「役外来形容節詞（関係副詞）」があります（「第10講」「第11講」参照）

また、性質的には多少異なりますが、「推量」的に文意を整える「助動詞」や、『文。』「句」「語」の関係を整える「等位接続詞」を「手段詞」に含めて考え得ます

ここで、確認しておきたいのは、『文。』というものは、①「自動詞」「他動詞」により「名詞」「形容詞」が操られ、②「副詞」が彩りをそえるということと、③本来的な「名形副」の「単語」である「名語」「形容語」「副語」以外に、つくられた大きな「名形副」（「句」「節」）でも構成されているということです

『文。』を構成する「品詞」には、「名詞」「自動詞」「他動詞」の他に、「名詞」の「状態」を示す「形容詞」があり、「場面状況」を設定する「副詞」があります
そして、「名形副」のそれぞれが、「詞」の形態として、「語」「句」「節」を備えており、以下の表のように9個の「品詞」の種類・形態が存することになります

次に、それらが『文。』中でどのように働いているかが問題となります（「文役」の観点）

「品詞」と「語句節」		「詞」の形態		
		（単）語	句	節
品詞 の種類	名詞	名語	名句	名節
	形容詞	形容語	形容句	形容節
	副詞	副語	副句	副節

「品詞」のまとめ

総 称	品詞称	各 称	役 割
「品詞」	「名 詞」	「名 語」	「主目補」になる
		「名 句」	
		「名 節」	
	「形容詞」	「形容語」	①「補役」になる
		「形容句」	②「名詞修飾形容詞」になる
		「形容節」	「名詞修飾形容詞」になる
	「副 詞」	「副 語」	「場面状況」を 設定する 「役外状況族」
		「副 句」	
		「副 節」	

「手段詞」のまとめ

「手段詞」	役 割	具体的英単語例
「成句詞」	「名語」「名句」「名節」を後属させて、「形容句」「副句」をつくる	i n , a t
「成節詞」	『文。』まるごとを「名節」「副節」にしてしまう	t h a t , b e c a u s e
「構成来形容節詞」 (「関係代名詞」)	『文。』中の「構成要素の名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	t h a t , w h i c h
「役外来形容節詞」 (「関係副詞」)	『文。』中の「副句」の「後属役名詞」に注目し、『文。』を「形容詞」化し、さらに「名句」化する	w h e n , w h e r e
「助動詞」	『文。』の伝えるべき内容に、断定を避け、推量的変化を与える 「役外推量族」	c a n , m a y
「等位接続詞」	『文。』と『文。』をつなぐ 「節」と「節」をつなぐ 「句」と「句」をつなぐ 「単語」と「単語」をつなぐ	a n d , b u t

「手段詞」に対して、「名詞・形容詞・自動詞・他動詞（名形自他）」を「構成詞」と呼ぶべきでしょう

「文役」の確認

『文。』中における、「名詞」「形容詞」の「役割」の総称を「文役」といい、具体的な役割として、「主役」「目的役」「補役」の3種があり（「役称」）、そこで、「語句節」の3種がそれぞれ働くので、9種類の「役割名」が存在します（「各称」）

『文。』中で具体的に活躍している「名詞」「形容詞」とからめた呼称として11の「構成称」がありまして、「主役」と「目的役」は「名詞」しかないので「名詞」とのからみしかありませんが、「補役」の場合は「名詞」と「形容詞」がなれますので、「名詞」とのからみからくる呼称と、「形容詞」とのからみからくる呼称の2種があります（「形容節」が「補役」になることはないので「形容補節」という呼称はありません）

「文役」のまとめ

総 称	役 称	各 称	構成称
「文役」	「主 役」	「主 語」	「名主語」
		「主 句」	「名主句」
		「主（役）節」	「名主（役）節」
	「目的役」	「目的語」	「名目的語」
		「目的句」	「名目的句」
		「目的節」	「名目的節」
	「補 役」	「補 語」	「名補語」「形容補語」
		「補 句」	「名補句」「形容補句」
		「補 節」	「名補節」「—」

一般に、狭小矮小的に「主語」「目的語」「補語」と言われていますが、「詞」として「語」「句」「節」がありますので、上位概念として、「主役」「目的役」「補役」と呼びます
上記の表中で、「主役になる節」という意味の「主（役）節」に「（役）」が入るのは、『文。』の構造上、「副節（従属節）」に対して本体の方の「節」を「主節」といいますので、それとの区別のためです（本書では、「副節」に対して「本節」といいたいところですが）

また、「形容節」は先行する「名詞」（「先行詞」）を修飾するだけで（「形容節詞（関係代名詞・関係副詞）」、「第22・23講」参照）、「補役」になることはないので、「形容補節」という「構成称」はありませんので、表中では、「—」と表示しました

「補役」になる「節」は「名節」しかありません（ここで展開的な注意ですが、「名節」が「補役」となる場合は、概念的なものから具体的なものまでの高度な「内容説明」となりうることに留意してください（「言い換え」）（現代文読解の要諦です））

『「品詞⇔文役」確定表』

『詞役表』

品 詞	内 容	なれる「文役」
名 詞	「もの」や「こと」をあらわす	「主役」「目的役」「補役」
自立動詞	「主役」自体の単独の動作をあらわし、「補役」を必要としない「自動詞」	「自立文型」の「自動詞」
補完動詞	「主役」の「職業・地位・内容・概念・観念(名補)」や「状態・性質(形補)」を『文。』として説明するにあたり、「補役」と「主役」を結びつける「自動詞」	「補完文型」の「自動詞」
関渉動詞	「主役」の動作のうち、他者を巻き込み、「関与・干渉」をあらわす「他動詞」	「関渉文型」の「他動詞」
形容詞	①「中心主語」(「中心目的語」の場合もある→第21講参照)となる「名詞」の「状態・性質」を説明する	① 「補役」
	②その他「名語」一般を「修飾」する	②「名詞修飾形容詞」 役外修飾族
副 詞	場面状況を設定し、「動・形・副・文」を修飾する	役外状況族

『役詞表』『逆表』

文 役	内 容	なれる「品詞」
主 役	『文。』中の動作・状態の中心となる主体	「名詞」
目的役	「関渉動詞」の「主役」の動作の対象物(客体)	「名詞」
補 役	「主役・目的役」の①「職業・地位・内容・概念・観念」や、②「状態・性質」をあらわす	①「名詞」 ② 形 容詞

第06講の「句」と第07講の「節」をよく認識・理解し、「句・節」が大きな「品詞」になり大きな「文役」となっていくことを完全に把握してください

補足です

「成句詞」の「後属役」のまとめ

「成句詞（前置詞）」の 「後属役」	各 称	なれる語句節
	「後属語」	「名語」
	「後属句」	「名句」
	「後属節」	「名節」

さらに、補足です

「倒置」について

「倒置」とは、作文者が、強調したい「語句節」がある場合、その強調したい「語句節」の位置に変化をもたらすことです

主に、「目的役」「補役」「副詞」を「文頭」に持ち出すことをいいます

この場合の多くは、その影響から、「主役」と「動詞」の位置にも「倒置」が生じます（「主語＋動詞＋倒置語句節」ではなく「倒置語句節＋動詞＋主語」と逆転します）
全体的に、通常の語順に変化が生じるのです

ここまでの学習で、『文。』の「構成要素」は「語句節」からなる「名詞」「形容詞」と「自動詞」「他動詞」ということであり、これらを「名形自他」と略し、「構成詞」と呼称すべきことに共感いただけましたでしょうか

本書では、「成句詞」による新たな「形容詞」「副詞」の創設や、「成節詞」に「形容節詞」や「動詞の活用（第10講以下参照）」により、『文。』が「名詞化」「形容詞化」「副詞化」していくことを略して、

「名化」「形容化」「形化」「副化」「形副化」「名副化」「名形副化」等と表現しますので、臨機応変に対応してください

次講以降では、話を変えて、着眼を大きくして、「動詞」の「活用」と「名形副化（物態況化）」ということを考えていきましょう

本稿旧版では、次講と次々講で、「節つながり」ということで、「形容節（関係代名詞と関係副詞と言われているもの）」についてみていましたが、もし「形容節」の講で挫折する可能性を考えると、構造や構成要素について全て終わらせたあとで、じっくり「形容節」と「仮定法」に取り組んでいただこうと思い、ほぼ最後尾に移しました
形容節に興味がある方は、先に第22・23講を読んでもかまいませんよ

「本講」から「第14講」まで、「動詞」の「活用・転換・転用」について学習します

第10講 「動詞」の「活用」「転換」に「転用」

ここからは、「動詞」の「活用」で『文。』が「転換」され、次の新たなる『文。』への「転用」という方策で、「品詞」が拡張されていく課程をつまびらかにいたします

- ① 『文。』を構成する「ことば（詞）」の種類としては、「名詞」「自動詞」「他動詞」「形容詞」と、「役外族」としての「副詞」と「名詞修飾の形容詞」の5種類しなく（「品詞」の理解ですね）、
- ② 「ことば（詞）」の単位・形態には、「語」「句」「節」の3種があり、
- ③ 成句詞（「形容句」「副句」をつくる）「成節詞（「名節」「副節」をつくる）」「構成来形容節語（「形容節」をつくる）」「役外来形容節詞（「形容節」をつくる）」は、別に「句」「節」という大きな「名形副」をつくる「手段詞」に過ぎない、ということを経験・理解してもらうことが、前講までの課題でした
これらで作られた新たなる大きな「名形副」が、次の新しい『文。』中で、「文役（構成要素・主目補）」や「役外族」となって活躍することも学習してきました
さらに、本書では、第24講の課題で未習ではありますが、
- ④ 「助動詞」も、『文。』に「推量的」変化を与える「手段」にすぎないということが理解認識できれば、『文。』の構造理解は、ほぼ終わったも同然です
最後の課題に、「長文読解」では厄介モノとなる⑤「等位接続詞」があります

「単語」だけでは「認識・意思・評価・思想」等が伝達できない複雑高度な場合の手段として、「成句詞」による「句」があり、「名節詞」「副節詞」「構成来形容節語」「役外来形容節語」による「節」があるのは、認識・理解できましたね
このような手段で、より高度な「名詞」「形容詞」「副詞」をつくっているんですね
特に、「節」は、『文。』全体に着目した「名詞化」「形容詞化」「副詞化」でしたよね
「名詞化」「形容詞化」「副詞化」を「名形副化」と略します

本講では、「動詞」に着目した、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」を見ていきます
すなわち、「動詞の活用」による、『文。』の「名形副化」です
実質的にみると、『文。』の「事物化（名詞化）」「状態化（形容詞化）」「状況化（副詞化）」ですね（「物態況化」と略します）（ここまでは、「転換」段階です）

日本語では、小学国語・中学国語でも古文でも、「動詞」の「活用」ということをしつつ学習しますが、英文法学習においても、日本語と英語という、同じ人間の言語なのですから、この「動詞の活用」という考え方を利用しない手はありません

日本語では、「動詞」の「活用形」がいろいろな「単語」に接続されて、「未然形」は「受動態」になり、「終止形」「連体形」は様々な「名節」「副節」となり、また、「連用形」はそのまま「名詞化」されるなどします

例えば、「飲む」という「動詞」が、「飲まない」「飲まれる」（未然形）、「飲みながら」（連用形）「飲み」（連用形による名詞化）、「飲むけれども」（終止形）、「飲むこと」「飲むとき」「飲むので」（連体形）、「飲めば」（仮定形）というように、「動詞」が「活用」され、他の「品詞」に「転換」され、次の新しい『文。』の中に組み込まれて、構成要素としての「文役」や状態（名詞修飾）や場面状況をあらわす「役外族」として「転用」されていくのです（なぜか、「飲む会」ではなく「飲み会」なんですね）

「動詞」の「活用」「転換」「転用」という考え方は、英語の学習ではほとんどありませんが、この考え方を利用すると、《「動詞の活用」に着目した『文。』の「名形副化」》が簡単に整理できてしまいます
順次、みていきましょう

英語の「動詞」の「活用」には、

- ①「不定詞」（「t o d o」）
- ②「能動分詞」（「～ing・doing」）（「現在分詞」といわれている）
- ③「受動分詞」（「～ed」）（「過去分詞」といわれている）
- ④「完了分詞」（「～ed」）（「過去分詞」といわれている）

というような4種類の「活用」があります

「動詞」が「活用」されて、「名詞化（事物化）」「形容詞化（状態化）」「副詞化（状況化）」していく様子をしっかり見ていきましょう

「動詞」が「活用」した結果は、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」の3種類しかなく、すなわち、『文。』の「構成要素」のうち、「自動詞」と「他動詞」を除いた、①「名詞」⇒「主目補」と②「形容詞」⇒「補」と「役外族」の「名詞修飾形容詞」に、③「役外族」の「副詞」しかないということをしっかり認識・理解してください

以上のように、「動詞」が、「名詞化」されて「主目補」として、「形容詞化」されて「補役」「名詞修飾形容詞」として、「副詞化」され「場面状況を設定するもの」として、次の『文。』へ「転用」されていくのです（「～化」が「転換」の段階です）

さらに、従来の説明では、「現在分詞」といいながら「現在」の意味はなく、「過去分詞」といいながら「過去」の意味はなく、しかも、「受動分詞」と「完了分詞」の概念的区分もなく、名称からは実質的に意味するところが不明でした

本書では、実体に即して、「動詞の活用」を「分類」し、「命名」していきたいと考えています

すなわち、「能動状態（事物・状況）」を意味する「～ing・doing」は「能動分詞」と命名し、

「受動状態（事物・状況）」を意味する「～ed」は「受動分詞」と命名し、

「完了状態（事物・状況）」を意味する「～ed」は「完了分詞」と命名します

それぞれ「～状態」というのは、「形容詞化」を中心に考えたほうがわかりやすいからです（「能動物態況」「受動態況」「完了態」等といったほうがいいかもしれません）

・・・本講の、ここから先は、はじめのうちは、飛ばすか流すかしてください

「第14講」まで終わったら戻って来て、以下の表群を検討吟味してください

「動詞の活用」の全体像・俯瞰

「活用」形	名詞化 事物化 「構成要素」 「主目補」になる	形容詞化 状態化 ①「名詞」修飾 ②「補役」になる	副詞化 状況化 「役外族状況族」 「場面状況」の設定
不定詞	「名詞的用法」	「形容詞的用法」	「副詞的用法」
能動分詞	「名詞的用法」 （ <i>動名詞</i> といわれていました） （the+能動分詞=～しつつある人々）	「形容詞的用法」 「能動状態」 （ <i>進行形</i> といわれていました）	「副詞的用法」 「能動状況」 （ <i>分詞構文</i> といわれていました）
受動分詞	✕ 「being」という 「自動詞」の「名詞化」 をとともえれば可 「受動事物」 （the+受動分詞=～された人々）	「形容詞的用法」 「受動状態」 （受動態） 主に「他動詞」	「副詞的用法」 「受動状況」 （ <i>分詞構文</i> といわれていました）
完了分詞	✕ 「having」という 「自動詞」の「名詞化」 を伴えば可 「完了事物」	「形容詞的用法」 「完了状態」 ①「自動詞」による 「名詞修飾」 ②「have・has・had」 の「補役」	単独でも可能ではあるが、多くは「having」という「自動詞」の「副詞化」を伴う 「完了状況」 （ <i>分詞構文</i> といわれていました）

「主な日本語訳」

「活用」形	名詞化 「構成要素」 「主目補」になる	形容詞化 ①「名詞」修飾 ②「補役」になる	副詞化 「役外族状況族」 「場面状況」の設定
不定詞	～すること	～するための ～すべき	～するために ～するほど
能動分詞	～すること	～している（状態）	「準副節」参照
受動分詞	×	～された（状態）	「準副節」参照
完了分詞	×	～してしまった（状態）	「準副節」参照

「分詞構文」と言われていた「分詞の副詞的用法」を本書では「準副節」とよび、「第14講」で学習します

不定詞のまとめ

不定詞	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族）

能動分詞（現在分詞）のまとめ

能動分詞 （現在分詞）	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる （動名詞） （the+能動分詞=～しつつある人々）
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役（進行形）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

受動分詞（過去分詞）のまとめ

受動分詞 (過去分詞)	用 法	役 割
	名詞的用法はありません	(the＋受動分詞＝～された人々)
	形容詞的用法	①名詞修飾（役外装飾族） ②補役（受動態）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

自 動 詞	完了分詞 （「受動分詞」は「群動詞」の場合のみ）
他 動 詞	受動分詞
	完了分詞

動詞の活用のまとめ

活 用		用 法	役 割
不定詞		名詞的用法	「主目補」になる
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族）
分詞	能動分詞 (現在分詞)	名詞的用法	「主目補」になる（動名詞）
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役（進行形）
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族） （分詞構文）
	受動分詞 (過去分詞)	名詞的用法はありません	—
		形容詞的用法	①名詞修飾形容詞（役外装飾族） ②補役（受動態）
		副詞的用法	場面状況の設定（役外状況族） （分詞構文）
	完了分詞 (過去分詞)	形容詞的用法	「自動詞have」 の「補役」となる

多少、抽象的でわかりにくかったかもしれませんが、抽象概念で思考する能力も徐々に身に付けていきましょう

次講以降、「不定詞」、「能動分詞」、「受動分詞」、「完了分詞」を具体的に詳しく順次みていきます

「第14講」まで理解できたら、以上のまとめの各表を活用して、「動詞」の「活用・転換・転用」を咀嚼・嚥下・消化・吸収してください

大事な補足です

なぜ、「受動分詞」と「完了分詞」が同じ形態の活用形なのでしょう
(本来、「受完分詞」と名乗るべきなのでしょう)

日本語の「れる」「られる」が「可能・自発・尊敬・受け身」をあらわし(言語感覚的に親近感があるのでしょうか)、場面状況・前後関係から、意味を判別していくのと同じです

言語の感覚・英語の感覚として、「受動」と「完了」は近い位置関係にあるのです
「～ed」形(不規則変化も含む)を見たときは、「受動」と「完了」を並行意識することが肝要なのです

「殺される」というのは、「受動」と同時に「完了」の意味を含むのです

ところで、例えば、「可能」を表す場合として、「食べられる」というべきところ、「食べれる」と表現して、「ら抜きことば」として批判を受けています

しかし、言語は生きていると言われている通り、時の流れ・時代の変化に伴い変わっていくのです・・・しかも、より合理的に・・・

すなわち、「ら抜き」によって、「可能」の場合が、「自発・尊敬・受け身」から離脱し、「判別」が容易になってきているのです

① 「ワニ、たべられた」

② 「ワニ、たべれた」

① は、「ワニによって襲われ、食べられた」という「事故」として解釈されるでしょうし、

② は、「ワニ肉は初めてだけど、食べることができました」というように解釈されるのでないのでしょうか(「場面状況」が与えられなくても解釈・判別可能)

「ら抜き言葉」を勝ち誇って一面的に避難するのも、歴史や古文や言語・文法の進化を知らない視野の狭さを露呈しているのかもしれませんが

古文単語の「いみじ」、現代単語の「やばい」を比較検討してみてください

第 1 1 講 「不定詞」の本質、『文。』の「簡略的節化」

「不定詞」は、「h e l p」が「t o h e l p」になることだと思っていると、視野は狭く理解が浅薄になり、負けの始まりですよ（「本質」を見抜ける社会人になるべし！）

確かに、「動詞」の「原形」に「t o」をつければよいのですが、そんな局所的・表面的・形式的なことだけで満足してはいけません

「手段詞」によって、例えば、『文。』が「成節詞（「名節詞」と「副節詞」）」により、「名節」「副節」となり、**新たなる高度な活躍の場（転用の場）**を与えられたように、「動詞」を「不定詞」という「活用形」にすることで同様のことが可能になるのです

「節」の場合は、『文。』完全まるごとでしたが、「不定詞」の場合は、完全まるごとではなく、**軽やかに、簡略的に「名形副化」**させていきます（その性質上「（不定詞由来）準名節」「（不定詞由来）準形容節」「（不定詞由来）準副節」と呼ぶべきもので、それぞれ「不定（準）名節」「不定（準）形容節」「不定（準）副節」と略して呼称します）

ここで、《「『文。』の不定詞による「動詞」の活用・転換、転用形態」の場合、元の『文。』の「主語」はどうなるの》という疑問が発生すれば、なかなかのものです

「不定詞」の場合も、『文。』おおよそまるごと「名形副化」できるのです

おおよそというのは、『文。』そのままではなく、①「主語」すなわち「動作主」を《「成句詞」＋「人の目的格」》であらわし、②「動詞」を活用させるという、2つの作業で『おおよそまるごと「名形副化」』させることができるということです
①「主語・主体・動作主」の変形と②「動詞」以外には、いじることはありません
例文でみてみましょう

H e h e l p s o t h e r p e o p l e .

f o r h i m t o h e l p o t h e r p e o p l e

①「h e l p s」が「t o h e l p」になり、②「H e」が「f o r h i m」になるだけなのです（「o f h i m」の場合もあります→第7講「同格のo f」参照）
たった、これだけで、『文。』が軽やか簡略的に「名形副化」していくのです

元の『文。』の「主部」は、原則的には「動作の主体」として、《「成句詞」＋「人の目的格」》という形で「不定詞」の直前に置かれますが、新たな『文。』の主体と一致している場合や一般の人々が主体と考えられる場合は、省略されるのです

以下に、「名形副化」した例文をあげます

It is wonderful for him to help other people .
仮主語 形補 名詞的用法 真主語 [部]

I like for him to help other people .
他動詞 名詞的用法 名目的句 (目的準名節)

a way for him to help other people
中心名詞 形容詞的用法 名詞修飾の形容句 (準形容節)

She spend much money for him to help other people .
副詞的用法 (準副節) 目的 役外状況族

不定詞のまとめ

不定詞	用 法		役 割
	名詞的用法		「主目補」になる
	形容詞的用法		①名詞修飾 (役外装飾族) ②補役
	副詞的用法		場面状況の設定 (役外状況族)

ここで、「不定詞」は「名節」「形容節」「副節」の「簡略化」だということを認識してください

では、各用法について見ていきます

「名詞的用法」の特別な場合・・・「同格」

(「第07講、12講」参照)

the plan that we will go fishing

the plan (for us) to go fishing

「～という」で訳し、前にある「名語句」の具体的内容を説明する「同格」です

「形容詞的用法」の実体

「形容節詞」の場合と同様、「説明したい名語句（「先行詞」）」を元の『文。』から先頭に出し、残りの部分を「不定詞の形容詞的用法」として「先行詞」を「修飾」するのです（「不定詞」の部分は、「形容句（準名節）」ですね）（「構成要素（文役・主目補）」を「先行詞」にすると、「不定詞」内に「欠落」が生じます）

元の『文。』

The man wrote a letter with a pen .

①「名主語句」

②「名目的語句」

③「副句の後属名語句」

①「名主語句」を「先行詞」とした場合 → 「主格」の「不定詞」

the man 欠落 to write a letter with a pen

②「名目的語句」を「先行詞」とした場合 → 「目的格」の「不定詞」

a letter (for the man) to write 欠落 with a pen

③「副句の後属名語句」を「先行詞」とした場合 → 「手段」の「役外来形容節詞類似」

a pen (for the man) to write a letter with 欠落

ここで、興味深いことに、「形容節詞」と「形容句」の「中間形態」あることに注目してください（辞書参照）

「不定詞」の「形容詞的用法」が「形容節」に近い表現感覚があるということですね

a pen with which to write a letter

次に、「時」の「役外来形容節語（関係副詞）類似」のものをみてみましょう

元の『文。』

The man plays tennis at a time .

「a time」を「先行詞」にしてみますが、この場合は、「at」が脱落します
習慣的に省略されるようになったのでしょうか（上述の「同格」との違いに注意してください）

a time (for the man) to play tennis (at)

「副詞的用法」の「意味・用法」

「不定詞」の「副詞的用法」の意味は、「～ために」だけではありません

種類	日本語訳	注意事項
目的	～のために	「目的」だど判別しやすくするためには、 「in order」「so as」を前につける
原因 理由 根拠	～して ～するなんて ～するとは ～するには	「形容語」の後ろにつけて、その「原因」「理由」 「根拠」「具体的状況」等を付加する (第17講「あとひき形容詞」参照)
程度	～するには ～するほど	「too・・・ to do」 「so・・・ as to do」 「・・・ enough to do」 等の構文がある(「形副」の具体的程度を示す)
仮定	～すれば	「条件提示文」の「条件節」の「代用」
結果	・・・して(その結果)～	《多くは前から訳していくことを通例とする》

《「程度」をあらわす「不定詞」》

まずは、「so・・・ that ～」の復習です

This question was so difficult that he couldn't solve it .
副 副節 (「so」の具体性を高める)・程度

「この問題は、彼が解くことができなかったほど、そんなに難しかった。」(直訳)

「too・・・ to do」構文で書き換えてみます

This question was too difficult for him to solve .

「この問題は、彼が解くには、あまりに難しすぎた。」(直訳)

「that 節」は完全な『文。』でなければならないので「it」が必要ですが、
「不定詞」は「動作の表示」があればよく「it」は不要で省略されます
(「この問題はあまりに難しかったので彼は解くことができなかった」という訳は何なんでしょうか)

《「結果」をあらわす「不定詞」》 → 入試レベルではなぜか頻出なんですね

S h e g r e w u p t o b e a f a m o u s s i n g e r .

「彼女は成長して、有名な歌手になった。」と一般には訳されていますが・・・
（「彼女は有名な歌手になるほどに成長した」が適当な直訳ではないでしょうか）

「副詞的用法」の特別な場合

《「独立不定詞」》

一語の「副語」ではあらわせない状況を、「不定詞の副詞的用法」で「独立的」に言いあらわす慣用的な用法で、よく文頭に用いられます（もちろん、「挿入」も可能です）

「t o t e l l t h e t r u t h （実を言うと）」

「t o b e g i n w i t h （まず第一に）」

「t o b e s u r e （確かに）」

等が例としてあげられます

「群副詞」とでも呼べるものでしょう

最後に、いくつか、「不定詞」に関する技術的なことをあげておきます

「不定詞」の「否定」

元の『文。』が「否定文」の場合、「t o」の直前に「n o t」や「n e v e r」を置きます

H e d i d n ' t p l a y t e n n i s .

（f o r h i m） n o t t o p l a y t e n n i s

「代不定詞」

「主節」と同じ「動詞」を繰り返して言うのはわずらわしいので、後ろの「不定詞」の「動詞」は省略します（この状況を「代不定詞」といいますが、実質は「省略不定詞」です）

「to」は絶対に省略しないでください

You may have my lunch if you want to (eat it).

「wh to不定詞」 → 第08講参照

次の例文で示すように、「名節」なのか「不定詞の名詞的用法（準名節）」なのかの違いだけです（「主語」の明示の必要性の有無による）

You must decide whether you buy the book.

You must decide whether to buy the book.

「形容詞的用法」の補足

「補語用法」

下線部はそれぞれ、「主格補語」「目的格補語」と考えられます（第19・21講参照）

He seems to study math .

She asked him to help her friends .

どうでしょうか（「不定詞」という名称は、「名形副の同居」と善解しましょうか）
「不定詞」の実体がつかめたでしょうか
次講では、「能動分詞」の実体に迫ります

「不定詞」という呼称について

「不定詞」という呼称の由来はともかく、「不定詞」では、「動詞」が「活用」によって「名形副化」していくひとつの課程で、形態的にはおなじ「t o d o」のなかに「名形副」が同居していて、実際に使用される『文。』のなかで「名形副」の役割が決められるのです

（実際は、作文者が作文時に既に決めているのですが、読む側が確実に「作文者の真意」を読み取らなければならないのです・・・これが「解釈」ですね・・・「解釈」とは、「文字・文面」を通して、ひとつの事実や価値観や評価を確実に共有できる過程のことです）

形式的・外形的には「名形副」が定まるわけではないという実態からすると、「不定詞」と呼称することには大きな支障はないので、本書では、「不定詞」という呼称を維持します

ただ、「～ing」「～ed」という「動詞」の活用でも、おなじ形態でありながら『文。』のなかで「名形副」が決められていくということは同様なので、「不定詞」という名称を「動詞の活用体系」の上位概念として用いるならともかく、「t o d o」の個別称として用いることは残念です

「分詞」類似のような下位的な命名を検討すべきでしょうか

第12講 「能動分詞」と素直に言いましょうよ

「動詞」の「活用」のひとつに「～i n g」がありまして、現象として、「動名詞」「現在分詞（進行形）」「分詞構文」と従来いわれております

この「動名詞」「進行形」「分詞構文」の3種の関係について、たまたま同じ形をしていると勘違いしている方や、同じ形であることについて、考えもしなかったり、目をつぶっていたり、目を逸らして逃げている方がほとんどだと思われます

「たまたま同じ形」だというなら、「不定詞」も「名形副」の各用法が「たまたま同じ形」だといきましょうよ（いってくださいよ）（100年以上、そう教えてきたんですよ）

無思慮なり、目をつぶり、逸らしている方々には、「現象」を「観察」し、「抽象化」「論理公式化」し、「上位概念」で結ぼうという「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」に薄い乏しいということになってますよといわざるを得ません

世界・日本を背負う未来のあるみなさんは、これからは、このような「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」ができるように努力し習慣化しましょう

さて、実体ですが、≪「動詞」には、「～i n g」という「活用」があり、『文。』全体を「名形副化」させ、それぞれ「能動事物」「能動状態」「能動状況」を示し、次の新たな高度な大きな『文。』の中で活躍させていく≫ということなのです

そうすると、「不定詞」と全くといっていいほど同じ作用をしているのです

ただ、慣用的な違いや、意味や用法に微妙な違い（例えば、「～i n g」が「経験的・過去の」で「t o d o」が「未来的」といわれています）があるだけで、基本的な「文法論理」や「利用法」にはほとんど違いがありません

主に、「他動詞」の「目的名句」での採否と、両者で意味が異なる場合が重要です

また、『文。』まるごとの「節」化とは違いますが、「軽量的」ながら、「節」に近い面もあるので、「（能動分詞由来）準名節」「（能動分詞由来）準形容節」「（能動分詞由来）準副節」と呼ぶべきものでしょう（「不定詞」と区別する必要から、「活用能動準名節」「活用能動準形容節」「活用能動準副節」と称すべきものです）

「準副節」というものは、従来「分詞構文」として説明されてきましたが、「分詞構文」という名称では、「副詞」的かつ「準節」的な実体が明らかになりませんね

そもそも、「現在分詞」という、「現在」の意味すらない、実体とは乖離した名称までいただいていた、理解を困難にしています（そんな名称が100年以上存続しているとは・・・）

「動詞」の「～i n g」という「活用」は、「能動的」な「名形副化」に過ぎませんので、本書では、「能動分詞」と呼びます（「分詞」という命名は納得できますね）

「不定詞」と同じだとすれば、ほとんど説明のしようもありませんが、「屋上屋を架す」ようなことをさせていただきます（この時点で「主語」の扱いに関心が及んでいますか）
ただ、技術的な細かい点に注意するだけです

「名詞化」の場合

例文でみてみましょう

He helps other people .

→ his helping other people

My son helps other people .

→ my son's helping other people

「helping other people」と『文。』の形態をおおよそ保ったままでいながらの、『文。』全体の「名詞化」ですから、「主語・主体・動作主」は、「名詞化」された「全体物」に付加された「所有格」としてあらわれます

そして、『文。』全体が「名詞化」されたのですから、次の新たなる大きな『文。』の「主目補」や「成句詞」の「後属役」になっていけるのです

一般には「動名詞」と呼ばれていますが、「単語」に注目しただけの矮小的呼称です

「所有格」としてあらわれた「動作主」が、次の新たなる『文。』の「主体・主語」と一致していれば、次の「my」のように、表記する必要はなく、省略されます

I like (my) playing tennis .

一致していなければ、表記されます

I like their playing tennis .

ちなみに、この「their」は、「like」の「目的役」であることをうけてか、「them」も用いられます（「成句詞」の「後属役」の場合も同様です）

「活用準名節同格」、「同格のo f」

第07講で学習した「名節同格」を、簡略化した「活用名節」の利用による軽量の「転換形」であり、「同格のo f」ともいわれています

この「同格のo f」の後ろに「所有格＋能動分詞による活用名節」を置きます（「能動活用名節同格」というべきでしょうか）

「先行する名語句」＋「o f」＋「所有格＋能動分詞による活用名節」（～という・・・）

They know the news that he killed her .
他動詞 名目的語 = 同格名節

「名語句」＋「同格節」全体で「目的部」
「～という知らせ」

では、「that 同格名節」を「能動分詞」の利用により簡略化します

They know the news of his killing her .
他動詞 名目的語 = 能動分詞準名節同格

「名語句」＋「o f」＋「同格句」全体で「目的部」
「～という知らせ」

いずれも、「The news is that he killed her .」というような「元の『文。』」があり、「that名節」を「補役」とする『文。』が由来である『『文。』の名詞化」です（それが、さらなる大きな次の『文』の「know」の「目的役」となっているのです）（「第07講」の「名節同格」参照）

なお、「不定詞」による「同格」（「第11講」参照）にも留意してください

これまでで、おおよそ『『文。』の名詞化』が出そろいましたので以下にまとめておきます（これはかなり重要な考え方をまとめたものなので、認識のうえに再認識です）

『文。』の「名詞化」

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| ① 「名節」（「第07講」参照） | ⇒ 『文。』 まるごと |
| ② 「不定詞」（「第11講」参照） | ⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（準節） |
| ③ 「能動分詞」→「本講」 | ⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（活用節） |
| ④ 「名詞構文」（「第06講」参照） | ⇒ 「品詞」の転換による、『文。』の変換 |

「形容詞化」の場合

「形容詞化」の場合は、常に、①「名詞修飾」の場合と、②「形容補役」の場合に分けて考えるのが原則ですね

そして、「形容詞化」の場合、「動作主」をあらわすことはなく、①「名詞修飾」の場合、「能動分詞」1語であれば「名詞」の前に置き、2語以上で副詞を伴なっていれば、「名詞」の後ろにおきます（「能分名修」と略します）

a man helping other people

「形容詞化」の場合は、「関係代名詞」の「主格」と同様に、『文。』の「主体名語句」を説明する役割を担うのですから、「主体」を別に表記できるはずありません

②「形容補役」の場合は、「自動詞」の次に「補役」としておかれて、「主役・主体」の「状態」をあらわしますね（「能分形補」と略します）（主体は常に一致します）

He is helping other people .

ここで、お気づきでしょう

これは、「進行形」といわれているやつですよ

でも、文法的な概念としては、≪「自動詞」＋「形容補役」≫なんですね

本書では、英語長『文。』を読めるようにするということを主眼にしています

長『文。』を読むには、「純論理的文法的処理」を前提とした「論理的な一文の解釈」を経た、『文。』と『文。』のつながりや「段落」の要旨や「文章」全体の主張を読み取る「論理的文脈解釈」しか必要ありません（「作文者」の「真意」のつかみ取りです）
「読者・解答者」の「感情・感傷」をきいてはいません

「カルチャー講座」とは異なり、「入試」での「古文」「漢文」「詩」「短歌」「俳句」等でも同様で、これらの読解で要求されているのは、社会一般人の常識的感覚に基づいた「論理的解釈」であって、「解答者」の「感情・感想」を聞いてはいません

ましてや、「入試」の「現代文読解」や「英文読解」では、当然「論理的文脈解釈」しか要求されていません

どうあれ、単なる「感覚的」「情緒的」なものは、持ち込んではならないのです

「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているのは、「論理に基づいた常識的思考過程」「常識論理的結論」と「その論理的理由」です

決して、「なんとなくそう感じた」であってはならないのです

とすれば、本論に戻りまして、「進行形」というのは、進行しているように見えるという「感覚的情緒的な感想（思い込み）」にすぎず、「論理的」「文法的」なものではないのです（そもそも進行とは、相当高度な哲学的概念で、西田先生に教えを乞うべき問題ではないでしょうか）

「形容詞」であらわされる「状態」というものは、ある程度の一定期間は継続しているものでして、それを「進行している」というのは、「文法論理」を離れた、「評価」や「感想（感覚的な受け取り）」「感覚」の問題なのではないでしょうか

「能動分詞」の「形容補役」を、通称として「進行形」と呼ぶのは勝手なのでしょうが、それは、「感覚的」「情緒的」「通俗的」なもので、ことの本質や原理をいいあてるものではなく、「非論理的」で、「論理的思考」が停止してしまい、先に進めないことを「覚悟」しなければならないでしょう（それが長年全国で蔓延しているとは驚異！）

現に、従来、≪「b e 助動詞」＋「現在分詞（本動詞）」≫というような「不可解」な「非論理」的な「思い込み」「眉唾公式」に陥っているのです

「動詞」が活用すれば、「品詞転換」が起こるのは言語の常識であり、ましてや「b e 助動詞」（辞書参照）なんて、常軌を逸しているのです

同じ「～ing」が、①「名詞修飾」のときは「形容詞」で、②「補役」のときは、「動詞」であるというような考え方が、「論理的」といえるのでしょうか
複雑な分類をして意味があるのでしょうか（「論理」とは、可能な限り「簡明」「簡便」でなければならないはずというか、自然と「簡素」となるのです）

すなわち、「能動分詞」により『文。』が「形容詞化」された場合も、『文。』の「動詞」に着目した「能動分詞」による「名形副化」の「一形態」にすぎませんし、また、例えば、「名詞化」で言えば、「h e l p」が「h e l p i n g」になったというような、「単語」だけに注目しても、上述の例文の「h i s」や「o t h e r p e o p l e」の「論理的説明」もつけられず、『動名詞』には、「主目補になれる名詞的側面」と「目的語や補語や副詞に従える動詞的側面」の二重の性質がある』というような「現象結果をひたすら追いかけて羅列する」という「微細的思考（ミクロ）」で満足し、≪『文。』全体として「名形副化」されている≫というような「巨視的（マクロ）」「全体的」「総合的」な「抽象化」「上位概念化」はできないのです

しつこく繰り返しますが、「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているものは、「論理的な思考やモノ」「結論提示と論理的理由」「問題解決と思考過程」であって、「感覚的」「情緒的」なものは、「私裏的」な場面でしか通用しないのです

「感覚的」「情緒的」なものでは、「流される」「ほだされる」ことはあっても、「合理的」「説得的」「公的」ではないのです

「副詞化」の場合

「副詞化」の場合は、一般的には「分詞構文」と無（意）味乾燥に呼ばれています
「動作主」をあらわす必要があれば、「主格」であらわします

「主格」という点からすると、「副詞化」の場合は、「副節」に近いイメージがかなり強いのではないかと考えられます

本書では、「分詞の副詞的用法」「分詞準副節」として、第14講で学習します

能動分詞（現在分詞）のまとめ

能動分詞 (現在分詞)	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる (動名詞)
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役(進行形)
	副詞的用法	場面状況の設定 (役外状況族) (分詞構文)

「動詞の活用」に着目した『文。』の「名形副化」のまとめ

	名詞化	形容詞化	副詞化
不定詞	不定詞(準)名節	不定詞(準)形容節	不定詞(準)副節
能動分詞	活用(能動)(準)名節 (動名詞)	活用(能動)(準)形容節 (進行形)	活用(能動)(準)副節 (分詞構文)
受動分詞	—	活用(受動)(準)形容節	活用(受動)(準)副節 (分詞構文)

次講では、「受動態（受動分詞）」と「完了態（完了分詞）」の本質に迫ります

第13講 「受動分詞」と「完了分詞」

「動詞」の「活用」の「第3番目」として、「～e d」というものがありまして、また「不規則変化」というのがあることもご存知でしょう

一般的には、「過去分詞」と呼ばれています

しかし、「過去分詞」と呼ばれているのに、過去の意味はありません

「過去分詞」という用語は、「b e（助）動詞＋過去分詞＋b y～」というような、「受動態」をあらわすとかいう、「眉唾物的な公式」で知られていますね

ここでも、「受動態」＝「b e動詞＋過去分詞＋b y～」と固定化されているうえ、「b e動詞」は「助動詞」で「過去分詞」が「動詞」と「論理破綻」となっておりますが、そんな「現象」の追っかけ羅列や「論理思考停止！終了」でいいのでしょうか

≪「動詞」に「～e d」という「活用」があり、「～される」という「受動状態」もあrawし、「形容詞化」と「副詞化」はされるが、「名詞化」はされない≫というだけのことです（同じ形態ながら、「過去形」は「動詞」扱い、「受動分詞」「完了分詞」は「形容詞」と扱われます）

そして、「形容詞化」した場合は、①「名詞修飾」②「形容補役」で使われるというだけのことです

本書では、その本質的意味から、「受動分詞」と呼ばさせていただきます

「以上です」といいたいところですし、みなさんも、「もう結構」とお思いになっているかもしれませんが、ここでも「屋上屋を架」させていただきます

そもそも、「受動態」とは何なんでしょうか

あくまでも「動作」であり「消極的動作」とも呼ばれるべきものであるという哲学的な考え方もあるようですが、単なる「文法論理」を組み立てるにあたって、「宇宙観」「世界観」「人生観」を語る「哲学」的概念を持ち込む必要があるでしょうか

誰かが他人に殺されて遺体となって、「消極的動作」だと一般的に考えるのでしょうか

「殺される」のは「消極的動作」だと考えて、「有用」なのでしょうか

「殺された」「状態」だと考えるのが常識的ではないでしょうか

「a killed man」は、「名詞修飾」の「形容詞」として認められているのですから、（「動詞」が活用されれば「品詞の転換」が起きるのです）だったら・・・

「He was killed.」が「動作」なんて思う人がいるのでしょうか

「～された」という「状態」をあらわす「形容補役」と考えるべきでしょう

そして、重要な展開的観点ですが、「動詞」のいち「活用形」たる「～e d」形は、「受動分詞」として「受動状態」をあらわし、「状态的」「結果的」になります
「状态的・結果的」意味は「完了的」意味合いをも当然伴い、「受動態」と「完了態」で同じ「～e d」形が使われるようになったと考えるべきではないでしょうか

「過去形」も「状态的感覚」が強く同じ活用形なのかもしれませんが、「動詞」の地位を保っています（要検討）

「受動態」と「完了態」が同じ「活用」であるといっても（例えば、日本語の「れる・られる」のようなものだと考えられます）、「過去分詞」というような実体を示さない名称よりは、それぞれ「受動分詞」「完了分詞」と呼ぶべきものと考えます

では、本論に入り、「受動態」とは、実体的に見れば、「主体・主役」と「目的役」との「立場・視点を変えた描写」です

ここで、「自動詞」と「他動詞」の違いを再考してみてください

「他動詞」には「目的役」があるので「受動態」になれますが、「自動詞」には「目的役」がありませんので、原則的には、「受動態」にはなりません（群他動詞）の場合は「受動態」になれます→本講にて後述）

「自動詞」の「～e d」形は「完了態」であり、
「他動詞」の「～e d」形は「受動態」か「完了態」なのです

「受動分詞」を「形容詞」としてあらたなる『文。』に「転用」する場合、「自動詞」＋「～e d」となり、「自動詞」は「b e 動詞」と「一般の自動詞」ですが、「完了態」の場合は特に「h a v e ・ h a s ・ h a d」という「自動詞」が使われます
この「形式的」な「自動詞」の使い分けによって、一応、「受動態」と「完了態」が区別されます（「h a s」が「助動詞」なんて言うなら、「c a n s」を提示してください）

ただ、≪「b e 動詞」＋「自動詞の完了分詞」（「b e g o n e」）≫という「過渡期的形態」があることは、「受動分詞」や「完了分詞」が「根源同一」の「形容詞」であることの歴史的・無意識的なあらわれではないでしょうか

単独の「自動詞」の「～e d」形を使う場合は、「完了分詞」しかありません（「目的役」がないので「受動態」はありません）

「a d e v e l o p e d c o u n t r y」（「発展してしまった国」→「先進国」）が好例です（a d v a n c e d、m a r r i e d、c l o s e d 参照）

ちなみに、「a d e v e l o p i n g c o u n t r y」は「発展しつつある国」→「発展途上国」です

★ここから先は読み流しにしましょう

受動分詞のまとめ

受動分詞	用 法	役 割
	名詞的用法はありませんが、 「the＋受動分詞」で 「～された人々」となる	「the accused」等が 「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役（いわゆる受動態）
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （分詞構文）

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

・・・ 本講の、ここから先は、はじめのうちは、飛ばすか流すかしてください
「受動分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

④「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

『文。』から「形容詞化」されれば、「目的役」「補役」「副詞」等を伴う複数の語の
まとまりですから、「名詞」の後に置かれるのが原則です

ただし、「受動分詞」「完了分詞」1語の場合は、「名詞」の前に置かれます

①.「自動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」なものしかありません

②.「他動詞」の「受動分詞」の「名詞修飾」の場合

「a broken window」（割られた窓）

「a window broken by the storm」（嵐で割られた窓）

「受動分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「受分名修」です

③ 「受動分詞」の「形容補役」の場合

③. 「自動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

本来、「完了的」なものしかありませんが、
「群他動詞」という考え方の下に「受動態」が可能です

They laughed at him .
群他動詞

≪「自動詞」＋「前置詞」≫を「他動詞」とみなして「受動態」にするのです

He was laughed at by them .
自 群他動詞の受動分詞（「補役」）

④. 「他動詞」の「受動分詞」の「形容補役」の場合

The window was broken by him.
自 他動詞の受動分詞
形容補語 （略して、「受分形補」）

完了分詞のまとめ

完了分詞	用 法	役 割
	名詞的用法はありませんが、 「the＋完了分詞」で 「～してしまった人々」となる	「the learned」 「the deceased」等が 「主目補」になる
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②「自動詞have」の 「補役」となる
	副詞的用法	場面状況の設定 （役外状況族） （完了的な分詞構文）

自動詞	完了分詞
他動詞	受動分詞
	完了分詞

「完了分詞」の「形容詞的用法」をみておきましょう

㉔「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

⑤.「自動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「完了的」しかありません

「a escaped man」(逃げ出してしまった男)

「a country developed in 19th century」も可能です

「完了分詞」が「名詞を修飾」していますので、略して、「完分名修」です

⑥.「他動詞」の「完了分詞」の「名詞修飾」の場合

「受動的」なものしか見当たりません（「受動的」な修飾に収束してしまうのでしょうか）

㉕「完了分詞」の「形容補役」の場合

⑦.「自動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has arrived in Okinawa.

自

自動詞の完了分詞

形容補語

（略して、「完分形補」）

⑧.「他動詞」の「完了分詞」の「形容補役」の場合

He has finished the work.

自

他動詞の完了分詞

形容補語

（略して、「完分形補」）

ちょっと面倒でしたかね

ここは、あんまり難しく考えないでください

★印からの「受動分詞」のまとめや「完了分詞」のまとめ以降は、飛ばしてあとからゆっくりやってください（本講のはじめの2ページだけしっかり理解してください）

次講は、「動詞」の「活用・転換・転用」の学習の最後になります

従来、「分詞構文」と呼ばれている、「能動分詞」と「受動分詞」の「副詞的用法」、すなわち「活用準副節」と呼ばれるべきものを見ていきましょう

補足 < the + 分詞 >

- ① 「the + 能動分詞 (～ing)」 ⇒ 「～しつつある人々 (物事)」
- ② 「the + 受動分詞 (～ed)」 ⇒ 「～された人々 (物事)」
- ③ 「the + 完了分詞 (～ed)」 ⇒ 「～してしまった人々 (物事)」

以上のような公式がありますが、「分詞」のあとに「people」「thing」等の省略と考えた場合、「people」「thing」の残滓を強く考えれば「形容詞」と考えられますが、「people」「thing」を無きものと考えれば「分詞」の「名詞化」と考えられます

- ① 「the dying」 ⇒ 死にかけている人 (々) → 瀕死の人 (々)
- ② 「the accused」 ⇒ 訴えられた人 (々) → 被告人
「the unexpected」 ⇒ 予期せぬ出来事
- ③ 「the deceased」 ⇒ 亡くなった人 (々) → 故人
「the learned」 ⇒ 学んだ人 (々) → 学者

補足 << 受動態の考察 >>

「受動態」文法的実体はどういうものでしょうか

それは、「受動分詞」を利用した『文。』の「受動転換的形容詞化」のなのです

「能動分詞」のような単なる「形容詞化」ではなく、「主目」転換を伴った「形容詞化」です（「副詞化」も同様ですが、以下省略して説明します）

そして、『文。』の「形容詞化」の一種なのですから、元の『文。』の「構成要素」や「副詞系」を従えているのです（これは、「『文。』の名詞化」や「『文。』の副詞化」と同様ですね）

ここでの注意は、元の『文。』の「目的語」を中心に据える転換ですから、元の『文。』の主体は表舞台からは降りて、後方支援にまわっているのです（「副詞」化）

その結果、元の主体を表したい場合は、「b y +目的格」となり（「副句」ゆえに省略されやすい）、元「補語」・元「副詞」のようには必須的には残存することはないのです

第14講 『「分詞」の「副詞的用法」』⇒「準副節」

一般に「分詞構文」といわれているものがありますが、実体的には「分詞の副詞的用法」であり、「副節」を「簡略化」したものですので、本書では「活用準副節」と呼びます（「分詞構文」という名称では、あまりに形式的で、実体がつかめません）

（しよせん、「準副節」であり、難しいことは何もありません）

「副詞系」ですので、「副詞三原則」があてはまりますが、「意味」の範囲は少ないです（また、「挿入」と「文全体修飾」に注意ですね）

I「準副節」のつくり方、II「準副節」の意味、III「詳細注意事項」の順で見えます

I 「準副節」のつくり方

- ①「副節」の「副節詞（成節詞）」を取り去る（まれに残存する場合もある）
- ②「主節の主部」と「副節の主部」が一致していたら、「副節の主部」は取り去る（「副節」の「主部」が「固有名詞」の場合は「主節」に移動する）
- ③「副節」の「動詞」を「分詞」に変える
「能動態」の「動詞」は「能動分詞」に変える
「受動態」の場合、「受動分詞」はそのままにする（「自動詞」を「分詞」にする）
- ④「be動詞」は「being」にする → 「省略できることに注意」

When Taro went home, he saw a patrol car.
① ② ③ ②

- ① 「副節詞（成節詞）」を取る
- ② 「副節のTaro」と「主節のhe」が同一人物で一致しているので、固有名詞の「Taro」を「主節」に移動し、「副節」の「主語」は取る
- ③ 「went」を「going」に変える

Going home, Taro saw a patrol car.

「while」「if」「though」の場合は、「while doing」のように、意味を明瞭にするために、「副節詞」が残る場合が多いです

Ⅱ 「準副節」の意味

「副詞三原則」に掲げた、通常の「副詞」の意味よりは、かなり限られています

種 類	日本語訳	元の「副節詞」
時	～するとき、 ～したあとで ～するとすぐに	「when」「as」 「after」 「as soon as (「群副節詞」)」
理 由	～なので	「because」「as」
条 件	～すれば	「if」
譲 歩	～だけれども	「though」「although」「as」
付帯状況	～しながら(「同時」)	「while」「as」
	～して(「連続行為」)	「, and」(「等位接続詞」)

訳すにあたっては、「時」「理由」「付帯状況」がほとんどで、その他はまれなので、まずは、「時」「理由」「同時」「連続行為」の「訳」を当てはめてみてください
また、二通り以上の「訳」が当てはまる場合もあります

「準副節」は「副節詞」がないので、はっきりとした意味がとりにくいものです
実際は、「副節」と「主節」との関係を文脈から読み取る「解釈」の問題なのです
まずは、上記の意味を覚え、当てはめてみるのが有効でしょう

「文章全体」や「段落」での位置関係をしっかり見極めてください
難易度の高い「解釈」を要求される場合もあります(次の例文参照)

「彼女のことを好き①」、私は彼女と結婚します」
「彼女のことを好き②」、私は彼女と結婚しません」
「彼女のことを好き③」、私は彼女と結婚しません」

①は「なので」が普通ですね

②は「だけれども」が入るでしょうね

③に、「なので」が入り得るのがわかりますか

収入とか家の許しだとか様々な「外的要因」があるでしょうし、生活に疲れる様子を見たくない(美しい思い出にしたい)というような「内的要因」もあるかもしれません

このように、文脈・場面状況に応じた「解釈」をしなければならないのです

ここからは、基本構造の理解という本書の射程からすると細かすぎる知識なので、あとからじっくりやってください（最初は流し読みで結構です）

III 「準副節」の詳細注意事項

①「否定」

「n o t」「n e v e r」は「分詞」の直前に置きます

B e c a u s e I c o u l d n ' t r e m e m b e r h e r n a m e , I d i d n ' t s p e a k t o h e r .

N o t r e m e m b e r i n g h e r n a m e , I d i d n ' t s p e a k t o h e r .

②「時のズレ」

「主節」より時間が古い「準副節」には、「h a v i n g」で時間調整をします

B e c a u s e I s l e p t w e l l , I a m f i n e n o w .

H a v i n g s l e p t w e l l , I a m f i n e n o w .

「副節」が「過去完了」の場合は、「h a d」を「h a v i n g」にするだけです

③「受動態」と「b e i n g」「h a v i n g b e e n」の省略

「準副節」が「受動態」の場合、「b e i n g」「h a v i n g b e e n」は、通例省略されます

W h e n h e w a s s c o l d e d b y h e r , h e w a s s i l e n t .

(B e i n g) S c o l d e d b y h e r , h e w a s s i l e n t .

Because he had been praised by her, he was happy.

(Having been) Praised by her, he was happy.

④「同格」と類似の「文頭の名詞」

(Being) A gentleman, Taro never gets angry.

「タローは紳士なので、」と「理由」の「準副節」で訳します

⑤「文頭の形容語」

(Being) Cheerful, Hanako is loved by everyone.

「ハナコは快活なので、」と「理由」の「準副節」で訳します

⑥「主部の不一致」

「主節」と「副節」の「主部」が一致していない場合は、「準副節」の「主部」はそのまま残します（「独立分詞構文」といわれています）

Because her mother was ill, Hanako cared of her.

Her mother being ill, Hanako cared of her.

「形式的な主語」といわれている「there」（実際は「副語」）も残します

Because there was no seat, we kept standing.

There being no seat, we kept standing.

⑦「連続行為」

He came into my house, and took off his hat.

「連続行為」の場合、上の例文では、以下の二通りが可能です

Coming into my house, he took off his hat.
(私の家に入り、彼は帽子をとった。)

He came into my house, taking off his hat.
(彼は私の家に入って、帽子をとった。)

「挿入」すると、意味が異なります(「付帯状況」になります)

He, taking off his hat, came into my house.
(彼は、帽子をとりながら、私の家に入った。)

⑧「慣用的な準副節」

参考までに、主な「慣用的な準副節」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です(副節由来の慣用的な副句というべきでしょうか)

慣用的な準副節	意 味
generally speaking	一般的に言えば
frankly speaking	率直に言えば
strictly speaking	厳密に言えば
all things considered	あらゆることが考慮に入れられると
weather permitting	天気がよければ
speaking of ~	～と言えば(「群成節詞」と捉えるのも可能)
talking of ~	～と言えば(同上)
judging from ~	～から判断すると(同上)
take ~ into consideration	～を考慮に入れると(「第21講」参照)

慣用的な表現は、基本を確実に学んだ後に知りたいですね(無知なバカ暗記は徒労ですよ)

《上記表への補注》

「一般的な主語が省略されています」

「all things (being) considered」となります

「weather」は「準副節」の「主語」です

「take」は「拡張動詞」で「into consideration」は「形容補句」です
等を参考に、「文法的」に考えてみて、「元の副節」を復元してみてください

⑨「分詞の副詞的用法」の「副節詞化」

参考までに、主な「分詞の副節詞化（分詞の後ろに完全な『文。』＝「節」がくる）」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です

分詞の副節詞化	意 味
assuming (that) assume (that) (命令形によるもの)	～と仮定して、～とすれば (～を想定すると)
considering (that) (成句詞化もある・・・後ろに名語句がくる)	～を考慮すると ～のわりには
given (that) (成句詞化もある・・・後ろに名語句がくる)	～と仮定すると (～を与えられると) ～を考慮に入れると
granting (that) granted (that)	仮に～だとしても (～を認めると、～が認められると) (～を与えると、～が与えられると)
providing (that) provided (that)	もし～ならば、～という条件で (～を与えると、～が与えられると)
seeing (that)	～であるからには (～を認めると) ～であることからすると
supposing (that) suppose (that) (命令形によるもの)	もし～ならば (～を想定すると)

「命令形の動詞の副節詞化」もあげておきました

⑩「分詞の副詞的用法」の「成句詞化」

参考までに、主な「分詞の成句詞化（分詞の後ろに「名語句」がくる）」をあげますが、細かい知識なので後回しで結構です

分詞の成句詞化	意 味
a c c o r d i n g t o ~	～によれば、～に従って
c o n c e r n i n g ~	～に関して言えば、～について
c o n s i d e r i n g ~ (副節詞化もある) (n o t w i t h s t a n d i n g 参照)	～を考えれば ～のわりには ～にもかかわらず
e x c e p t i n g ~	～を除いて
g i v e n ~ (副節詞化もある)	～を考慮に入れると (～をあたえられると)
i n c l u d i n g ~	～を含めて
r e g a r d i n g ~	～に関して

「Ⅲ」の「注意事項」は細かすぎましたね

（本書の「基礎理論・構造把握」という主眼からはすれ、「基礎知識編」とでもいうべき「別巻」の守備範囲ですね）

本講では、「分詞の副詞的用法」により「副節」が「簡略化」されているという実態を学習しているのだということを見失わないでください

本書の「文法の基本事項」・「『文。』の基本構造」を理解するという基本的なねらいからすると、「Ⅰ」と「Ⅱ」をしっかり理解することが重要です

そして、「副節」の意味（文脈）を決める「副節詞」がなくても、「主節」とのかねあいから意味がおおよそ決められるのがわかったでしょうか

また、「時」でも「理由」でも「付帯状況」でも、どれでもいい「場面状況」だと「作文者」が思っているので、「副節詞」なしの「準副節」を使っているとも言えます

では、次講では、「名詞系」「形容詞系」「副詞系」というように、全体像を大きくまとめて俯瞰してみます

「系」というのは、それぞれの「品詞」をさらに大きくまとめた言い方です

「第〇七講」の講末の再掲の補足です

「第〇七講・節」の段階ではかなり難しい内容でしたが、本講終了後（理解後）ならば、ある程度容易に理解できるかと思います

実は、「第〇七講」終了段階と「第14講」終了現在の「理解度・認識度」の違いを認識・実感していただきたいのです

「転用副節詞」

①『「名語句」＋「同格のthat節」』全体を副詞として働かせたい場合、
「名語句＋that」が「副節詞」として作用します

多くの場合、「that」が省略されますので、実質的には「名語句」が「副節詞」として働いているので、「名語句の副節語への転用」といえます

「the instant (that) 節」参照

②「動詞」の活用形態である「能動分詞」と「受動分詞」で、その「動詞」が「他動詞」で「that節」に従えることができる場合、「分詞＋that」が「副節詞」の働きをする場合があります（本講の⑨の表を参照）

「that」は省略される場合がほとんどなので、「分詞」自体が「副節詞」の働きをしています

「動詞」の「活用形」たる「分詞」の「副節詞」への転用といえます

③「成句詞＋名語句＋同格that」全体が「副節詞」として働いている場合もあります

「on condition that」参照

これらは、一語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策ですが（「群副節詞」）、ただ、以上のような成立過程を認識理解していることが理解の経過として肝要かと思います

第15講 「名形副」系と「他動詞」の様々な「目的役」類

名詞系のまとめ

名詞系 ①「主目補」になる ②「成句詞」の 「後属役」になる	名語
	名句
	代名詞
	不定詞の名詞的用法 (wh句を含む)
	能動分詞 (現在分詞) の名詞的用法 (動名詞)
	名節 (that節、if節、whether節、wh節)
	▲複合関係代名詞による名節 ▲複合関係形容詞による名節

▲印は、本書ではまだ学習しておりません (別巻で学習する予定です)

形容詞系のまとめ

形容詞系 ①「名詞修飾」する (役外装飾族) ②「補役」になる	形容語
	形容句
	不定詞の形容詞的用法
	能動分詞 (現在分詞) の形容詞的用法
	受動分詞 (過去分詞) の形容詞的用法
	完了分詞 (過去分詞) の形容詞的用法
	形容節 (関係代名詞節・関係副詞節) 注意

注意 「形容節」は「補役」にはなれません (「先行詞」名詞修飾のみです)

副詞系のまとめ

副詞系 「場面状況」の設定 (役外状況族)	副語
	副句
	不定詞の副詞的用法
	能動分詞 (現在分詞) の副詞的用法 (準副節・分詞構文)
	受動分詞 (過去分詞) の副詞的用法 (準副節・分詞構文)
	完了分詞 (過去分詞) は主に、「having」で全体が「副詞化」する
	副節
	▲複合関係代名詞による副節
	▲複合関係形容詞による副節
	▲複合関係副詞による副節

▲印は、本書ではまだ学習しておりません (別巻で学習する予定です)

これまでの学習で、『文。』は、「名詞」「形容詞」が、「自動詞」か「他動詞」に支配されて主題があらわされ、「副詞」によってその場の「場面状況」が設定されているものだということがわかったと思います

ただ、単純に「名詞」「形容詞」「副詞」といっても、いろいろありました

ここで、様々な「名詞」「形容詞」「副詞」を、それぞれ「名詞系」「形容詞系」「副詞系」という大きな視点で総括し、上記のような表にまとめてみました

各、「名詞系」「形容詞系」「副詞系」を使いこなせるようにしてください

ここで、大事な視点は、「不定詞」だ「分詞」だと微細にテクニカルに分断して学習したり考えたりしてしまうのではなく、『文。』中での役割（「文役」「主目補」）や、「名詞」なのか・「形容詞」なのか・「副詞」なのかを見極めつつ、どういう形態（「語」「句」「節」「不定詞」「分詞」）で表現されているのかを大きな視野で認識することです

例えば、場面状況として「目的」をあらわしたい場合

「句」→「in order to play tennis」

「節」→「so that he can play tennis」

「不定詞」→「to play tennis」

となるのです

この違いは、作文者の選択の問題です

もうひとつ注意点があります

「他動詞」の扱いです

「他動詞」の「目的役」類となる「名詞系」の整理整頓はタイヘンです
個々の「他動詞」によって、「名詞系」のうち、どの「名詞」が「目的役」として可能かどうか慣用的に決まっているからです（個別の採否・可否の問題）
どんな「名詞系」でも「目的役」として可能というわけではないのです

例えば、「want to do」「know that 節」は可能でも、「want that 節」「know to do」は認められないのです

また、「enjoy」「stop」「finish」の「目的役」として「～ing」は認められますが、「to do」は認められず、「enjoy」「stop」「finish」の後ろにある「to do」は、「役外状況族」の「副詞的用法」と解釈せざるを得ないので

これらは、論理必然というものではなく、使用者の慣用であり、個々の「他動詞」に個性を認め、逐一覚えていくしかありません（まさに、辞書の「用例」の活用！）

ここで、活躍するのが、「辞書」なのです

「辞書」が「『意味』を調べるものだ」と思っていたら、「負け」の始まりです

主に「品詞」の確認と、「自動詞」「他動詞」「形容詞」等の「品詞の用法」を調べるためにあるのが、「辞書」なのです

例えば、まずは調べようとしている「他動詞」の「目的役」として何が可能か、すなわち「～ing」「to do」等が「目的役」として使われるのかというように、「品詞の用法」を調べるのが辞書の使用法なのです

もちろん、「名詞」「副詞」の「用法」も重要ですが、まずは「自他形」の「用法」を調べ知ることが上達の近道だと思います

始めのうちは、「意味調べ」に拘泥するのも仕方ありませんが（あとあと考えると困ったもんです）、ある程度、「文法」の学習が進んできたら、「品詞分解作業」における、「品詞確認」「用法確認」が中心となってくるはずです

知らない単語を目にしても、たとえ「一文」であっても、その文の状況の範囲内で、「品詞と文役の推測」「用法の推測」とともに、「意味の推測」をしてから、「辞書」で、「品詞・文役確定」「用法確認」「意味確定」をしなければならないのです

殊に「品詞の推測」は重要で、ひとつの単語に「名形自他＋副」が混在しているのはまれではないので、上から全部なぞるのは徒労ですから、「品詞」のあたりをつけて、「意味」を推測してから「意味」「用法」を確認するのです

その後、「一文」と「一文」の「有機的關係」から、「文脈的」・「論理的」な「解釈」へと進んでいくのです

「辞書」の「使い方」

- ① 「品詞」「語句節」「文役（主目補）」「役外族」「後属役」をおおよそ理解し、これらの「（立体的）位置関係」がわかってきたら、「品詞分解作業」に集中し、「品詞確認確定」と「文役確定」のために使う（「例文」熟読検討！）
- ② 「自動詞」「他動詞」「形容詞」の「用法」を確認する（「例文」熟読検討！）
- ③ 「名詞」「副詞」の「用法」の確認をする（「例文」熟読検討！）
- ④ 「わからない単語」があっても、「位置関係」から「品詞」「文役」「後属役」「役外族」等を確認確定し、そこから、「意味」を「推測」してから、「辞書」の中からふさわしい意味を探し、確定する（辞書に載っていないが、文脈に合う「適訳・名訳」を「国語辞典」「漢和辞典」を駆使して発見できるようになれば一人前ですが、これが「語彙」の習得・蓄積・引き出しの課程です）

「意味」は、適宜、好きなときに拾ってくださいということです（「意味より用法」）

次に、「他動詞」の「目的役類」について少し考えてみましょう

「他動詞」の「目的役類」の認識

「他動詞」の様々な「目的役」類とその採否（可否）という問題に関して、参考までに、「能動分詞の名詞的用法」と「不定詞の名詞的用法」のいずれかを「目的役」に用いることにより意味が異なる「動詞」の主なものを以下に示します

単 語	能動分詞（過去の）	不定詞（未来的）
r e m e m b e r	～したことを覚えている	忘れずに～する
f o r g e t	～したことを忘れる	～するのを忘れる
r e g r e t	～したことを後悔する	残念ながら～する
t r y	ためしに～してみる	～しようと努力する
g e t	～し始める	～するようになる

個々の「他動詞」には個性があり、「目的役」として許される「名詞系」と許されない「名詞系」があるということを確実に理解して、「他動詞」に対峙してください

そして、これからは・・・「動詞」と言ったり、「一般動詞」や「b e 動詞」と言うのも何の効用也没有ません

「自動詞」「他動詞」ときっちり分け、さらに「自動詞」は「自立動詞」「補完動詞」に確実に分類・認識し、「他動詞」は「関渉動詞」「授与動詞（第20講参照）」「拡術動詞（第21講参照）」と分類・認識しなければなりませんし、さらに、個々の「他動詞」では、「目的役」としてどんな「名詞系」が可能なのかを習得しなければならないのです（ここが辞書の活用・活躍の場です）

ここまでは一般的にある程度は行われていますが、さらなる分類が有効です

次からは、「動詞」や「形容詞」の実際の運用のされ方を細かくみていくのです
「さらなる分類」を提示していきます

次講では、「他動詞」の4番目の類型（「動詞」全体では6番目）をみていきましょう（次々講では、「形容語」について詳しく分類します）

「さらなる分類」の顕現です

「英語」の「学習・勉強」の「進め方」

- ① 基礎的「論理的」な「英文法入門」レベルを徹底的に理解する（本書）
- ② 「基礎的英文法問題（集）」一通りこなす
- ③④ 「入試レベル文法問題（集）」を徹底的にこなす
- ③④ 「基礎的英文読解問題（集）」（一問が数行・数文程度のもの）を一通りこなす
- ⑤ 「入試レベル長文読解問題（集）」を徹底的にこなす
- ⑥ 「過去問」をこなす

これは、ひとつの提案にすぎませんが、「英語を苦手とする方」には最適だと考え提示しました（１００年以上の旧来の「文法少々、読んで訳す」という悪弊はやめましょうよ）

なぜなら、スポーツと同じ「手法」だからです（その指導法が先進的だからです）
「長文」を読みながら（初見の）「文法」を学んでいくという従来の「主流的」な「方法」では、多くの「英語を苦手とする人」は捨て去られてきました（いきなり「試合」ですか、毎日「試合」をしながら「ルール」を学んでいく方法が主流ってことですか）

この方法は、「英語が得意なお方が、英語が得意なお方に教える方法」で、「英語が苦手な衆には向かない方法」でしょう（英語の指導担当者も物理や化学を指導してみましょうよ）

スポーツだって、「天才的な元選手」が「才能のある選手」「将来のスター選手」を指導するだけではないでしょう

「努力家の元無名選手」「研究肌の元控え選手」等がよき指導者となり、「いまいち才能の無い選手」「苦手な選手」などいろいろな人を、その人にあったメニューで、「体力づくり」「筋トレ」「基礎的練習」「技術指導」「練習試合」等と段階を踏んで育てていく方法もあるはずでしょう（ある意味、「自己MAX」到達を前提とした「人権問題」です）

高校英語や大学受験英語だって、スポーツや理系科目と同様に、「基礎理論」すなわち「基礎的文法事項」を理解して、「一文」を完全に読めるようにしてから、「細かい文法事項（詳細知識）」にかかり、「数文」の読解を経て、最後に「一文」の多数の集合体である「長文」に取り組むべきでしょう（ただ、本格的長文読解の前に、現代文読解を完成させておきたいものです）

いきなり「練習試合」すなわち「実践（長文読解）」の中で、大まかな文法事項を覚えて、「読んで訳」していくというのは、もう時代錯誤でしょう

「練習中に水を飲むのは根性がない」という昭和の常識を正常だと思いますか？

長文読解のなかで文法を学んでいく方法が、合っている方はそれで結構ですが、「英語を苦手とする人」をはじめとする多くの人々に、旧来的陋習的一方法を一律に強制されるべきものではないでしょう

「論理的」「合理的」な様々多数の「方法」の中から、「自分に合った方法」を自由に選択すべき権利が当然あるものと考えます

本書は、英文の構造の基礎的全体像を解析提示し、その論理体系の理解と品詞分解的読解と論理的思考が英語学習の主脈のひとつであることを提案しているのです

第16講 「あとひき他動詞」と「固有必須の副詞」

「英語の苦手な人」って「英語も社会（科）のような棒暗記でやる気がしない」って思い込んでいたり、「英語嫌悪人間」は「暗記の嫌い」な「数学・物理の好きな理系」の人に多くて、「数学・物理は論理だからいいけど、英語・社会・古文はただの暗記科目でわけわんねえ」って、決まって言いませんか（本書では、これを打開し、「英文法」の「論理科目化」「科学化（化学化）」の試行を断行しています）

そこで、「化学」と「現代文」に「漢文」なんですが、ここが、理系の人でも分かれるんですよね

そう、「中間的な科目」なんですね

論理性に満ちてはいますが暗記部分（論理不明部分）もあり、多少面倒だけど、その暗記部分を覚えてしまえば、あとは論理に乗っていける科目なんですよ

だから、意外と、理系の人に、「現代文・漢文が得意」っていう人がいて、「物理」好きの人に、「化学がめんどい、苦手」っていう人がいるんですね

「化学」は、論理的ではあっても現象を追いかけるというところから、どうしても暗記事項が増えてしまうんでしょうし、「現代文」「漢文」は「他人を説得する論理的な『文。』の集合体」ですから、文脈的論理性がかなり詰められているんですね
従来、教える側も、教わる側も、「英語・古文・漢文・社会は暗記科目」「数学・物理・化学は論理科目」っていう「暗黙の分断」があったのではないのでしょうか（下手をすれば、「古文」は「情緒感傷鑑賞科目」っていうところがありますね）

本書の主眼は、その中間を考えましょうよということなんです

「英語」を出来る限り「論理的」「科学的」に捉えて、「化学」のような科目にしてしましましょうよってことなんです（現象の羅列ではなく、論理的体系化です）

「現代文」はもとより、「漢文」も「古文」もこの方策で捉え、「化学」的にしてしましましょうよって考えているんです（実際、暗記の多寡はありますが、当然ながら「社会」も特に「地理」は論理科目なんですよ、社会科学の入り口ですからね）

余談はさておき、本講では、「後続的他動詞」、別名「あとひき他動詞」という、「関渉文型」の特殊な場合について見ながら、次の諸点について考えてみましょう

- ① 『文。』による「情報伝達」とは何なのかを、再考してみましょう
- ② 「英語が苦手な人」に「熟語、熟語、熟語」って押し付けて、何の効果あるのでしょうか
- ③ 「品詞分解」「構造把握」「構造分析」で、「論理体系のない現象棒暗記撲滅運動！」
- ④ 「論理」で攻めれば、「おおよその分野では、ある程度、いや、全部なんとかなる」ということを垣間見ましょう

「後続的他動詞」「あとひき他動詞」とは

ここで、「後続的他動詞」、別名「あとひき他動詞」という「概念」「範疇」を考えていきます

まず、例文をあげます

I p l a y t e n n i s .
 他 目

「p l a y」が「他動詞」ですので、「目的役」の「t e n n i s」は「必須」となります

ここまでは、いわゆる「5文型」といわれている、「自動詞」「他動詞」による『文。』の支配」と「構成要素提示責任」や「情報提示責任」の問題なのです

では、この他の「情報」は「必須」なのでしょうか

例えば、次の例文の□の中には、様々な「副詞系」による「情報」を置くことができます

「時」「場所」「程度」「頻度」「目的」「手段」「理由」「譲歩」などです

□ I □ p l a y t e n n i s □ .

しかし、これらの「副詞的情報」は、『文。』の構造の観点からは、本質的には「どうでもよい情報」（アクセサリー類似）で、「必須の情報」ではありません

「副詞」による「情報」は、原則的には「どうでもよいもの」で、省略されやすいものでした

次の例文はどうでしょうか

① H e i n t e r e s t e d t h e m □ i n t e n n i s □ .

「彼は、彼らに、興味を起こさせた。」で、「情報」が十分といえるでしょうか
読み手や聞き手は、「何に関して?」と先を「推測」して、待ち構えているでしょう

「H e i n t e r e s t e d t h e m .」で止めていいわけがありません

「i n t e r e s t」という「他動詞」を使った以上、「興味を起こさせたモノ」を、読み手や聞き手は要求し、作文者や発言者は「提示すべき責任」があるのです

このような「必須的情報」を、「i n t e r e s t」という「他動詞」の場合は、「i n ~」という「副句」であらわすのです（「構成要素」外の必須の情報というのは驚きですね）

このように、「他動詞」の性質・種類によっては、「一個の目的役」以外の「情報」を意味的に「必須」とするものもあるのです

ひとつは、「授与動詞（第Ⅳ文型）」といわれ、「目的役」に「人目的」と「物目的」のふたつを「必須」とするものであり（第18講参照）、もうひとつは、「第Ⅴ文型」といわれ、「目的役」の後ろにさらに「目的役を説明する補役」が「必須」となる「拡張動詞」です（「拡張動詞」という名称は本書によるもので、第19講で詳述します）（ここまでは、「構成要素」として認められている情報です）

さらに、第3の類型（「他動詞」の第4の類型）として（あえていえば、「第6文型」となるでしょうか）、特定の「副詞」を「必須」の「情報」とする「他動詞」があるのです（「構成要素」外の「副詞的信息」を必須とする驚きの「文型」です）

ここでは、「後続的他動詞」、別名「あとひき他動詞」と命名しておきます

また、「必須」の「情報」である「副詞」を「固有必須の副詞」と命名します

次に、「あとひき他動詞」の別の例として、次に2つほどあげます

- ② He based his plan on her idea .
彼は、彼の計画を彼女の発想の上に基づかせた。（直訳）

- ③ They convinced her of his success .
彼らは、彼の成功に関して、彼女を納得させた。（直訳）

ここで、「 」の情報がなくて実質的な伝達が成り立つでしょうか

「他動詞＋目的役」で「文法的」に成り立ってはいても、「情報伝達責任」は果たされてはいませんね

このように、「情報伝達責任」の完遂のためには「固有必須の副詞」が不可欠な「他動詞」もあるのです（「後続的他動詞」、「あとひき他動詞」）

では、①②③を「受動態」にしてみましょう

- ④ They were interested in tennis by him .

- ⑤ His plan was based on her idea by him .

- ⑥ She was convinced of his success by them .

④⑤⑥の「by～」は、ある意味「どうしてもよい情報」の「副句」です

それに対して、「固有必須の副詞（句）」はそのまま「固有必須の副詞（句）」です
「彼らは、興味をひきおこさせられた（直訳）」「彼らは、興味をもった（意訳）」だけで「情報」が十分とはいえません

受動態になっても、「何に」という「情報」が「必須」なのがわかりますね

《「自動詞」＋「受動分詞形容補語」＋「固有必須の副詞」》と「抽象化」できますが、その実体をどうとらえるかが重要なのです

これ全体を一体的に「熟語」ととらえるのか、「元の『文。』」に遡れる単なる「受動態」に過ぎないと認識するのかで、英語の学習に対する態度や展開が分かれるのです
「群集的・一体的」なものとしてとらえて「丸暗記」となるのか、「分析的」にとらえて「品詞分解」をし「元の『文。』」に遡る「構造把握」となるのかと言えるでしょう

④ 「be interested in～」

⑤ 「be based on～」

⑥ 「be convinced of～」

これらそれぞれを「熟語」ですと言って覚えていけばいいのでしょうか

ただでさえ、「受動態」というのは変則的事態なのですから、常に「原則・原型」に還らなければならないのです

あくまで、「原則・原型」があって、その「変形」なのだという「認識」が重要なのです（原則・原因に遡れる認識力の有無や涵養が社会的に重要なのです・・・貢献力）

仮に、「原型」が使われることがなくなり、「変形」しか使われていないとしても、それは、「慣用」「現象」の問題であって、「文法」「論理」を学ぶ段階では、「原則・原型」とその「変形」という関係を意識しなければならないのです

ちなみに、

⑦ The news surprised him.

⑧ He was surprised by news.

⑨ He was surprised at news.

⑦には「固有必須の副詞（句）」は存在しませんので、「受動態」は⑧になり、「by」が慣用的に⑨の「at」になっただけです

④⑤⑥と⑧⑨は根本的に違うのに、一括して「be surprised at～」も「熟語」・・・なんて言っていいいんでしょうか

「受動態の後ろに残るもの」

「受動態」の『文。』に接する場合、「注意すべきこと」があります

「受動態」とは、実態体的には「他動詞」の「目的役」や「自動詞＋成句詞」の「後属役」を「主部」にして、見る立場を変え、「主客逆転させた描写」です
文法論理的には、「『文。』全体の受動分詞による受動転換的形容詞化」です（第15講参照）

その転換の結果の文法的基本構造は、
«「受動分詞形容補役」＋「その他」»です

今回の「注意すべきこと」とは、この「その他」に注目するということです
「その他」を「文法的に認識把握することができるか」ということです

厳密慎重に認識しないと、なんでもかんでも「副詞系」としてしまい、「フィーリング読み」「感覚訳」に陥ります

«「その他」の種類»

- ② 「純粋な副詞」（「時」「場所」のような一般の「副詞」）
- ③ 授与文型」（第18講参照）の「元・人目的」もしくは「元・物目的」
- ④ 拡張文型」（第19講参照）の「元・名補役」や「元・形補役」
- ⑤ 「あとひき他動詞」の「固有必須の副句」（本講）
をあげることができます（詳細は、第19講の講末の「補足」を参照してください）
- ⑥ ④には特に注意をして、「その他」を認識し、確定させながら「英文」を「読解」するように努めてください

本講では、「あとひき他動詞」の認識と、その「能動態」の『文。』を「受動態」にした場合に、「固有必須の副句」を認識しているかということを学習してきたのです

次講では、「あとひき他動詞」に近似する存在である「あとひき形容詞」について見ていきます（「形容語」の使い方の詳しい分類です）

第17講 止まらない「あとひき形容詞」というものもあります

本講では、「形容詞」というものの使い方（運用）を再認識していただきます
「形容詞」の大きな働きは、「名詞修飾」と「補役」でしたが、細かく見ると、もう少し分類できます
単に「形容詞」といっても一通りではないということです

簡単にいうと、「自動詞」と「他動詞」に分類したあと、「他動詞」の中にも「後続的他動詞（あとひき他動詞）」があるように、「形容詞」にも、単純な「形容詞」すなわち「停止的形容詞（止まる形容詞）」と展開的な「形容詞」すなわち止まらない「後続的形容詞（あとひき形容詞）」があるのです

「停止的形容詞（止まる形容詞）」とは、終息的な意味を持つ「形容詞」で、「形容詞」の「具体的状況内容」を説明する必要がないものです

これに対して、「後続的形容詞（あとひき形容詞）」とは、用いた「形容詞」だけでは意味が終息せず、「形容詞」による「状態説明」の後に「具体的状況内容」を引き続き「（固有必須の）副詞系」で「状況説明」しなければならないものです

たとえば、「背の高い少年」で終息しますが、「いっぱい箱」といっても終息しません

聞き手・読み手は先を予測し「何モノで（いっぱいなのか）」期待しています
「お菓子で」「いっぱい箱」と情報を完全に伝達する責務があるということです

また、形式的な観点からは、「形容詞の運用」は、「名詞修飾」の「前置」「後置」の2種類と、「補役」の場合と、そこに「比較」が組み合わさってくるのです

なお、「後置修飾」の場合は、「形容節詞（関係代名詞）＋be動詞」が省略された、「簡略的な形容節」と考えられ、特別なものではありません

「形容詞」への視点と対処

- ①、「停止的名修」なのか → ①「前置」②「後置」があり、「中心名詞」に吸収され消滅する
- ②、「停止的補役」なのか → ③「構成要素」として活躍する
- ③、「あとひき形容詞」なのか → ④「あとひき後置名詞修飾」か⑤「あとひき補役」か
- ④、「比較」しているか → ⑥⑦⑧（比較があるのは「形容詞」と「副詞」です）

「形容詞」の「後置（あとおき）」には十分注意してください（「形容節」が典型です）

I 形容詞の運用（使用方法）の分類

① 「停止的形容詞」の「名詞修飾」

① 「前置名詞修飾」

a pretty girl (in our class)

② 「後置名詞修飾」・・・（「簡略形容節」） → 緊密な「副句」を伴う

a girl (who is) pretty in our class

② 「停止的形容詞」の「補役」

③ 「単純補語」

The girl is pretty .

③ 「後続的形容詞（「あとひき形容詞」）」

④ 「後続の後置名詞修飾（「あとひき後置名詞修飾」）」・・・（「簡略形容節」）

a box (which is) full of books

「固有必須の副句」を伴う

⑤ 「後続的形容補役（「あとひき形容補役」）」 → 「固有必須の副句」を伴う

The box is full of books .

She is sure of his success .

①「比較形容詞」を伴う三つの場合

⑥「比較形前置名詞修飾」

the tallest girl

⑦「比較形後置名詞修飾（「比較形あとひき後置名詞修飾」）」・・・（「簡略形容節」）

→ 比較対象や範囲限定の「副句」

the girl (who is) (the) tallest in our class
 比較あとひき後置名修 「範囲限定」の「副句」

⑧「比較形補役（「比較形あとひき形容詞補語」）」 → 比較対象や範囲限定の「副句」

The girl is taller than her mother.
 比較あとひき形補 「比較」の対象を示す「副句」
 「than」は「成句詞」

「形容詞」の運用のまとめ

形容詞の分類	前置名詞修飾	後置名詞修飾	補 役
停止的形容詞	①修飾の原則	②簡略形容節	③単純補語
後続的形容詞	—	④あとひき後置名修	⑤あとひき補語
比較形形容詞	⑥比較前置名修	⑦比較あとひき後置名修	⑧比較あとひき補語

II 後続的形容詞（あとひき形容詞）の詳細

「後続的形容詞（あとひき形容詞）」とは、「名詞」の「状態」を「形容詞」だけで説明しきれるものではなく、「形容詞」の「具体的状況内容」を「固有必須の副詞系」でさらに説明しなければならない複雑高度な「形容詞」です

「後続的形容詞（あとひき形容詞）」＋「・・・」	「固有必須」の「副詞系」
	「成句詞＋後属役」（「副句」）
	「to不定詞」副詞的用法
	that 「副節」 例外的に、wh節・if節、than節等

主な「あとひき形容詞」は限られていますから、確実に認識理解記憶してください
 また、ひとつの「あとひき形容詞」でも、後続する「副詞系」の3種のいずれかによって、意味が多少異なることが多いので、そこにも注意して記憶してください

主な「あとひき形容詞の運用」のまとめ

「あとひき形容詞」 (名詞修飾の場合の意味)	あとひき形容詞の具体的状況を説明する固有必須の副詞系		
	副句 (成句詞～)	t o 不定詞	t h a t 副節
a f r a i d (——)	恐れている (of)		——
	心配している 気づかっている (for) (of) (about)	～するのに怖がっている (こわくて～できない) ——	～であることに心配である
a n x i o u s (——)	心配している 不安である (about) (of)	——	——
	切望している (for)	切望している (for 人 to do)	切望している
c e r t a i n ①ある ②ある程度 ③一定の	確信している (about) (of)	——	確信している (wh節)(i f 節)
	——	確実である (間違いなく～する)	確実である It is certain that～
e a g e r 熱心な	熱望して (for) (about)	熱望して (しきりに～したがって)	熱望して
p r o u d 誇れる、高慢な	誇りを持った (of)	誇りを持った	誇りを持った
s u r e 信頼できる、確かな	確信している (of) (about)	——	確信している (wh節)(i f 節)
	——	確実である (きっと～する) (作文者が思っている)	——
l i k e l y ①適切な ②もっともらしい	——	ありうる (～しそうだ)	ありうる It is likely that～

辞書をひいて、それぞれ例文を引き写して、まとめのノートを作成してみてください

「比較形あとひき形容詞の運用」

もうひとつ重要な「あとひき形容詞」があります

それは、「比較」です（上記「Ⅰ⑥⑦⑧参照」）

「比較」というものは、「形容詞」と「副詞」にしか起こりません

（「比較」というものは、中学英語では簡単なものと鼻にも掛けない意識もされないものでありながら、高校英語で進展するうちに複雑になり手に負えないものになるものですが、「品詞分解」で「分析」的に考えていけば簡単に理解できます）

「ハナコはかわいい」で止まりますが、「ハナコはよりかわいい」と言った場合、止まっていいいのでしょうか

「～より」すなわち「**比較の対象の提示義務**」がありますね（止まりませんね）

「ハナコは一番かわいい」も同様に、「どこで、どの範囲で、かわいいのか」という

「**範囲を指定する義務**」が生じますね（例えば「私たちのクラスの中で」）

「**比較級**」「**最上級**」というのは、「あとひき形容詞」の拡張的な一種と思ってください

すなわち、「as～」「than～」は、「比較」の具体的「対象」「内容」「範囲」等であって、「**比較形形容詞**」の状況内容を説明提示する「副句」「副節」なんですね

「比較」は「副詞」にも生じますから、「**比較あとひき副詞**」というものもあるわけですね（「比較」の詳細は、別巻《「第26講」以降》で扱う予定です）

以上、「形容詞」の複雑さがわかったでしょうか

でも、本講のように、整理して認識していけば、なんのことはありません

「品詞」の視点からの「英文に対する考え方」はおおよそ終わりましたが、理解していただけたでしょうか

次講からは、また「動詞」の視点からみた「構成要素」「構造把握」の方に戻っていきます

ただ、「動詞」に関する詳細情報であって、基本情報ではないことに注意してください

あくまで、瑣末な後付けの知識事項なのです

では、「授与動詞」「**拡張動詞**」に、特別な「**拡張動詞**」の「**使役動詞**」と「**知覚動詞**」に、さらに「**自動詞**」の拡張形態である「**補完動詞**」と順次みていきましょう

第18講 「人に何かを(して)あげる系他動詞」の「授与動詞」

「動詞」について本来的な構造の学習するのは、第03講以来です

それほど、「動詞」の5種類(5文型)に深入り(第4番目と5番目)する学習の前に理解しなければならない重要事項が多いのです(ある意味、深入りといえる「授与文型」「拡術文型」の学習は「構造把握」等の全体的視点からすれば瑣末ともいえるのではないのでしょうか)(4・5番目に深入りする暇がるのなら、もっと他にやるべきことがあるのです)

「5文型」が本当に理解できるための前提条件が多いのです

では、そういう前提を前講までにある程度確立してきましたので、再び、「動詞」による『文。』の支配の詳細の続きについて見ていきましょう

「認識・意思・思想」を『文。』であらわす場合、①「主役」を提示し、②「動詞」を選択し、③その「動詞」による支配が必須とされる「名詞系」や「形容詞系」(や「副詞系」)を配置することで、その『文。』は完成します

動詞の支配実体の分類

「自動詞」には、「自立動詞」と「補完動詞」の2種類があり、「他動詞」には、「関渉動詞」と「授与動詞」と「拡術動詞」の3種類があります

それぞれ、「名詞」と「形容詞」に対する「支配のパターン」から、合計5種類に分類されているのです(いわゆる「5文型」です)

基本分類	詳細分類	基本構造	一般呼称
自動詞	自立動詞	自立	(第Ⅰ文型)
	補完動詞	補完 + 補	(第Ⅱ文型)
他動詞	関渉動詞	関渉 + 目	(第Ⅲ文型)
	授与動詞	授与 + 人目 + 物目	(第Ⅳ文型)
	拡術動詞	拡術 + 目 + 補	(第Ⅴ文型)

一般には、「自立動詞」を「完全自動詞」、「補完動詞」を「不完全自動詞」、「関渉動詞」を「完全他動詞」、「拡術動詞」を「不完全他動詞」と呼びますが、あまりに形式的な呼称で実体がわかりませんので、本書ではその作用や構造から命名しました

「完全」「不完全」「第～文型」・・・何の意味・効用があるのでしょうか

「授与動詞」とは

本講では、「名詞」を2つ支配する「授与動詞」について見ていきます

「授与動詞」とは、「～（して）あげる」をあらわす「あげる系動詞」群です
「与えてあげる」「教えてあげる」「見せてあげる」「話してあげる」「買ってあげる」「つくってあげる」などです
「授与動詞」は、「(名詞) 人目的」と「(名詞) 物目的」という2つの「名詞目的役」を支配して、「人に物を（～して）あげる」という「現事象」をあらわします

S h e g a v e h i m a b o o k .
授与動詞 人目的 物目的

「授与動詞」に関する注意点としては、「物目的」に「t h a t 名詞節」「w h 名詞節」「i f 名詞節」「w h e t h e r 名詞節」がなることです

H e t o l d m e t h a t s h e w a s s i c k .
人目的 名節物目的

H e a s k e d m e i f s h e w a s s i c k .
人目的 名節物目的

本書では、「授与動詞」の文型を「授与文型」と呼びますが（形式的に番号で呼んでも意味がないからです）、一般には「第Ⅳ文型」といわれています

「授与動詞」の特徴は、≪「人目的」≠「物目的」≫です（「主述関係」はありません）

では、「leave」は、「関渉文型」「授与文型」「拡張文型」の3通りありますので、それぞれの文型の感覚を養うための参考にあげておきます

「leaveの関渉文型」の例文

He left Tokyo . (東京を去った)

He left his family . (家族を置き去りにした)

He left his umbrella . (かさを置き忘れた)

He left his breakfast . (朝食を残しておいた)

He left from Tokyo for Sapporo .
これは、ふたつの「副句」をともなった「自立文型」です

「leaveの授与文型」の例文

He left his son much money . (息子に多くの金を残した)

→ He left much money to his son .

He left me the problem . (私にその問題を任せた)

「leaveの拡張文型」の例文は次講（第19講）で示します

で、「授与文型」は、《「授与動詞」＋「物目的」＋「成句詞」＋「人目的」》と言
い換えられますが、「成句詞」は「t o」と「f o r」の2種類に分けられています

She bought a book for him .

関渉動詞 目的語 副句

「bring」のように両方可能なものや、「ask」のように両方不可なものもあります

次講では、5番目の「文型」である「**拡張文型**」について見ていきます

第19講 ようやく登場、「拡張動詞」と申します

本講の課題である、「他動詞」の分類の最後は、「拡張動詞」です

「拡張動詞」とは、「目的役」と、『その「目的役」の具体的内容・状態を説明する「補役』』の2つの「文役」を支配する「他動詞」です

また、「拡張動詞」を使った『文。』を本書では「拡張文型」といいます

「目的役」と「補役」のあいだには、≪「主語」「述語」の関係（「主述関係」）≫があります（ここに「拡張る叙述」という「拡張動詞」の命名の由来があります）

拡張動詞 + 目的役 (①) + 補役 (②)

例えば、動詞によって、「①を(が) ②だと思う」、「①を(が) ②だとわかる」、「①を(が) ②だと考える」、「①を②のままにする」等の意味があげられます

①、 I think him a clever man.
目的役 補役 名補句

「私は彼はかっこいい男だと思う。」

②、 I found him clever.
目的役 補役 形容補語

「私は彼がかっこいいとわかった。」

「目的役」と「補役」には主述関係があり、≪「目的役」＝「補役」≫の関係にあると説明されます

ですから、次のように、明確な「主述関係」をもつ「that名節」に書き換えられる場合もあります

I think that he is a clever man.
「that名節」中の「名補句」

I found that he was clever.
「that名節」中の「形容補語」

すべてが、「t h a t 名節」に書き換えられるわけではありませんが、書き換えられる場合があることから、「主述関係」にあるのが、よく理解できると思います

この「t h a t 名節」の中身は、明確な「主述関係」がある「補完文型」ですが、「補完文型」の「補役」は、「主部」を説明するので「主格補役」といわれます

「拡張文型」の場合は、「目的役」を説明するのですから「目的格補役」とよばれます

実態的には、「拡張文型」は「拡張動詞」のあとに、「補完文型」を抱え込んでいるということになります

また、「補完文型」でみたのと同様に、㉔の『文。』の「m a n」は「名補語」で、「a c l e v e r m a n」が「名補句」であり、㉕の『文。』の「c l e v e r」は「形容補語」となります（「形容補役」の認識は重要なので、以下に「形容詞系」の表を再掲します）

「補役」になる形容詞系のまとめ

形容詞系 「補役」になる	①形容語
	②不定詞の形容詞的用法
	③能動分詞（現在分詞）の形容詞的用法
	④受動分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑤完了分詞（過去分詞）の形容詞的用法
	⑥形容句
	⑦形容詞化された副語

前講に引き続き、「l e a v e」の例文で、「文型」の完全理解をしてください

「l e a v e」の「目的格補役」は「形容詞系」のおおよそが「補役」になれるので、理解が深まるかと思います（例文の番号は、上の表の番号と一致します）

「l e a v eの拡張文型」の例文 （二重下線部が「目的格形容補役」です）

① H e l e f t t h e d o o r o p e n.
（ドアを開けたままにした）

② H e l e f t t h e m t o f i n i s h t h e w o r k.
（彼らにその仕事を終わらせるのを任せた）

③ He left them waiting.

(彼らを待たせておいた)

He left the machine running.

(その機械を動かしたままにしておいた)

④⑤ He left his work undone.

(仕事をなさないままにしておいた)

⑥ He left her in charge (of the store).

(彼女にその店の管理を任せた)

He left her out of his team.

(彼女を彼のチームから排除しておいた)

He left her for dead.

(彼女を死んだ状態のものと放置しておいた→死んだものとあきらめた)

⑦ He left the light on.

(電灯をつけたままにしておいた)

以上で、基本的な「文型」を全て見てきました

『文。』の「構造把握」という「考え方」がわかってきたでしょうか

「英語が苦手な方」は、絶対に「英文」を「感覚・フィーリング」や「単語の意味の追っかけ」で読んではいけません

ひたすら、「文法理論」を駆使して、すなわち「品詞分解」「構造把握」をして、緻密に論理的に分析的に読むしか英文に対する苦手意識の打開策・克服法はないのです

「英文法」は難しいと思っている方が多いでしょうが、実は、「英文法」は「誰でも英文が読めるようになるための」「簡便な」「理論的な」「手段」「道具」であることがもう得心できたでしょう(もちろん、従来の無体系・無理論・無秩序・羅列は理解に苦しむ難しいものでした)

次講では、特別な種類の「拡張動詞」について見ていきます

その前に、補足しておきます

以下の「補足 その2～4」は、はじめのうちは流すか飛ばすかしてください

「受動態の後ろに残るもの」 その2

第16講の最後で学習した「受動態（受動分詞）の後ろに残るもの」という「問題点」に関して、「授与文型」と「拡張文型」の具体的な例文をあげておきます
はじめのうちは、これを意識することが大切です（特に「残るもの」が「名節」の場合などには注意が必要です→後述「その2」を参照してください）

(第16講の「受動態の後ろに残るもの」から引き継いでいます)(二重下線部分が残存物です)

②「授与文型」(第20講参照)の「元・人目的」もしくは「元・物目的」

S h e g a v e h i m h e r b o o k .

「人目的」

「物目的」

「人目的」を「主部」とする場合

He was given her book by her.

「物目的」を「主部」とする場合

Her book was given him by her.

③「**拡術文型**」(第21講参照)の「元・名補役」や「元・形補役」

①、They found him a clever man.

目的役

名補役

注

He was found a clever man by them.

⑤、They found him clever.

目的役

形補役

He was found clever by them.

④《いくら「名詞」であっても、「補役」を「主部」にして「受動態」に書き換えることはできないことに注意してください》

さらに、補足させていただきます（はじめのうちは、流すか飛ばすかしてください）

「受動態の後ろに残るもの」 その3

「群動詞」といわれているものの「受動態」の処理にも注意が必要です
「群動詞」は≪複数語の集合体がひとつの他動詞として働くもの≫で、

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」

(「他動詞」＋「副語」＋「目的役」 → 「副語」は位置の変更が可能)

②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役となる)」

③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役となる)」

④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役となる)」

の4種があります

「群他動詞」の『文。』を「受動態」にすると、「主部」になった「目的役」・「本来、後属役で目的役になったもの」以外の取り残された部分(二重下線部)が「浮いて見えたり」「違和感があったり」「意味不明に思えたり」するので
これらが、「受動態」(「受動分詞」)の後ろにある「厄介な残存物」です

群他動詞4種の「受動態」

①「他動詞」＋「目的役」＋「副語」(「他動詞」＋「副語」＋「目的役」)の場合

She turned the radio off.

目

副語

The radio was turned off by her.

②「他動詞」＋「固有の目的役」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役)」の場合

She takes great care of her mother.

固有の目的句

成句詞

後属役(→目的役)

ふたつの「目的役」があり、ふたつの「受動態」があることに注意してください

Her mother is taken great care of by her.

Great care is taken of her mother by her.

③「自動詞」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役)」の場合 (「群他動詞」＋「目的役」)

They laughed at the boy.
自 成句詞 後属役(→目的役)

The boy was laughed at by them.

「laughed at」で、「他動詞」の働きをしていると見るのです
「群他動詞」という考え方の典型ともいえます

④「自動詞」＋「副語」＋「成句詞」＋「後属役(→目的役)」の場合

They speak ill of the girl.
自 副語 成句詞 後属役(→目的役)

The girl is spoken ill of by them.

以上、確実に、「能動態⇄受動態」の「往復」ができるようになってください

「受動態の後ろに残るもの」 その4

「授与文型」の「物目的」が「名節」の場合

He told me that she was sick.
人目的 名節物目的

「人目的」を「主部」とする場合

I was told that she was sick by him.

「名節物目的」を「主部」とする場合は、次の項目を参照してください

「 I t i s s a i d t h a t ~ 」の「実体」

ここで、「 I t i s s a i d t h a t ~ 」が「熟語」だと思っていることが負けのはじまりという点について、見ておきましょう

T h e y s a y s t h a t s h e i s a g e n i u s .

「 t h a t 名目的節」を「主役」にします

T h a t s h e i s a g e n i u s i s s a i d b y t h e m .

「 t h a t 名主（役）節」を「仮主語 I t」に置き換え、「 b y t h e m」を省略します

I t i s s a i d t h a t s h e i s a g e n i u s .

というだけのことです

「熟語」でも何でもありませんね

本来的な「熟語」の範囲・定義は、「慣用的に言い慣わされている表現で、文法的説明がほぼ不可能なもの」という具合で、はじめのうちは学習すべきでしょう

なんでもかんでも「熟語」として「まる暗記」することはやめましょう
「品詞分解」「構造分析」「構造把握」で読む技術を身につけてください

特に、「受動態」の場合、元の『文。』を復元しながら、「受動分詞」の後にある「残存物」の「存在根拠」を考えてください（単純・純粋な「副詞」との峻別に要注意）
単なる「副詞」なのか、「元人目的」「元物目的」「元補役」「群他動詞の構成語」「あとひき他動詞の後の固有必須の副句」などに注意しながら「構造把握」をして、「受動態」の『文。』を読むようにしてください

『「受動態」の『文。』を見たら、元の『文。』を復元し、回帰せよ！』

「拡張動詞」も「受動態」も、ご納得いただけたと思います
それでは、次講では、特殊な「拡張動詞」である、「使役動詞」と「知覚動詞」と言われているものを整理してみましょう

第20講 特殊な「拡張動詞」・・・「使知動詞」

本講では、「拡張動詞」のうち、特別なものを見ます

I「使役動詞」と呼ばれるものと、II「知覚動詞」といわれているものです
両者あわせて、ここでは仮に「使知動詞」と命名しておきます

I 「使役動詞」

「使役動詞」とは、《「人に～させる」という意味が基本の特別な「拡張動詞」》です

主な「使役動詞」には、「have」「make」「let」という「三代表」に加えて「get」があげられます

「have→もつ」「make→つくる」「get→得る」という次元からの脱却です

「使役動詞」は、「拡張動詞」の一種ですから、
「目的役」と「補役」を従え、そのあいだには、「主述関係」があります

使役動詞 + **目的役 (①)** + **補役 (②)**

主要な意味は、「① (主に「人」) に②をさせる」です

ひとことで「～させる」といっても、

「have」は「汎用的」、「make」は「強制的」、「let」は「許可・容認的」で、「get」は「一般的・説得的」といわれますが、このような細かな分類に固執するのは相当高いレベルに到達するまでは避けるのが得策で、ここでは、抽象的な分類よりも、構造に意識的になじむこと（例文の精査・検討）が重要と考えます

《「①」に「②」させる》ということは、

「①」は「人的要素」の場合が多く、

「②」は「名詞系補役」も「形容詞系補役」も可能です

この場合の「名詞系補役」になるのは「名語句」しかありませんが、「形容詞系補役」は様々ありますので、以下にまとめを再々掲しておきます

「補役」になる形容詞系のまとめ

形容詞系

「補役」になる

- ①形容語
- ②不定詞の形容詞的用法
- ③能動分詞（現在分詞）の形容詞的用法
- ④受動分詞（過去分詞）の形容詞的用法
- ⑤完了分詞（過去分詞）の形容詞的用法
- ⑥形容句
- ⑦形容詞化された副語

わざわざ「使役動詞」が強調される従来からの空虚な動機や理由としては、「形容詞系補役」のひとつである「不定詞の形容詞的用法」の場合、「t o」がない、原形のままの「原形不定詞」とよばれるものが使用されることにあるようですが（実は瑣末な現象一端に過ぎない）、それ以上に、「形容詞系」全体が「補役」になれることを認識して、「拡張動詞」全般の「目的役と補役の主述関係」をおさえることが重要です

「h a v e」「m a k e」「l e t」に「g e t」の各「使役動詞」において、「形容詞系」①～⑦の全てが使用可能というわけではありません

さらに、「⑧名補役」を含めて、可能な「補役」を表にまとめますと、次のようになります（初めのうちは、無理に全部覚えようとするのではなく、×印に留意する程度にしてください）

「補役」候補		h a v e	m a k e	l e t	g e t
形容詞系補役	①形容語	○	○	○	○
	②不定詞	原形不定詞	原形不定詞	原形不定詞	t o 不定詞
	③能動分詞	○	×	×	○
	④受動分詞	○	○	×	○
	⑤完了分詞	—	—	—	○
	⑥形容句	○	—	○	○
	⑦形容詞化副語	○	—	○	○
⑧名補役		○	○	×	×

「—」は、意味的に必要ないか、「辞書」中に使用例が見当たらないことを示しています

以下、例文をあげます

「_____」（一重線）は「目的役」で、「_____」（二重線）は「補役」です

「辞書」で丹念に調べ上げてください（表の数字と例文の数字は一致しています）

「h a v e」の例文

強制的な意味はなく、「そのような状態に持っていく段取り」に視点があり、「～させておく」「～してもらう」「～される」等の「意識」がなされますが、意識や抽象的な分類よりも、「補役の形態」や、「目的役」と「補役」の「主述関係（能動か受動か等）」を確認しながら、例文の実質的意味を考えてください（以下の「使役動詞」も同様）

- ① You must have your car clean.
（車をきれいにさせなければならない）

- ② You should have your son cut his hair.
（息子に息子自身の髪を切らせるべきだ）

You should have a barber cut your hair.
（床屋にあなた自身の髪を切らせるべきだ→切ってもらうべきだ）

- ③ Taro couldn't have them sleeping.
（彼らを寝かせておくことができなかった）

- ④ You have to have your hair cut.
（あなたの髪を切ってもらわなければならない）

- ⑥ She had her foot in the mud.
（足を泥の中に入れさせてしまった）

- ⑦ They had the guest out.
（その客を外に出した）

- ⑧ I will have you a doctor.
（あなたを医師にさせるつもりだ）

「m a k e」の例文

「強制的」な意味をもち、「無理に～させる」ような訳になります

① They made her sleepy.

(彼女を眠くさせた)

② She made him be quiet.

(彼を静かにさせた)

She made him go home.

(彼を家に帰した)

「原形不定詞」の『文。』を「受動態」にすると、「不定詞」が「原形」でいる理由がなくなり、「to不定詞」(の「副詞的用法」)に戻ります
(「made」という「受動分詞形容補語」の具体的状況説明の「副詞的用法」)
→ He was made to go home by her.

④ He made himself understood in Japanese.

(自分自身を日本語で(他人に)理解させた)

⑧ They made him captain.

(彼をキャプテンにした)

「let」の例文

「自由に～させておく」という「自由意志の尊重」の意味合いがあります

① I want to let the bird loose.

(その鳥を自由にさせることを望んでいる) (発音注意!)

② They let Taro go abroad.

(タローを海外に行かせた)

⑥ She let us out of her house.

(私たちを彼女の家から外に出してくれた)

⑦ He let me through.

(私を通してくれた)

「g e t」の例文

広範一般的な使役をあらわしますので、「一を～にする」「一を～させる」「一を～してもらう」「一を～するように説得する」等、状況に応じた訳となります

① We got the room clean.
(部屋をきれいにした)

② She got her children to wash their shoes.
(子供たちに自分たちの靴を洗わせた) 注意!「補役」は「to不定詞」

③ He got his machine running.
(機械を始動させた)

④ I got my homework finished.
(宿題を終わらせた)

⑤ They got Hanako gone.
(ハナコを追いやった)

⑥ She got her children to bed.
(子供たちをベッドに行かせた)

⑦ He got her book back.
(彼女の本を戻した)

「不定詞の形容詞的用法補役」は、「原形不定詞」ではなく、「to不定詞」です

II

「知覚動詞」

「知覚動詞」は、人間の五感に関する「動詞」です

「知覚動詞」も「拡張動詞」の一種ですが、「使役動詞」と同様に、「形容詞系補役」のひとつに過ぎない「不定詞の形容詞的用法」の場合に「to」がない「原形不定詞」が使われるという特徴が過度に強調されております(これも、「構造把握」の観点からは瑣末な問題です)

「使役動詞」と同様、「目的役と補役の主述関係」を確認することが重要です

主な「知覚動詞」には、「see」「hear」「watch」「feel」「notice」等があります

以下に、代表として「see」の例文をあげます

「_____」（一重線）は「目的役」で、「_____」（二重線）は「補役」です

「目的役」の動作を「補役」であらわし（そこには「主述関係」がある）、その関係を「知覚動詞」が支配しているという「構造」を認識してください

「原形」が「最初から最後まで動作」を示し、「能動分詞」が「部分的動作」を示すといわれています

「see」の例文

② We saw him close the door.
（彼がドアを閉める様子を終始見ていた）

③ We saw him closing the door.
（彼がドアをしめているところを一部ちらっと見た）

④ We saw the door closed by him.
（ドアが彼によって閉められるのを見た）

② → He was seen to close the door by us.
「知覚動詞」の『文。』を「受動態」に書き換えると、「不定詞」が「原形」であることの理由がなくなり、「to不定詞」（の「副詞的用法」）に戻ります
（「seen」という「受動分詞形容補語」の具体的状況説明の「副詞的用法」）

③ → He was seen closing the door by us.
「能動分詞形容詞」が「補役」の場合を「受動態」に変えても、形のうえでは変化はありませんが、「seen」の具体的状況内容を説明する「副詞的用法」になったと考えられます

「他動詞」の「詳細な分類」が終わったところで、次講では、「自動詞」のうちの、特別な「補完動詞」をみてみましょう（・・・「推量」という広範な概念の最初の認識ですね）

第21講 「避断定的補完動詞」でも「勝手な推量」や「外形的判断」ができます

一般に、「動詞」をそのまま使えば、「断定」や「習慣」「真理」をあらわします（このことは、「推量表現」の認識・理解のためには必要な前提理解です）

そして、『文。』は人間がつくるもので、どんなに客観的に描写したつもりでいてもその内容には主観的なものは避けることができないどころか、主観そのものであるのが現実です（人間は主観的存在であるがゆえに、「偏見」や「勝手な推量」で作文します）

そこで、「作文者」が「主観性」を素直に認めて、「断定」を避けて（責任回避）、「断言できない」「推量」「想像」「遠慮がち」等の思惑を持ち込む場合の手段が「助動詞」や、本講のテーマである「避断定的補完動詞（断定回避的補完動詞）」なのです

本講と次講で考えたいのは、

- ①「助動詞」の実質的な働きは、「避断定（断定回避）」「責任回避」「推量」で、
- ②「助動詞」ではなく「動詞」そのもののなのに、「助動詞」のような「避断定」の意味を内包している「避断定的補完動詞」という「自動詞」があるということです

「避断定」というのは、「断定できないもしくはしない場合」の総称で、「推量」「想像」「非確信」「不確実」「未定」「未確認」「未来」「予定」等、様々な要素・意味内容を含んでいます（詳細は第24講参照）

本来、「助動詞」を学習してから、「避断定的補完動詞」について学習するべきかもしれませんが、「動詞」全体についての学習が一通り終わったあとに、「助動詞」と「仮定法（とかいっているやつ）」を一体的に学習すべきものと考えますので、先に、本講で「避断定的補完動詞」を学習し、次講で「助動詞」を学習することにします

ちなみに、「避断定的補完動詞」の要素を持つ「have to」「want to」「like to」「come to」「get to」「seem to」「appear to」「happen to」等は、実質的には、「助動詞」的な役割を担っていると考えられます

では、本論に入ります

おおよそ、実際に見ているか否かを問わず「避断定」的に表現したい場合は「助動詞」を使い、実際に見た上での外見的判断を表現する場合には「避断定的補完動詞」を使います（古文の「視界外推量（らむ）」「眼前推量（めり）」が参考になりますので、「古語辞書」参照）

「避断定的補完動詞」の理解

主語	避断定的補完動詞	補語
He	l o o k s (～に見える)	a d o c t o r . 「名補役」 (事実的)
	s e e m s (～のように思われる)	
	a p p e a r s (～のように見える)	h a p p y . 「形容補役」 (評価的)
	(i s) (断定)	

「f e e l」「s o u n d」も辞書で確認してみてください

「彼は医師のように見える（思われる）。」「彼は幸せのように見える（思われる）。」
というような訳になります（「外見的判断」というのがわかりますか）

次講で詳しく学習しますが、次の「助動詞」を使った例文と比べてみてください

「避断定的補完動詞」の「外見的判断」とは違いますね
（「助動詞」では、「外見的判断」とは異なる視界外の推定も含みますね）

He m a y b e a d o c t o r . （彼は医師かもしれない。）

He m u s t b e h a p p y . （彼は幸せに違いない。）

「避断定的補完動詞」は「特殊な補完動詞」であるということを確実に理解・認識
してください（「形補」「名補」を確実に認識しておさえてください）

次講では、ようやく、「形容節」の検証に入ります

参考として、『「事実」や「評価」の提示』と『「名詞」と「形容詞」の使われ方』の関係について考察しておきます

事実提示（→名主目補）と評価提示（→形修補）

- 人が他の人や社会に表明したい内容として、
まずは、
①事実伝達（客観的事項）と、②事実を前提とした評価的判断（主観的事項）があり
（「事実伝達」は主に「名詞系」の「主語」や「目的役」「補役」で表現されます）

②評価的判断には、（「評価的判断」は主に「形容詞系」の「名詞修飾」「補役」で表現されます）
①社会一般で認められている通常人の評価的判断（主観の多数共通集合体・社会評価・
共通認識・社会常識）と②個人的な評価的判断（一般人の共感を得ていない）があり

②個人的な評価的判断には、
①将来的には社会常識（将来には一般人の共通認識）になると考えられる評価（先見常識）
と、②未来永劫社会常識とはなりえないと考えられる評価とがあります（永劫独善）

以上のような分類が可能かと考えます

総体的には、「事実伝達」では、「名詞」の「主役」「目的役」「補役」が中心となり、
「評価的判断」では、「形容詞補役」「形容詞による名語修飾」が中心となるのです
特に、「名詞系補役」による「主役の言い換え」が難解な場合があるので要注意です
このような分類を意識して「現代文」「古文」「漢文」「英語長文」等に対処すると、
認識力や理解力や読解力に格段の差が生じてくると思います

主に、「事実提示」は「名詞補役」であり、「評価提示」は「形容詞補役」であるのが原則であり
ますが、事実提示が「形容詞」でおこなわれたり「評価提示」が「名詞」でおこなわれたりしたと
しても、それぞれ原則的な性質を失ってはおりません（修辞による「品詞の代用」と考えられます）

① 事実伝達 （客観的事項）		
② 評価判断 （主観的事項）	① 社会常識的価値判断	
	② 個人的評価的判断	① 先見常識 ② 永劫独善

第22講 『文。』の「形容詞化」から「名詞化」の作業のための手段「形容節詞」・・・「関係代名詞」なんて嘘くさ

文法用語は、一見してその役割がわかるものではなくてはならないはずですが「～文型」「完全自動詞」「不完全自動詞」「前置詞」「従属接続詞」「現在分詞」「過去分詞」等々、その用語からはどう整理し何を説明しようとしているのでしょうかまた、「関係代名詞」「関係副詞」と呼称して、何をしようとするものなのかわかるのでしょうか

本書では、旧来の空疎不明な「文法用語」に抗い、一見してその役割がわかる「文法用語」の確立に努め、新しい実体的な「文法用語」の流布浸透を図っていきます本講と次講で問題とするのは、旧来「関係代名詞」「関係副詞」といわれているもので、「形容節」をつくりその目印となるものです

本書では、その役割に応じた命名から、「形容節詞」とします（略して「形節詞」）

以下2ページ少々、★印の本論に入るまでは1回目は読み流してください

まずは、『文。』で「単語」を修飾することを考察する本講の視点からはじめます話題にしたい「名語句」を形容語1単語ではなく、複雑高度に説明したい場合は、「句」や『文。』を使ってその「名語句」を修飾することになります（第07講「同格」参照）例えば、『私が長年会いたいと思っていた』『尊敬するその人物』のようにです（日本語では修飾語句は全て前に置きます）（ちなみに、「私は長年その尊敬する人物に会いたいと思っていた」が元の『文。』です）（「その尊敬する人物」は「目的名句」ですね）ここで重要なのが、まずは『文。』を使って「名語句」を修飾することの再認識です次に、修飾される「名語句」はどこから来たのかという視点です

すなわち、基本となる元の『文。』というものがあって、その元『文。』の一部の「名語句」を抜き出して「中心名語句」として据え、残りの部分でその「名語句」を修飾していることを認識し、その元の『文。』を想定できるかということです

例文では、「私は尊敬するその人物に長年会いたいと思っていた」のような元の『文。』があり、修飾される「名語句」の「その人物」は、元の『文。』では「会う」の「目的役の名語句」であると遡れるかということです（実態は、ある『文。』中の「名語句」に注目し、それを「中心名語句」に据えて説明して、『文。』を「名詞化」することなのです）その本質的重点は、

- ①残った元『文。』が「形容詞」として働いているのだから、「形容節」だということであり、「形容節詞（「関係代名詞」・「関係副詞」）」は「形容節」を従えている目印である
- ②元の『文。』が想定でき、修飾されている「名語句」は還元されて、元の『文。』の「構成要素」や「役外族」として帰っていきるところがある（「同格」との相違点）
- ③さらなる留意点は、修飾している「形容節」には、欠落部分があり不完全な『節』である場合と欠落のない完全な『節』の場合の二種があるということです（詳細後述）

(旧来の2つの『文。』を結ぶという説明(結果現象の提示に過ぎない)は不合理だと思いませんか)

本講では、ある「名語句」を『文。』で修飾したい場合をみていきます
『文。』で「名語句」を修飾するのですから、「形容節」の学習ということを認識してください

そして、これは、従来、①「関係代名詞」②「関係副詞」といわれていたものの学習です

しかし、本書では、①「関係代名詞」②「関係副詞」という名称では何をしたいのかがわからないので、「名語句」を『文。』で修飾するというその実体に着目し、「形容節詞」という上位概念のもと、それぞれ、①「構成要素名語句」を「先行詞」にして修飾するという観点からと、②「副句」や「形容句」の「後属役名語句」を「先行詞」にして修飾するという観点から分類し、①を「構成(来)形容節詞」、②を「役外(来)形容節詞」と命名してみていきます

I 「形容節詞」の存在意義・存在価値

「形容節詞」の理解にあたっては、ある『文。』の中から「話題の中心に据えたい名語句(説明したい名語句)(中心名詞)」を引っ張り出してきて、その『文。』の残りの単語で「話題の名語句」を説明しようとしているという視点が重要です

①英語の場合、「説明したい名語句」を『文。』中から、「先」頭に「行」かせるということで、「先行詞」といいますが、とても「論理的で簡明な」命名ですね

②そして、「形節詞」を置いて、③『文。』の残りの全ての単語で、「先行詞」を説明するわけですから、その残りの部分は、「意味のあるまとまり」として、大きな「形容詞」(「形容節」となるわけです(そして、「形容節」は「中心名詞」に吸収され、全体としては「名句化」されてしまうことに注意!・・・「大きな大きな名句」です)

ただ、先行していった「名句」の部分が「欠落」して「穴」になっている「不完全な『節』」ではありますが、一応「節」ということで、「形容節」とよびます

«「先行詞」＋「形容節詞」＋「不完全な『節』」»という原則を理解してください
«「形容節詞」＋「不完全な『節』」»の部分が、「形容節」です

「形容節詞」のほとんどが1語なので「形容節語」というべきでしょうね

④「形容節」ということで、「先行詞」の「名語（中心名詞）」を修飾しています
「名詞修飾」の「形容詞」は「中心名詞（ここでは「先行詞）」に「吸収され消滅する運命」（「役外修飾族」）ですから、全体としては、「名句」となります

⑤「名句」となれば、新たにつくられる『文。』の「主目補」として、組み込まれていくことが可能になります（新たな大きな『文。』の「主目補」となります）

『文。』であったものが、①「先行詞名語句」を出し、②「形容節詞」を置き、③「形容節」をつくり「先行詞」を修飾し、④その結果、吸収され・消滅し、「名句」となり、⑤次の大きな『文。』の中に組み込まれていく過程が理解できたでしょうか

ここまでは、論証的前置きですので、1回目は流し読みで、本講を読了したあと何度か読み直していただくと理解や認識が深まると思います

★ここから本論とさせていただきます

実質的に、「形容節詞」は何のためにあるのかというと、まずは、「形容節」をつくり「形容節」の形式的な「目印」となり、説明したい「名語句」（「先行詞」）と「形容節」をつなぐ役割をすることですが、「形容節詞」は省略されうるものなので、必須的存在ともいえません（日本語には、「形容節詞」のようなものではありませんが、これは、日本語の「形容節」が「前置」されることにも起因すると考えられます）

では、例文で、元の『文。』からの「成立過程」をみてみましょう

まずは、日本語の例文ですが、日本語の場合、「説明したい名語句」（「先行詞」）は後ろに置いて、「形容節」は前に置きます

すなわち、元の『文。』から、①「先行詞」を出し、③残りの『文。』である「欠落」のある「形容節」を前置し、④「形容節」が「先行詞」に「吸収・消滅」されることにより全体として「名句化」し、⑤次の新たなる『文。』の「主目補」になっていく過程を理解してください（日本語には、②の「形容節詞」はありません）

きのう、私は、そのおもしろい本を読んだ。（元の『文。』）

①「説明したい名句」

きのう、私が 欠落 読んだ、そのおもしろい本

③「形容節」（吸収消滅化） ①英語でいう「先行詞」

④ 全体で「名句」

きのう私が（欠落）読んだそのおもしろい本は、とても役に立つ。

⑤「名主句」 （次の新たな『文。』への「実用転用化」）

次は、英文で見てください（「目的役」を「先行詞」にしています）

I read the interesting book yesterday.

①「説明したい名句」

the interesting book which I read 欠落 yesterday

①「先行詞」

②「形容節詞」

③「形容節」（吸収消滅化）

④ 全体で「名句」

The interesting book which I read 欠落 yesterday is useful.

⑤「中心主語」

「形容節」

ちなみに、次の『文。』を見てください

The interesting book which I read 欠落 is useful.

このように、「yesterday」が元の『文。』に無かったら、「動詞」の「read」と「動詞」の「is」が連続するという、一過的な現象が起きますが、「目的役」が「先行詞」になり、「欠落」が生じている「形容節」をもった「名句」が「主役」になると生じる現象なのです（「動詞」の連続現象で思考停止にならないでください）

このように、論理的分析的に考えれば、意外と楽なものなのです
原因がわかると納得できるのです

以上、『文。』の「目的役」を「先行詞」にしている場合をみながら、「形容節」の本質の理解を深め、「形容節詞」の存在意義を具体的に見てきました

これからは、「先行詞」として、元『文。』の「文役」や「役外族」のうちの、どんな「名語・名句」が引っ張り出されてくるのかの検証をしなければならないのです
頑張るべし

Ⅱ 「先行詞」になる「名語・名句」の検証

『文。』の中で、「先行詞」になりうる「名語句」にはどんなものがあるのでしょうか

1「主役」、2「目的役」、3「補役」、6「副句」の「後属名語句」、7「形容句」の「後属名語句」、8「所有格形容詞」のついた「名語句」、9「群成句詞（群前置詞）」の「後属名語句」などがあげられます

本講では、「構成要素」を「先行詞」とする「主流」「本流」「本家」ともいうべき「形容節」「形容節詞」に関する1・2・3と、4「形容節詞」の省略、5「同格」との違いを、順次みていきます

次講で、「傍流」「分家」「外様」ともいうべき「形容節」「形容節詞」に関する、6・7・8・9についてみていきます

1・2・3のように、元の『文。』の「構成要素」を「先行詞」にすると、「形容節」に「欠落」が生じ、「節」が「不完全な『文。』」になるのです

以下のふたつの表は、次講終了後に見直してください（はじめは見流してください）

	「先行詞」にする「名語・名句」	「形容節詞」に関する「注意事項」
1	「主 役」	「主格の形容節語」＋「不完全な『節』」
2	「目的役」	「目的格の形容節語」＋「不完全な『節』」
3	「補 役」	「主格」の「形容節語」の一種
4	（「形容節詞」の省略）	
5	（「同格」との違い）	
6	「副句」の「後属名語句」	「成句詞」＋「目的格の形容節語」＋「完全な『節』」 「役外（来）形容節語」への置き換え
7	「形容句」の「後属名語句」	「名詞」＋「成句詞」＋「目的格の形容節語」
8	→ 「所有格」への書き換え	「所有格」の「形容節語」
9	「群成句詞」の「後属名語句」	「群成句詞」＋「目的格の形容節語」＋「完全な『節』」

成節詞	名節詞	名節語		
		名節句（群名節詞）はない		
	副節詞	副節語		
		副節句（群副節詞）		
	形容節詞	構成来形容節詞	構成来形容節語（関係代名詞）	1・2・3
		役外来形容節詞	役外来形容節語（関係副詞・所有格の関係代名詞）	6・8
			役外来形容節句（成句詞＋構成来形容節語）	6・7
			役外来形容節句（群成句詞＋構成来形容節語）	9

まずは、「構成要素名語句」由来の「形容節本流」です

1、 「主役」を「先行詞」にする場合 → 「主格の形容節詞」

The man wrote the books .

①「説明したい名句」

the man who 欠落 wrote the books

①「先行詞」 ②「形容節詞」 ③「形容節」(吸収・消滅)

④全体で「名句」

I know the man who 欠落 wrote the books .
他 ⑤「中心目的語」 ③「形容節」(吸収・消滅)

⑤全体で「名目的句」

2、 「目的役」を「先行詞」にする場合 → 「目的格の形容節詞」

通常の「目的役」を「先行詞」にする場合は先述しましたので、ここでは、特殊な場合を見てみましょう

「授与動詞」の『文。』の「目的役」を「先行詞」にする場合です(「第18講」参照)

「授与動詞」は「人に(人目的)」「物を(物目的)」と2つの「目的役」があります

The man gave the girl the flowers .
i 人目的 ii 物目的

i 「人目的」を「先行詞」にする場合

the girl whom the man gave 欠落 the flowers

①「先行詞」 ②「形容節詞」 ③「形容節」(吸収・消滅)

④全体で「名句」

That is the girl whom the man gave 欠落 the flowers .
主 自 ⑤「中心補語」 ⑤全体で「名補句」

ii 「物目的」を「先行詞」にする場合

the flowers which the man gave the girl 欠落

- ①「先行詞」 ②「形容節詞」 ③「形容節」(吸収・消滅)
④全体で「名句」

The flowers which the man gave the girl 欠落 were roses .

- ⑤「中心主語」 ⑤全体で「名主句」 自 名補

第18講で学習しましたが、「他動詞」の一種に「授与動詞」というものがありまして、「人に物を与える」と、「人に(人目的)」「物を(物目的)」と2つの「目的役」を従えるという構造をとります

「形容節」に「授与動詞」がある場合、「目的役」が1つ残っているので、はじめは、なかなか「欠落」に気が付きません

この点は、「5、名節同格」との違いのところで詳しくみてみましょう

「感」と「知っている単語」をたよりに読んでいると、最後の例文では、「girl were roses」なんて読み方になってしまいますよ(「薔薇のような女の子」とでも読み込んだらうのでしょうか)
「英語の苦手な人」は、とにかく「構造把握」と「論理」で読んでいくしかないので

3、 「補役」を「先行詞」にする場合 → 「主格の形容節詞」の一種

He was the brave man ten years ago .

- ①「説明したい名句」

the brave man (that) he was 欠落 ten years ago

- ①「先行詞」 ②「形容節詞」 ③「形容節」(吸収・消滅)
④全体で「名句」 ②「形容節詞」は省略可能です(後述)
「彼が10年前そうであったような勇敢な男子」

He is not the brave man (that) he was 欠落 ten years ago .

- 自 ⑤「中心補語」 「形容節」(吸収・消滅)
⑤全体で「名補句」

(ここで、もし文末に「now」があったら、「ago now」で「今昔」とでも訳して「バグり」ますか)

4、「形容節詞」の「省略」とは

「形容節詞」が「省略」されるのは、どういう場合でしょうか

- ①「目的役を先行詞にした場合」
 - ②「補役（特殊な主格）を先行詞にした場合」
 - ③「there is 構文の場合」
- 等があげられます

ここで、重要なのは、ただの丸暗記を迫られるのではなく、「なぜ、上記のような『形容節詞』が省略されうるのか」「普通の主格、所有格はなぜ省略されないのか」「省略される場合の共通点や基本原理は何か」という原因追究の論理思考です

重要な観点として、日本語には「形容節詞」はありません（常に「完全省略」です）
なぜでしょうか（まずは、必要性が無かったからだと考えられます）

「形容節詞」が無くても、前置された『文。』のようなものが常に「形容節」だと自然とわかるのです（「その本を読んだ人」「逃げた男」「父が芸能人である女の子」のように「形容節」が前置されると「主格や所有格の形容節詞の省略」も可能なのです）

「名語句」の前に「形容節」がある日本語の場合は、英語の「形容節詞」の省略と同じ現象が、「目的格」だけではなく「主格」「所有格」でも常に起きるのです
すなわち、『文。』ではなくて、《「文らしきもの（節）」＋「名語句」》という「構造」で、「文らしきもの」が「名語句」を修飾している「形容節」だとわかるのです

では、英語の『「形容節詞」の省略』とは何なんでしょうか

英語の「形容節詞」の省略の原因は、日本語の場合と同じです

《「先行詞」＋「（主語にあたる）名語句」＋「動詞」》という「構造」に由来するのです（《「先行詞」＋「文らしきもの」》の「構造」が重要なのです）（ここで、「目的役」だけでなく「補役」の「先行詞」の場合も省略が可能なことを察知できますね）

そして、「形容節」が「名語句」の後ろにある英語の場合、「主格の形容節詞」のときは、「主格の形容節詞」がないと、元の『文。』と同じ形になってしまい、判別がつかなくなるので、「形容節詞」の省略は不可能なのです

すなわち、「先行詞」＋「動詞」では、間に「形容節詞」がないと、元の『文。』そのものになってしまうのです

従いまして、「主役」を「先行詞」とする場合は、「形容節詞」の省略は構造的論理的にあり得ないのです

それでは、「主格」の「形容節詞」を省略したらどうなるかを「k n o w」の「目的役」となっている場合を題材に具体的にみてみましょう

I know the girl who saw the accident yesterday.

中心名主句 「形容節」

私は、「きのう、事故を見た女の子（「名句」）」を知っている。

「主格」の「形容節詞」を省略すると、「t h a t」が省略された「名節」の「目的節」になってしまいます

I know the girl (もしも省略) saw the accident yesterday.

I know (that) the girl saw the accident yesterday.

「名目的節」

「名節詞（成節詞）」の「t h a t」の省略と同じとなり、《私は、「その女の子がきのう事故を見たということ（「名節」）」を知っている。》となってしまいます

《「名語句（先行詞）」＋（関係代名詞の省略）＋「（主語にあたる）名語句」＋「動詞」＋（欠落）》という「関係詞の省略可能な構造」を認識・理解してください
「主＋動詞」が残存する「『文。』らしきもの」の認識可能性の有無が重要なのです

そうすると、「t h e r e i s 構文の場合」は、「t h e r e」が「主語」の代用となって（「形式主語」ともいわれる）、「目的役先行詞」「補役先行詞」と同様の「構造」になっているので、「形容節詞」が省略されても、「形容節」であることがわかります（「名語句」＋「『文。』らしきもの」という構造があるのですね）

T h e r e w a s a w o n d e r f u l p a r k i n t h i s c o u n t r y .

a wonderful park (that) there was 欠落 in this country

《補足ですが、「所有格の形容節詞」場合、「所有格」は「形容語」の性質を帯びているので、「文らしきもの」を伴いながらも省略が困難なのだと考えられます》

5、 「名節同格（完全な『文。』）」との違い

「先行名語句」が後続の「形容節」内に帰っていける「欠落」の有無が重要視点です

「目的役」がひとつの「関渉文型」の場合は、「欠落」を見抜きやすいのですが、「2、」で見たように、「目的役」がふたつの「授与文型」の場合は、「目的役」がひとつ残っているのに、「欠落」に気付きにくいので注意が必要です（「第18講」参照）

「名詞」＋「形容節詞」＋「不完全な『文。』」（＝「形容節」による「名句」）

He showed his friend the news .
人目的 物目的

the news that he showed his friend 欠落
「形容節」「不完全な『文。』」

「彼が友人に（欠落）示した知らせ」

「名詞」＋「名節詞」＋「完全な『文。』」（＝「名節同格」）

He showed his friend the news .

the fact that he showed his friend the news
「名節同格」「完全な『文。』」 「欠落」はありません

「彼が友人にその知らせを示したという事実」

『文。』の「形容詞化」そして「名句化」という点や、「関係代名詞」というよりは「名句」化のための「形容節詞」と呼ぶべきことに共感していただきましたでしょうか

「形容節詞」は『文。』を「形容節化」しつつ「名句化」している「手段詞」という実体がつかめましたか（「形容節詞」の存在意義・存在価値が見えてきましたか）

次講では、「主流」から外れた「傍流的」な「形容節」についてみていきます

第23講 「傍流的形容節」は「役外族」の「名語句」由来

「形容節詞」というものは、≪①『文。』中の「(「形容語句」同伴の) 名語句」を「先行詞」として出し、②次に「形容節詞」を置き、③『文。』の残りの部分を後ろにそのままつなげて「形容節」とし、「先行詞」を修飾し、④「形容節」は「吸収・消滅」の運命であるから、全体として「名句」になり、⑤次の新たなる『文。』の「主目補」「成句詞の後属役」となっていくという過程で、「形容節」の目印として活躍しているものである≫ということが理解できたでしょうか

前講では、「先行詞」となる「名詞」を「構成要素」すなわち「主目補」から選定してきました（ある意味、「主流」といえるでしょう）

本講では、**6、「副句」の「後属名語句」**や、**7、「形容句」の「後属名語句」**や、**8、「所有格」がついた「名語句」**や、**9、「群成句詞」の「後属名語句」**が、「先行詞」となっていく場合を見ていきます

『文。』の主流本流ともいうべき「構成要素」からの「先行詞」に対して、『文。』の傍流である「役外族」からの「先行詞」ですから、「傍流的形容節」と呼称・分類しているのです（「外様形容節」といってもいいでしょう）

では、順次、見ていきましょう

6、「副句の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

He bought the books at the shop .

①「説明したい名句」

「at the shop」は「副句」ですね

「成句詞at」の「後属役」の「名語句」を「先行詞」にしてみましょう

the shop which he bought the book at 欠落

①「先行詞」

②「形容節詞」

③「形容節」（吸収・消滅）

④全体で「名句」

この段階では、「構成来形容節語」と同様に「欠落」があります

しかし、もともと「副句」は「成句詞」＋「後属役名語句」であり、

「at the shop」という元の「かたち」のように、「which」の前に「at」を移動することができるのです（まさに、「形容節句」ですね）

the shop at which he bought the book 無欠

すると、「at which」という、《「成句詞」＋「構成来形容節語」》という特別な「副句」的な「形容節句（群形容節詞）」ができます

この段階で、「形容節」には「欠落」がなくなり『完全無欠な「節」』になりました
ここで、この「which」は「成句詞の後属役」であることになり、「代名詞」的な性質をもちます（旧来の「関係代名詞」の命名由来のひとつですね）

the shop at which he bought the book

さらには、「at the place」という「副句」が「there」という「副語」に置き換えられるように、「at which」という「特別な副句」が「where」という「（副詞的な）形容節語」に置き換えられるのです

そして、「副句」の「後属役名語句」に着目し「先行詞」としたということで、「役外来形容節詞（語）」と命名したのです（別称「副詞的形容節詞（語）」）

the shop where he bought the book

「役外来形容節詞（語）」に導かれた「形容節」

「成句詞＋構成来形容節語」をおきかえた「役外来形容節語」は、「完全な『文。』」を持った「形容節」を従え、「形容節」の標識となるものです

このような「理屈」はともかく、注目していただきたいのは、

「構成来形容節語」＋「不完全な『節』」

「成句詞」＋「構成来形容節語」＋「完全な『節』」

「役外来形容節語」＋「完全な『節』」

ということです

「役外来形容節語」が使われている場合、その元の『文。』では「副句」の「名語句」であったものを「先行詞」にしているのであって、「構成要素」の「名語句」はそのままなので、「役外来形容節語」に導かれる「形容節」には「欠落」は生ぜず、「完全な『文。』」となるのです（「構成要素」を「先行詞」にすると、「形容節」に「欠落」生じるのはいいですね）

以上のように、「時・場所」等の副句中の名語句に注目して「先行詞」にすると、「役外来形容節詞（語）」に導かれた「形容節」が生じることを認識してください

以上は、「副句」から「先行詞」を出す場合について、「場所」の「副句」を例にして「役外来形容節語」をみてきましたが、「役外来形容節語」には、「時」「場所」「理由」「手段」の4種あります

これから、残りの「時」「理由」「手段」について、「場所」と同様、以下の手順でみていきます

「構成来形容節」から「役外来形容節」への「手順」

- ① の『文。』の「副句」の「後属名語句」から「先行詞」を出す
- ② 「構成来形容節詞」を置き、残りをそのままに「形容節」をつくる
- ③ 「成句詞」を「構成来形容節語」の前に移動する
- ④ 「成句詞」＋「構成来形容節語」を「役外来形容節語」に置き換える

「時」をあらわす「役外来形容節語」の「when」

- ① He saw the rainbow at that time .
- ② that time which he saw the rainbow at 欠落
- ③ that time at which he saw the rainbow
- ④ that time whenhe saw the rainbow

「理由」をあらわす「役外来形容節語」の「why」

- ① He became a doctor for a reason .
- ② a reason whichhe became a doctor for 欠落
- ③ a reason for whichhe became a doctor
- ④ a reason whyhe became a doctor (通例使わない)
- ⑤ a reason (省略) he became a doctor
- ⑥ (先行詞省略可) whyhe became a doctor (単なる「疑問名節」)

「役外来形容節語」の「why」の場合、「役外来形容節語(⑤)」か「先行詞(⑥)」のいずれかを省略することが通例になっています

「先行詞」を省略した⑥は、「疑問副詞兼名節詞」に導かれた「名節」となります

「手段」をあらわす「役外来形容節語」の「how」

- ① He solved the problem in a way .
- ② a way which he solved the problem in 欠落
- ③ a way in which he solved the problem
- ④ a way howhe solved the problem (使わない)
- ⑤ a way (必ず省略)he solved the problem
- ⑥ (必ず先行詞省略) howhe solved the problem (単なる「疑問名節」)

「役外来形容節語」の「how」の場合、「役外来形容節語」か「先行詞」のどちらかを必ず省略することになっています

「先行詞」を省略した⑥は、「疑問副詞兼名節詞」に導かれた「名節」となります

「役外来形容節語」のまとめ

→ 「形容節」を導くのが仕事

- ① 「時・when」「場所・where」「理由・why」「方法・how」がある
 - ② 「when」「where」「why」のかわりに「that」がつかえる
 - ③ 「the time」「the place」「the reason」等の典型的な「先行詞」は省略されやすい → 「疑問副詞兼成節詞」の導く「名節」になる
 - ④ 典型的な「先行詞」のあとの「役外来形容節語」は省略されやすい
 - ⑤ 「the reason」「why」の場合、どちらかが省略されるのが通例
 - ⑥ 「the way」「how」は必ずどちらかが省略される
- 蛇補足ですが、
- ⑦ 「when」「where」には、「構成来形容節語」同様、「継続的用法(カンマ用)」がある(「継続的用法→副詞的用法」は別巻で学習する予定です)

7、「形容句の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「形容句」が「主語」についている場合の「形容句」の「名語句」を「先行詞」にしてみましょう

The tree in the park is famous .
「説明したい名句」

「in the park」は「形容句」ですね
「成節詞 in」の「後属役名語句」を「先行詞」にしてみましょう

まずは、「先行詞」を出し、直後に「構成来形容節語」を置いてみましょう

the park which the tree in 欠落 is famous
「先行詞」 「形容節」(吸収・消滅)
全体で「名句」

論理的ではありますが、このような段階のままでは、「ネイティブでは」使用されませんので、(致し方ありません、)「in」を「構成来形容節語」の前に出します

the park in which the tree is famous
「先行詞」 「形容節」(吸収・消滅)
全体で「名句」

これは、「構成来形容節語」+「the tree is famous」で、日本人にとってはわかりやすいのですが、次のように、元の『文。』の語順を尊重して単純に「先行詞」を出したあとの「欠落」部分に「構成来形容節語」を埋め込むのがネイティブ仕様なのです

the park the tree in which is famous
「先行詞」 「形容節」(吸収・消滅)
全体で「名句」

一見変に見えるかもしれませんが、元の語順に忠実な「形容節」で論理的なので、これが標準的に使用されるようです

このように、「成句詞+形容節語」が「形容節」の文頭ではなく、「形容節」の中にまざれている場合があります

では、「形容句」が「目的語」についている場合をみてみましょう

I forgot the name of the actor .
「説明したい名詞」

全体で「名目的句」

① the actor whom I forgot the name of 欠落

② the actor of whom I forgot the name

③ the actor the name of whom I forgot 欠落

元の「名目的句」の語順のまま

(私がその名前を忘れてしまったその俳優)

どれも可能ですが、①が一般常用的で、③が論文で多用されるようです

(参考: the actor whose name I forgot 欠落)

8、 「所有格形容詞のついた名詞」を「先行詞」にする場合

The name of the dog is funny.

「成節詞 of」の「後属役名詞」を「先行詞」にすると、

the dog the name of which is funny
となるのは、もう大丈夫ですね

では、元の『文。』の「of the dog」は「形容句」ですが、「所有格」(＝「形容詞」)で元の『文』を書き換えると、

The dog's name is funny.

となりますが、「The dog」を「先行詞」とすると、「's」が「所有格の形容節詞」(「形容語」の性質をもっていますし、「his」と同じです)としてあらわれてきます

t h e d o g w h o s e n a m e i s f u n n y

(その名前がおもしろい犬)

「形容句」と「所有格」との深い関わりが見てとれたでしょうか

「形容句」と「所有格」から派生する「形容節詞」は意外と難しいものですかね
従来は、「所有格」の「**関係代名詞**」といわれてはいますが、「形容句」からくるものであり、しかも、「所有格の代名詞 (my・our・your・his・her・their)」の本質がそもそも「形容詞」なのですから、「所有格の**関係代名詞**」ではなく、「**関係形容詞**」と呼ばれるにふさわしいものなのですが、旧来的命名は無視して、「**形容節詞**」のひとつに過ぎないものと位置づけて理解してください

「whose name」の「whose」は、「name」という「名語」を修飾しつつ、「形容節」をつくっていて、まさに「**形容詞的形容節詞 (語)**」と呼ぶに値するものですね

9、 「群成句詞の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「群成句詞」

「群成句詞」とは、《複数の単語の集合体で「成句詞 (語)」の役割を果たしているもの》で、「in front of」「because of」「by means of」「in spite of」「thanks to」「out of」等です

これらは、複雑な状態・状況を表したい場合で、たまたま一語であらわす適切な「成句詞」がなかった等の理由で、合成して「成句詞」がつくられているのです

ですから、「I live in front of the station.」を「in front」を「副句」で「of the station」が「front」を修飾する「形容句」と完全に分解しても有用ではないのです

「in front of」で「～の前に」という意味の「一語の成句詞」と理解した方が合理的なのです (「before」より「前」の意味を強調できるのでしょう)

このように、《複数の単語で1語の「成句語」と同様の働きをして、「品詞分解」をする合理性がなく、1単語として扱うべきもの》を「群成句詞」といいます

では、「群成句詞」の含まれた『文。』の、「群成句詞」の「後属目的名語句」を「先行詞」にしてみましょう

He lives in front of the station .
「群成句詞」 「先行詞にする名詞」

全体で「副句」

the station in front of which he lives

日本語になりにくいのですが、「彼が住んでいるところの前にある駅」とでも訳すしかないですね

「成句詞」＋「構成来形容節語」ということで、「役外来形容節語（「where」）」に置き換えると、「彼が住んでいる駅」となり、「彼は駅そのものに住んでいる」ことになってしまい、置き換えることはできません

10、「意味の強い成句詞の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「前置詞」の個性が強い場合、むやみに「役外来形容節語」におきかえると、「言いたい内容」が損なわれます

また、その意味の強さゆえに、必ず「構成来形容節語」の前に置きます

「during」「near」「since」「beyond」「besides」等があげられます

He studied English during the summer .
「先行詞」にする「名語句」

the summer **during** which he studied English

「彼が英語をずっと勉強した夏」

ここで「during which」を「役外来形容節語」の「when」に置き換えると、「ずっと」という細かい意味があらわれなくなりますから、置き換えることはできないのです

「傍流的形容節」という考え方は難しかったですかね

まずは、「構成来形容節語」「役外来形容節詞」の基本を確実におさえ、「傍流的形容節」の全体の理解を目指してください

次講と次々講で、本稿の仕上げに入りまして、文意を整える役割効果を有する「助動詞」と「助動詞」を使った「条件」の提示についてみていきます

第24講 「避断定」「責任回避」「推量」が仕事、「助動詞」

ようやく、「助動詞」を学習する段階にきました（これ以前に手を出すのは危険です）
「構造把握」の習得段階を過ぎたら、これからは、「主観的表現」や「解釈が高度に必要とされる場面」の段階へと上がっていきます

そこで、本講では、人間の微妙な思い（主観）を巧みに表現するためにある「助動詞」の「存在意義」「実態」について一気に学習しますので、かなり頭の重労働になると思いますが、とにかく「上位概念」に立ち戻って考えながら頑張ってください

前講でみたように、「作文者」が「断定（断言）しない」「断定（断言）できない」場合すなわち「避断定」「断定回避」「推量」の場合には、主に「助動詞」を使います
実質的には「断定」しないで、発言に対する「責任回避」をすることが主眼でしょう

「避断定」「断定回避」「推量」には、「たぶん」「おそらく」等の「副詞」を使う方法や、『文。』や「動詞」に「～と思う」等をつける方法もありますが、日本語では「動詞」の語尾に、英語では「動詞」の前に「助動詞」をつける方法が主流なのです

本講では、「避断定」を「基本上位（根本）概念」と考え、「推量」を多数の「下位概念」のうちの「代表概念」と捉えて、「助動詞」を考えていきます

「動詞」の「現在形」は、現在の「断定」や現在の「習慣」をあらわすのが原則ということ为前提に、「避断定」「推量」「責任回避」というものを理解してください

「助動詞」の使用場面としては、「推量」「非確信」「想像」「遠慮」「丁寧」「意向」「提案」「勧誘」「意志」「不確定」「不確実」「未定」「未確認」「不明」「習慣」「当然」「未来」「予定」「命令」「義務」「可能」「運命」「忠告」「助言」「必要」「許可」「依頼」「習慣」「祈願」等というような「抽象的な漢熟語」で説明されています

ここでの学習の眼目や仕方ですが、上述のような語群を覚えるのではありません
「避断定（断定回避）」「責任回避」という「根本概念」や「推量」というような「代表概念」で包括的に理解して、実際の『文。』の文脈にしたがって、「避断定」「推量」を機軸に、日本語の具体的な意味をあてがっていく場合の補助手段とするだけです

日本語の具体的な意味としては、「かもしれない」「ありうる」「はずだ」「ちがいない」「だろう」「つもり」「できる」「ならない」「べきである」「してもよい」「ほうがよい」等があげられます（まさに主観的で無責任な表現ですね）

「助動詞」の本質的な仕事は「主観面の表現」で、「避断定」「責任回避」そして「推量」なのです

主観的判断の表現に欠かせない「手段的」な「品詞」が「助動詞」なのです

例えば、「so that構文」での、「that節」に「助動詞」が使われるのも、「目的」をあらわす場合は未確定なので「that節」に「助動詞」がほぼ必要ですが、「結果」をあらわす場合は断定できるので「助動詞」が必ずしも必要ないのです

また、「will」「shall」「would」「sould」も「未来形」等の「時制」の問題と考えるよりも、「避断定」「推量」の問題として考えた方が、包括的で論理的です

「助動詞」の学習の重要な点は、「助動詞」の「存在意義」「実体」を「認識」して考えていくことです

確かに、「構造把握」の観点からは「役外族」ではありますが、人間の思い（主観的判断）をどううまく伝えるかという観点では重要な働きをしていることに注目しながら学習すれば、また違ったものが見えてきて、認識力も深まるかと思います

そして、「助動詞」は、古文の「助動詞」の学習と連動させていくと効果的です
洋の東西や時代を問わず人間の主観的表現はいつでも同じであることを認識しながら、微妙な思い（主観的判断）の伝え方をつかみ取ってください

「助動詞」への考え方のまとめ

①上位（根本）概念

「避断定」「断定回避」（基本概念）、「推量」（代表概念） 「責任回避」（実態）

②作文者の意図

「断定（断言）しない」「断定（断言）できない」「責任回避」

③抽象的な意味内容語

「推量」「非確信」「想像」「遠慮」「丁寧」「意向」「提案」「勧誘」「意志」「不確定」「不確実」「未定」「未確認」「不明」「習慣」「当然」「未来」「予定」「命令」「義務」「可能」「運命」「忠告」「助言」「必要」「許可」「依頼」「習慣」「祈願」等

④日本語の具体的意味

「かもしれない」「ありうる」「はずだ」「ちがいない」「だろう」「つもり」「できる」「ならない」「べきである」「してもよい」「ほうがよい」等、以下、表参照

日本語の意味としては、「逸らす」「はぐらかす」「曖昧」というような主観的表現ともいえます

ここでのコツは、「語彙」「文脈把握力」「論理思考」です

「③抽象的な意味内容語」を「語彙」としてある程度知っていなければなりません
が、丸暗記ではありませんし、ただの丸暗記は無意味です

「文脈把握力」「論理思考」を働かせて、上位の「避断定」「推量」から③を利用して「④具体的意味」へと連想・推測し、そして「文脈的に④を確定」させるのです

「助動詞」は「現在推量」が根源

まずは、「作文者」が作文時に、たとえ「現在の客観的に確定している事実」であっても、「その事実について作文者の未確認や未知」のために、「断定しない、断定できない場合」に、「推し量って」表現するのが、「助動詞」の活躍の根源です

次に、その展開形態として、「過去の事実に関する『過去推量』」があります

以下の表に、「助動詞」の主な意味を掲げておきます（辞書をひいて例文を確認してください）
（無理に覚えようとせずに、例文確認と上位概念から具体的に連動させることに留意してください）

「助動詞」のまとめ（はじめは流し読みが鉄則です）

助動詞単語	意 味（抽象語）
c a n	① ありうる・しうる（可能推量） →「否定形」の「ありえない」⇒「はずがない」（「可能性」がない） ②してもよい（許可）
m a y	①かもしれない（弱い推量）→「c a n」より「弱気」な「推量」 ②してもよい（許可）
m u s t	①ちがいない（強い推量） ②しなければならない（義務的推量→推断）
w i l l	①でしょう、だろう（未定、予定、推量）→（「丁寧・依頼・勧誘」） ②つもり（意思推量）、しようとする（固執）、しようとししない（否定形→拒絶） ⇨ ③ 1 ③するものである（習慣・習性） ⇨ ③ 2
s h a l l	①でしょう、だろう（未定、予定） ②つもり（意思推量） ③させてあげる（作文者の意図） ⇨ ③ 3
w o u l d	「w i l l」の「過去形」といわれているが、それは③以下であって、実態的には、「現在」の「遠慮がちな意思推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない ①かもしれない、だろう（意思推量）→（「丁寧・依頼・勧誘」） ②だろうになあ、するのになあ（仮定条件文・仮定法） ⇨ ③ 4 以上、「現在推量形」

	以下、「過去形」 ③したものだった（過去の非継続的動作習慣） ⇨ ⑤注 ④どうしても～した（過去の固執） ⇨ ⑥注 どうしても～しなかった（否定形→過去の拒絶） ⇨ ⑦注 ⑤時制の一致（「純粹過去形」） ⇨ ⑧注
s h o u l d	「s h a l l」の「過去形」といわれているが、それは⑥のみで、実態的には、「現在」や「未来」への「強い推量」である ①べきであろう（当然） ②はずであろう（強い推量） ⇨ ⑨注 ③べきなのになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「特別な用法④⑤」と「過去形⑥」 ④主観的判断、感情表現（「s h o u l d」を省くと、感情面のない単なる事実伝達的になる） ⇨ ⑩注 ⑤仮定法現在（「s h o u l d」を省くと「原形」になる） ⇨ ⑪注 ⑥時制の一致（「純粹過去形」）
c o u l d	「c a n」の「過去形」といわれているが、それは④のみで、実態的には、「現在」の「遠慮がちな可能推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない 「w a s (w e r e) a b l e t o d o（断定的）」とほぼ同義といわれているが、「断定的なもの」と「助動詞」の「推量的なもの」とは一応峻別すべき ①ありうる（可能推量） ②よろしいでしょうか（許可） ③できるだろうになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「過去形」 ④時制の一致（「純粹過去形」）
m i g h t	「m a y」の「過去形」といわれているが、それは④のみで、実態的には、「現在」の「さらに遠慮がちな推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない ①かもしれない（弱い推量） ②してもよい（許可） ③かもしれないのになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「過去形」 ④時制の一致（「純粹過去形」）

n e e d	必要がある（「助動詞」と「動詞」が混在）	
d a r e	あえて～する（「助動詞」と「動詞」が混在）	
u s e d t o	①したものだ（過去の継続的習慣行動） ②～であったものだ（過去の継続的状态）	（「助動詞」と「動詞」が混在）
h a d b e t t e r	するのがよい	

「h a d b e t t e r」「u s e d t o」は、「群助動詞」とでも命名すべき特殊なものです

2語で一単語の「助動詞」と考えるべきものなのです
その特殊性を敷衍（ふえん）して考えると、「h a v e t o」はもちろん「w a n t t o」「l i k e t o」等の定型的な「動詞＋不定詞」は、「u s e d t o」と性質の近い「準助動詞」というように考えたほうが得策と考えます（「第23講」参照）

④1 「w i l l」の「固執」「拒絶」

B o y s w i l l b e b o y s .

「どうしても男の子だな。→ 男の子はやっぱりわんぱくだな。」（「習性」とも解せる）

T h e d o o r w o n ' t o p e n .

「このドアは、どうしても開かない。」

④2 「w i l l」の「習慣」「習性」

H e w i l l s l e e p f o r h o u r s .

「彼は何時間でも寝る。」

A c c i d e n t s w i l l h a p p e n .

「事故は起こるものである。」

O i l w i l l f l o a t o n w a t e r .

「油は水に浮くものだ。」

㊦③ 「二・三人称」の「shall」による「作文者の意図・思惑」

You shall have my books.

「あなたは私の本を持つことになるだろう。」→「あなたに私の本をあげよう。」

He shall die.

「彼は死ぬことになるだろう。」→「彼は、私が死なして（殺して）あげよう。」

作文者の意図が、二・三人称の対称者を中心にした表現であらわされています

㊦④ 「would」の「仮想条件文・仮定法」

「仮想条件文・仮定法」については、次講で学習します

これを、単に「will」の「過去形」というのは実態にそぐわないので、全く別の「助動詞」と考えた方が合理的でしょう

㊦⑤ 「would」の「過去の非継続的動作習慣」

We would often play tennis after lunch
in our school days.

「私たちは、学校に行っていたころ、昼食のあとしばしばテニスをしたものでした。」

①過去時を示す副詞系や「often」を伴うことが通例です

②非継続的な動作を示し、継続的な行動や状態は「used to」を使います

We used to go fishing every morning.

「私たちは毎朝釣りに行ったものだ。」（過去の継続的習慣的行動）

There used to be a tower.

「かつて塔があったものだ。」（過去の継続的状态）

「There is 構文」には、ほとんどの「助動詞」を入れることができます

㊦6 「would」の「過去の固執」

He would insist on going alone.

「彼はどうしても一人で行くと言い張った。」

㊦1の「過去形」です

㊦7 「would」の「過去の拒絶」

The door wouldn't shut.

「このドアはどうしても閉まらなかった。」

㊦1の「過去形」です

㊦8 「would」の「時制の一致」

この場合こそが、未来をあらわす「will」の「純粹過去形」といえるでしょう

I know that he will be a doctor.
↓ ↓
I knew that he would be a doctor.

「彼」が「医学部の学生」だった頃から時間が経過し「医師」になって「知っている（現在形）」から「知っていた（過去形）」になるように、「主節」が「過去形」になると、「名目的節」の「will」を自動的に「would」に変えなければならない法則を「時制の一致」といいます

㊦9 「should」の「はずであろう（「未来」への強い推量）」

The train should be coming soon.

「電車は間もなく来るはずだろう。」

㊦ 10 「主観的判断」や「感情」をあらわす「s o u l d」

It is 主観的判断や感情の形容詞・名詞 that 主 s h o u l d ～ .

作文者が「主観的判断」や「感情」の要素が強いと感じる場合は、評価の対象となっている「真主役の名主節」に「主観的判断」や「感情」をあらわす「s o u l d」を入れます（「真主役の名節」を「とは～」 「なんて～」と訳す）

作文者が「主観的判断・感情の形容詞」を使ったとはいえ、客観性が高いと考えれば「s o u l d」を使用せず、「～ということは」というような通常の「真主語の名主節」として訳します（この場合の「名主節」には通常の「三単現」「過去形」を使う）

It is 主観的判断や感情の形容詞・名詞 that 主 「三単現」「過去形」 ～ .

主観的判断をあらわす形容詞

「g o o d」「i m p o r t a n t」「n a t u r a l」「r e a s n a b l e」
「r a t i o n a l」

感情をあらわす形容詞

「s u r p r i s i n g」「s t r a n g e」「o d d」「d i s a p o i n t i n g」

主観的判断や感情をあらわす名詞

「a p i t y」

㊦ 11 「s h o u l d」の「仮定法現在」

「仮定法」については、次講で学習します

ところで、「しなければならない」「べきだ」の強弱ですが、日本語の「べきだ」は強いように感じますが、「s h o u l d」は「推量」「遠慮」の意味の強い「助動詞」ですので、そんなに強い意味を持ってはいません

やはり、「断定の命令文」が強くて、以下のように強弱がいられています

強 「命令文」>「m u s t」>「n e e d t o」>「h a v e t o」>「b e t o」
>「h a d b e t t e r」>「o u g h t t o」>「s h o u l d」> 弱

「助動詞」の「疑問形」「否定形」「否定の短縮形」

以下に、「群助動詞」や、「助動詞」と「動詞」が混在してるものについての、「疑問形」「否定形」「否定短縮形」をあげておきます

辞書で確認するとき等の参考にしてください

need	疑問形	Need 主 do Do [Did] 主 need to do	
	否定形	need not do don't [didn't] need to do	
	否定短縮形	needn't do	
used to	疑問形	Used 主 to do Did 主 use to do	
	否定形	used not to do didn't use to do never used to do	
	否定短縮形	usedn't to do	
ought to	疑問形	Ought 主 (to) do	
	否定形	ought not (to) do	
	否定短縮形	oughtn't (to) do	
had better	否定疑問形	Hadn't 主 better	
	否定形	had better not do	
	否定短縮形	無い	
dare	疑問形	Dare 主 do Do [Did] 主 dare (to) do	
	否定形	dare not do don't [didn't] dare (to) do	
	否定短縮形	使わない	

「dose」は省略しました

「never used to」と「had better not」の位置に注意してください

辞書で例文を確認してください

「過去推量」

「過去の客観的に確定した事実」であったとしても、「作文時」に「作文者」が「未確認」「未知」であったり、「後悔や非難の思い」等から「仮定的」「願望的」な状況を作成・推量（想像）したいがために、「過去の事実に関する推量」が存在します

（「単純な過去の事実に関する推量」と「後悔」「非難」等を含む場合があることに留意してください）
以下の表に、主な「過去推量（「助動詞」＋「have」＋「完了分詞」）」を掲げます

「過去推量」（「助動詞」＋「have」＋「完了分詞」）

① 「can」「could」

「can't have 完了分詞」

～したはずがない、～だったはずがない

「can have 完了分詞」（～したかもしれない）は、通常「could have 完了分詞」を使う

「could have 完了分詞」

～したかもしれない、～だったかもしれない

「couldn't have 完了分詞」

～したはずがない、～だったはずがない（「can't have」とほとんど違いはない）

② 「may」「might」

「may have 完了分詞」

～したかもしれない、～してしまっているかもしれない、

～だったかもしれない

「might have 完了分詞」

～してしまったかもしれない、～だったかもしれない

「might」には「実現していなかった」「遠慮がち」で「確信度が低い」意味合いがある程度で、ほとんど差はないとみてよい

③ 「must」

「must have 完了分詞」

～したにちがいない、～であったにちがいない

「否定」は意味的に「can't have 完了分詞」となる

④ 「should」「ought to」

「should have 完了分詞」

～すべきだったのに（しなかった）（非難・後悔）

～したはずだろう（当然）

～してしまっているべきである（完了）

「ought to have 完了分詞」もほぼ同義とみてよい

⑤ 「need」

「need not have 完了分詞」

～する必要がなかったのに（してしまった）（非難・後悔）

上の表の例文をいくつかあげますが、詳しく見てみると、「事実を知っているのかどうか」というややこしい観点があります（この点を認識しながら、辞書での例文確認をしてください）

次講で詳しく学習する「仮想条件提示文（仮定法）」への足掛かりですので、理解するように頑張ってください（例文は、上記の表の番号と一致しますが、順番に注意！）

② He must have been sleepy.

「彼は眠かったにちがいない。」 → ここでは、事実を知らない（事実に関する推量）

③ He might have gone home already.

「彼はすでに帰宅してしまったのかもしれない。」 → 事実を知らない（同上）

① He could have been right.

「彼は正しかったのかもしれない。」 → ここには、過去の事実の判断への迷いがある

ここでは、事実の知不知が問題となっているのではなく、知っている事実に対する評価に迷いがある場合の表現です（「評価」に関する「推量」）

④ He should have finished his homework.

「彼は、宿題を終わらせるべきだったのに（しなかった）。」

ここでは、宿題をしていないという事実を知ったうえで、（他人の）過去の行動（事実）への非難・遺憾の思い（評価）を示しています
「もし、できたのならば」という「假定仮想の条件」の思いが裏にはあるのです（次講の「仮想条件提示文」や次ページを参照してください）

以下、「次講」への橋渡しです（読み流して、「次講」へ進んでください）

「推量」から「仮想条件文」（仮定法）へ

推量の形態には、既定事実を知らずに言及する「推量」の段階があり、また別に、現在や過去の事実を知ったうえで、その事実をひっくり返した想定をし、願望・後悔して言及する「仮想条件文」（「仮定法」）の段階があります
それらの中間段階があるのですが（「過去推量」の①④の例文）、まずは、「現在推量」と「過去推量」を確実に理解し、「仮想条件文」への理解を進めてください

知っている事実（現在・過去）について言及する	普通の文（「直説法」） 現在形・過去形
現在の既定事実を知らない（現在未知）うえで言及する	「現在推量」 現在単純条件文
過去の既定事実を知らない（過去不知）うえで言及する	「過去推量」 過去単純条件文
中間形態（「過去推量」の①④の例文）	
現在の既定事実を知っていて、それに反することを仮想し願望する（現在事実転覆）「現在の願望」	現在仮想条件文 （「仮定法過去」）
過去の既定事実を知っていて、それに反することを仮想し後悔する（過去事実転覆）「過去の後悔」	過去仮想条件文 （「仮定法過去完了」）
未来のこと（当然未定事実・当然未知・転覆不可）を想定して言及する	未来形 単純未来条件文 意思未来条件文 未来仮想条件文

「現在の願望」と「過去の後悔」という「思いの形態」を実感してください
「仮定法」といわれている「仮想条件文」がよく理解できるはずですよ

そんなことより、「仮定法」なんてわかりにくい用語を次講以降で駆逐しましょうよ

では、いよいよ最後の次講で、「仮定法」とかいつてるヤツを詳しくみていきましょう（ていうか、やっつけちゃいましょう）

「仮定法は *If* です」なんて無様な状態になりませんように・・・頑張りましょう

ここあたりからは、「純粋な文法論」というよりは、「言語表現と解釈論」となっています

第25講 「単純条件提示文」と「仮想条件提示文」

従来、「条件提示表現」の学習の一部を「仮定法」と称して提示されていましたが、
それではみなさんの得心を得られたのでしょうか

「仮定法」という言葉は知っているけど、実際は何なのかがよくわからないのが実態
ではないでしょうか

そもそも、「仮定法」という言葉が解りにくいのです

「仮定法」という言い回しは「動詞」の「使用法」のことなのです

「事実と違う仮定のことをいう場合」の「動詞」の「用法（瑣末な現象）」に「仮定法」と名前をつけて、「仮想条件提示表現」の学習を「仮定法」と銘打ちぶち上げるから判らなくなるのです（ついでに言わせてもらえば、「単純条件提示表現」に関する学習をほとんどすること無しに、「仮想条件提示表現」の学習を押し付けてくるのです）

「仮定法」という学習させようとするのは、実際は、「仮想条件提示」の表現方法についての学習なのです

しかし、殊更に「仮想条件提示表現」だけを学習しても、「単純条件提示表現」を基本とするはずの「条件提示」に関する表現の全体像を認識理解することは困難です
本講では、「条件提示表現」の全体について詳しくみていきます

まずは、「条件提示」という表現の実体は何かを分析・分類し、その文法的規則性のできる限り論理的に説明すべきなのが本来のやり方でしょう

瑣末な現象に名前をつけて、それを「上位概念」としようとするのが無理なのです

「条件提示の表現法全般の分類・検討」が「統括上位概念」（大きな視点・学習目標範囲）だと考えます

それでは、これから「仮想条件提示表現」を習得する前提となる「単純条件提示表現」を含めた「条件提示表現」全体を学習していきますが、「条件提示表現」とはどんなものなのかという観点を柱として、まずは、以下に示すいくつかの『「条件」の「根本前提」』で、「条件提示表現」の全容の認識理解のために、「条件提示表現」の理解の大前提や全体像を俯瞰（ふかん）してから、「本論」に入っていきます

「本論」といっても、「本論」そのものは、「条件提示表現」の詳細な分類と例文の学習という技術的なものにすぎませんから、本講では、「根本前提」の認識理解のほうが絶対的に重要なことをご承知のうえ学習してください

『「条件」の「根本前提」』の段取り

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

I 「副詞系」の確認

II 「条件」の認識

III 「単純条件」と「仮想条件」の認識・理解

「現在の願望」「過去の後悔」「未来への予備・決意」とは

㊧ 「レトリック」と「真意」

㊨ 「条件文」における「真意」の読み取り

㊩ 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」

㊪ 「条件内容の実現」の「程度論」

しつこい内容ですが、認識力・解釈力・読解力・社会力の増強のためには必須の理解ですので、頑張ってください

では、『「条件」の「根本前提」』に入ります

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

「条件提示表現」とは、「副詞系」で「条件」を提示し、「主節」でその「結論（帰結）」を提示する表現であり、その「真意」を読み取ることが要求されるものです

「条件提示表現」の学習は、**I**、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」を理解・確認し、**II**、「副詞系」のなかの「条件」の概念を認識し、**III**、「単純条件」の認識理解を前提に、「単純条件」と「仮想条件」との本質的相違がわかって初めて「仮想条件」への深入りができるのです（段階を確実に追ってください）

I、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」の理解はもう大丈夫ですね（確認）
II、「条件」とは、「成績があがったら、小遣いをあげてあげる」のように、いきなり小遣いがあがるのではなく、「成績があがる」という「副詞的な場面状況が必要」ということである、というのは解かりますね（再認識してください）

Ⅲ、そもそも、「条件」には、「**単純条件**」と「**仮想条件**」があります
そこに、「現在」「過去」「未来」の時間の区分がからめられてきます

「**単純条件**」 → ①「**現在**」②「**過去**」で確定した事実を作文者が知らない場合の条件提示や③「**未来**」の一般的に起こりうることにに関する条件提示です
①「今暇なら、掃除を手伝ってください」
②「昨日彼が学校を休んでいたなら、あの新任教員を見てないよな」
③「明日晴れたら、釣りにいきましょう」（→後述しますが、「**時条副節**」の問題）

「**仮想条件**」 → ④「**現在**」⑤「**過去**」の確定で既知の事実^{④⑤}に反する条件提示（「**反実仮想**」と称されています）や、⑥「**未来**」の起こりえないことを想定する条件提示です（従来、この④⑤⑥を「**仮定法**」と称されて喧伝されてきました）
決まってしまう現実^{④⑤}に反する想定をした条件提示（④⑤）や「**未来**」の通常予想される出来事を逸脱した条件提示（⑥）ということをご認識してください
④「もし、今、私が鳥だったら、あなたを救い出すのになあ」（当然、人間ですね）
⑤「もし、あのとき、その場にいたとすれば、あなたを支援できたのになあ」
⑥「もし、明日、西から太陽が昇ったら、私の全財産をあなたにささげます」

「**仮想条件提示表現**」とは、「**現在**や**過去**のことに関して、現実とは違うこと、既定の事実^{④⑤}に反することを想定し」「**未来**のことに関しては、まず起こりえないことを想定し」、その条件下で「**現在の願望**」「**過去の後悔**」「**未来への予備・決意**」等を表現することです（「**推量**」の意味合いを持つことから「**助動詞**」が使われます）
「現実とは違うこと、決まった事実^{④⑤}に反することを想定」するのは「**副語・副句・副節**」で、「**願望・後悔・予備・決意**」するのは「**主節**」です

ここで確実に認識してほしいのが、④「**現在の願望**」と⑤「**過去の後悔**」に⑥「**未来への予備・決意**」という「**三種の仮想条件**」による「**真意伝達**」の実態内容です
④「**現在の願望**」とは、「今、大金持ちだったなら」というような「**現在の現実（貧乏）**」に反することを「**仮想**」して、何かを「**願望・欲望**」することです
⑤「**過去の後悔**」とは、「あのとき、ちゃんと・・・してたら」というような「**過去の実際の行動や事実**」と「**違う行動や事実**」があれば「**また別のもっとよい現実**」が「**成し遂げられていたり、存在しえたのになあ**」と「**後悔**」することです
⑥「**未来への予備・決意**」とは、「**太陽が燃え尽きたら、地球はどうなるの**」「**西から太陽が昇ったとしたら、あなたの望みを全てかなえます**」というように「**まずは起こりえない未来の条件**」を提示し、「**未来への予備・決意**」を述べることです
このような、基本的な「**三種の仮想条件**」というものを認識して進んでください

弐 「レトリック」と「真意」

次に、「条件提示表現」の深い理解の基礎となる、「**レトリック**」「**修辞（法）**」と「**真意（伝えたいこと・本音）**」について認識していただきたいと思います

主観のかたまりで他人の心情を知るテレパシーのない人間は、自分の思い（真意・本音）をどう伝えたらいいのかという迷いのなかで表現することを強いられています
ストレートに言えば軋轢が生じるかもしれないし、雰囲気崩れるかもしれないし、遠まわしに言えば、真意は伝わらないかもしれないし、浮くかもしれないし等々です
そして、飾り立てたり巧みに表現することを「レトリック」「修辞（法）」といいます（「仮想条件提示表現」は「レトリック」のひとつであり、典型ともいえるものです）

「世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」（『在原業平』）

（この世に完全に桜というものがなかったら、いつ咲くとかいつ散るとかあたふたせずに、春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ）

いきなり、古文の「せば～まし」の公式です

「反実仮想」といいますね（レトリックのひとつです）

現実と反することを仮想して、願望や後悔を詠い、感情表現をすることですね

「この世に全く桜というものがなかったら」で、「現実にはありえない条件」をいっています（「反現実の仮想条件」「副節・条件節」）

「春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ」で、「願望」される「結論（帰結）」をいっています（「主節・帰結節」）（散りゆくはかない桜を見ずに済むのです）

「せば＝If」「まし（助動詞）＝would（助動詞）」という感じでしょうか（この実態がつかめるようになるのが本講の目標です）（「助動詞」といえば「推量」ですね）

この世から桜の木が完全になくなることは、まずありえませんね

このように、ありえない前提事実（反現実）を持ち出すのが「仮想条件」です

（英語では、この場合に使う「動詞」の形態を「仮定法」というのです）

作者は本当に桜がなくなってしまうばいなんて思っているのではありませんね

（本当は桜が大好きで、千回万回の春の訪れや常春を望んでいるのかもしれませんが）

桜があると春はそわそわするし、なければ情緒豊かには過ごせないしで、困ったもんだと悩んで詠っているのでしょうか（これが真意で、揺れる心情解釈が古文です）

もっと言うと、毎年来る桜の開花（再会）風散（別離）に思いを寄せているのです
あまりに美しい季節に思い悩み、いっそ無くなってしまうばいとまで愛してるのです
ついでの余談ですが、日本人は近年新参クローンのソメイヨシノごときの開花風散に感動していいのでしょうか（本来の日本古来の桜は、「エドヒガン」「ヤマザクラ」です）

「真意」と「レトリック（修辞）」の関係をおわかりいただけましたでしょうか

参 「条件文」における「真意」の読み取り

さらに、その次は、「条件提示文では、常に『真意』を読みとらなければならない」という任務について考えます（表面的なレトリックに騙されてはいけません）

「条件文」では、『文。』を訳して文面をそのままとればいいものではありません
「何を言わんとしているのか」という『真意』を読み取らなければならないのです
文脈に隠れている「本当の現実」と「理想の状況（願望・後悔）」という作文者の「真意」を汲み取らなければならないのです（「レトリック」に振り回されてはいけません）
特に「仮想条件」においては、「真意」が強烈であり、読み取りが絶対的なのです
例えば、「もし私が鳥だったら、あなたのもとに飛んでいけるのになあ」という字面はどうでもいいのです（「鳥」もどうでもいいので、すぐに飛んで行けば「ロケット」もありです）
「私は鳥ではないので、あなたのもとには飛んでいけません」というような「反対描写」の言い換えも無意味で徒労です（字面をなぞるような形式的言い換えは無駄中の無駄です）
「今はあなたに会えない」という現実と、「あなたにすぐ会いたい」「あなたと24時間いつでも一緒にいたい」という「理想の状況（真意）」を読み取ってください
「率直な真意」を汲み取る「心情解釈」が重要なのです（「あなたが、ダイスキ」を読み取ってください）
「あなたに今すぐ会いたい」という隠れた心情吐露に気づかず、「条件」を使った遠まわしな表現（レトリック・修辞）の表面的なものに惑わされてはなりません
読み取るべきものは、字面ではなくあくまで「作文者の真意」なのです

では、「条件提示表現」について、さらに具体的に詳細に学習していきましょう

「直説法」と「仮定法」（形式的観点）

「直説法」

「仮定」の話ではなく、「事実」をそのまま「事実」として伝えようとするとき、「現在」のことを作文する場合には「現在形の動詞」を使いますし、「過去」のことを作文する場合には「過去形の動詞」を使います

これを「直説法」といいます

「仮定法」

「現実にはありえない話（現実と反すること、反現実）」すなわち「仮想（仮定）の話」を言うときの「動詞」の形を「仮定法」といいますが（例えば、「was」ではなく「were」が使われるということの特徴としています）、実態的に重要なのは、
《「現在の仮想」には「過去形」を使い》、
《「過去の仮想」には「過去完了形」を使い》、
《「未来の仮想」にも「過去形」を使う》
という「時制がひとつ以上ずれている」ということです

「事実提示」か「条件提示」かで、その使われた「動詞」の形を「法」というのですが、瑣末で技術的なことですね（重要なのは、「条件提示表現」の実態です）

四 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」（実質的観点）

「条件」

単に事実を伝えるだけのときは「条件」をあげる必要はありませんが（「私は王様です。」「私は王様でした。」となります）、「仮定」「仮想」して作文する場合は、「仮定・仮想する条件」をあげることとなります（「条件」からは「真意」を読み取るのは困難です）たとえば、「もし私が王様だったら」というような具合です

これは、「副節」であり「条件」をあらわしています（しつこいですが、「仮定」「仮想」する『文。』が一般的には「仮定法」と思われておりますが、従来の文法説明では、そこでの「動詞の形」が「仮定法」と命名されているのです）（まずは、「条件」概念一般の理解が重要なのであって、「動詞」の使われ方は後の技術的問題です）

「結論（帰結）」と「真意」

で、「もし私が王様だったら」という「仮想」で止まることは通常ありえません
「では、どうするのか」という「結論（帰結）」が必要になります

この「結論」は、「副節」とは別の「主節」で示します（ここが「真意」への端緒です）
例えば、「みんなを幸せにするのになあ」などです（→さらに深い真意として、紛争・貧困・病気等で平和・幸福でない世の中を正したいという理想等があるのです）

実体は、王様であることが主眼ではなく（ある意味どうでもいい）、それを足掛かりに「実行実現したい内容・真意」があるのです（ここが「真意」の読み取りですね）

文法的には、「仮想・条件」を「副節」であらわし、「結論（願望・後悔等）」を「主節」であらわすのです（この「主節」をここでは「帰結節」といいます）（下の例文では、「副節」で「現在の反実仮想」、「主節」で「現在の願望」をあらわしています）
（・・・でも、どうあれ「レトリック」に過ぎませんね・・・）

英語で、「現在の仮想・願望」をあらわす場合、前提条件の「副節」の「動詞」にも「帰結節（主節）」の「助動詞」にも「過去形」を使うのです

形式的には「助動詞の過去形」と言われていますが、実質的には「現在推量形」なのです（実質的な内容を吟味せずに、形式的に「仮定法過去」と喧伝するのも無責任な話ですね）（こういう表面現象だけを捉えて「仮定法」といって何になるのでしょうか）

If I were a king, I would make everyone happy.
「もし今私が王様だったら、みんなを幸せにするだろうになあ。」

ここで興味深いのが、「現在の願望」を表現する「条件節」が、日本語でも、「過去形」のような表現になっているということです（「もし今~だったら」と過去形を使う）
現実と違うことを想定する場合は、現実離れという観点なのか、英語でも日本語でも時制をずらした表現になるのでしょうか

五 「条件内容の実現」の「程度論」

「条件」の実現の程度

「条件」といっても、「実現の程度」は「ゼロ」から「１００」までいろいろあります

「ゼロか１００か、有るか無いか」を「可能性」といい、「ゼロを越えたところから１００未満の細かな段階」（ここでは「１から９９」と考えてください）を「蓋然性（がいぜんせい）」といいます

作文者が、未来のことについて、同じことに関して作文する場合でも、「もしフカヒシを食べるなら」のように「実現はありうるもので、五分五分程度かそれ以上だ」と思えば単なる「単純条件文」を使いますし、「あまりに高価でありえない」と思ったり、「もし私が鳥だったら」のように「全く実現しない（可能性がない）」とか、「もし私が王様だったら」のように「ほとんど実現不可能（蓋然性が低い）」と思えば、「仮想条件」を使うのです

ただ、「鳥」と違い、「王様になる可能性」は人によっては（王位継承権者・王族、革命等）、全くなくはないので、どちらでも作文できるのです

「単純条件」か「仮想条件」かは、「実現の程度に関する思いとその表現」という作文者の選択に委ねられている面もあるのです

ここまでの学習内容は、「条件提示」の表現方法の「根本前提」なのですが、お解かりいただけましたでしょうか

それでは、**「本論」**に入りましょう（あまりに長い「前置き」で申し訳ありませんでした）

では、まずは、日本語で考えてみましょう

はじめに、現在の「単純条件」です

「早とちりのお前が馬鹿なら、鈍い俺は阿呆だな。」

「現在」のことを単純に言っていて、「現在形」を使っていますね（「現在単純条件」）特に、「現在の仮想」や「現在の願望」のような深い「真意」はなさそうですね

英語でも、「単純条件文」では、「現在のことは現在形」で「過去のことは過去形」であらわします（「直説法」）（未来のことについては「副節」に例外があるので後述します）

英語では、「仮想条件文」では、「現在のことは過去形」で「過去のことは過去完了形」であらわします（この動詞の使い方を「仮定法」というのです）

次に、日本語で、「仮想条件」をみてみましょう（「現在・過去・未来」とのからみに注意です）

「もし、今、お前が王様だったら、みんな不幸せになってしまうだろうになあ」

「現在の事実（王様ではない）」に反する「仮想」を「条件」としていますね（「**現在仮想条件**」）（「お前が王様ではないのでみんな幸せだ」と言い換えて意味がありますか）

「王様なら」と「現在形」でもかまいませんが、「現在の仮想」を「過去形」のような「だったら」という表現がよく使われます（日本語でも、「現在の仮想」を「過去形」のような形で言いまわしているんですね）

ここでは、「お前のような人間が王様だったら世の中が滅茶苦茶だな」「お前が王様だなんて絶対ダメだ」という「現在の願望」が「真意」として読み取れますね

「もし、あのとき、私が王様だったら、みんなを救えただろうになあ」

これは、絶対にひっくりかえすことのできない「過去の後悔」をいっています（「**過去仮想条件**」）（「自分ならできたのに」というような絶対的な自信が「真意」なのでしょうか）

「仮に、将来、お前が王様になるとすれば、みんな逃げ出さだろうになあ」

これは、まずありえない「未来の仮想・予備・決意」ですね（「**未来仮想条件**」）

「条件」のまとめ

「単純条件」か「仮想条件」か

「現在・過去の確定した事実を知らない」うえでの条件提示や、未来のありうる範囲内の事象の想定
（「実現は五分五分程度かそれ以上」と思う）

「現在」「過去」「未来」の
単純条件

「現在・過去の確定した事実」に反する条件提示や、未来の「全く実現しない」「ほとんど実現不可能」と思われることの想定

「現在」「過去」「未来」の
仮想条件（*仮定法*）

「仮想条件」と「とき（現在・過去・未来）」

「現在」の事実反することを想定する
「現在の反実仮想」と「現在の願望」

現在仮想条件（*仮定法過去*）

「過去」の事実反することを想定する
「過去の反実仮想」と「過去の後悔」

過去仮想条件（*仮定法過去完了*）

「未来」のほぼ起こりえない様々なことを想定する
「未来への仮想」と「予備・決意」

未来仮想条件

以下に、「現在」「過去」の「事実」や「未来」の「こと」に関する「知」「不知」「条件」について、表にまとめてみました

はじめのうちは理解困難かもしれませんが、講末まで読んだあと何度も吟味して、完全理解するようにしてください

(①「現在推量」・②「過去推量」に関しましては、第24講で検討済みです)

事実の知・不知と現在・過去・未来との関係

現在の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(現在時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	①「現在推量」
作文者が知らないことや、断定できない「現在の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	③「現在単純条件文」
事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、願望する (「現在の反実仮想(副節)」と「現在の願望(主節)」)	⑦「現在仮想条件文」 (「仮定法過去」)

過去の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(過去時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	②「過去推量」
作文者が知らないことや、断定できない「過去の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	④「過去単純条件文」
事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、後悔する (「過去の反実仮想(副節)」と「過去の後悔(主節)」)	⑧「過去仮想条件文」 (「仮定法過去完了」)

未来のこと → 知るよしもないし、事実にも反することもないのが原則

単純に未来のことに言及する(未来時制)(推量的一种)	普通の文(「直説法」)
起こりうる「単純未来」のことに条件をつけて言及する (「時・条、副節」)	⑤「単純未来条件文」
「意思未来」のことに条件をつけて言及する	⑥「意思未来条件文」
「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうる未来のこと」を様々想定して言及する	⑨「未来仮想条件文」
未確定なことに関わる特別な表現	⑩「未定内容提示 (「仮定法現在」)

③ 「現在単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「現在の事実」について、
五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
I f + 現在形 ,	現在形

I f y o u a r e f r e e , I w a n t y o u t o c l e a n y o u r r o o m .

「もし今あなたが暇なら、私はあなたに自身の部屋を掃除してもらいたい。」

④ 「過去単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「過去の事実」について、
五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
I f + 過去形 ,	過去形

I f h e w a s a t t h e s t a t i o n , h e s a w t h e a c c i d e n t .

「もし彼が駅にいたら、彼はその事故を見ていた（だろう）。」

⑤ 「単純未来条件文」

起こることがある程度予想される「単純未来」のことにに関して条件をつける
(およそ五分五分の条件の場合)(明日、晴れるかもしれないし、雨天かもしれないし)

副節（条件節）	主節
I f + 現在形 , (「時・条、副節」)	未来形 (w i l l 等)

I f i t i s f i n e t o m o r r o w , I w i l l t a k e y o u t o t h e b e a c h .

「明日晴れたら、あなたを海岸へ連れていきましょう。」

⑤の例文に関して、注意しなければならないことが2つあります

注意1

「時・条、副節」

「単純未来の時または条件をあらわす副詞節では、未来のことも現在形であらわす」という習慣があります（これは使用者本人たちの習慣ですから、理論的にどうあれ、逆らえません）（略して、「時・条、副節」「時条副節」と本書ではいいます）

「If it will be fine tomorrow,」と言っではいけないのです
日本語でも、「晴れたら」と「過去形」のような「た」を使っています

「晴れるだろうなら」というような「未来形」的な言い方はしませんね

「時・条、副節」には、その他に、「when節」「till節」「until節」に、「群副節詞（群従属接続詞）」の「by the time節」「as soon as節」等があります

（ただ、主語の意思を強調したり、丁寧な依頼をする文では、「If」節に「will」を使ってもよい → ⑥「意思未来条件文」）

注意2

⑤の例文は、通常の場合で、おそらく晴れるという客観的状況と作文者のその認識のもとにあるのです

台風が目前に迫っていて、過去の例ではほぼ100パーセント明日いっぱい暴風雨で晴れることがありえないというような状況下では、ありえない未来のことを想定して言及するのですから（相手をからかう意図なのでしょうか）、⑨「未来仮想条件文」となります

⑥「意思未来条件文」

個人の意思により左右可能なことで「意思未来」のことに条件をつけて言及する

副節（条件節）

主節

If + 未来形（will等） ,

未来形（will等）

If you will [would] wait, I will [would] hire a taxi.

「お待ちいただけるなら、タクシーを頼みます。」

（「would」のほうが丁寧ということで、時間に変わりはありません）

If she will foregive me , I will help her.

「彼女が私を許そうと思うなら、私は彼女を助けます。」

⑦「現在仮想条件文」(「仮定法過去」)

確定した事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、別の「理想的事態」を「願望」する(「現在の反実仮想」と「現在の願望」)

副節(条件節) → 「現在の反実仮想」	主節 → 「現在の願望」
If + 過去形 ,	「助動詞の過去形」 + 「動詞の原形」
	「would」 ~するのになあ
	「should」 ~すべきなのになあ
	「could」 ~できるのになあ
	「might」 ~かもしれないのになあ

If I were a bird , I would fly to you.

「もし、今、(仮に) 私が鳥だったら、あなたのところへ飛んで行くのになあ。」

⑧「過去仮想条件文」(「仮定法過去完了」)

確定した事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、「過去の事実」に関して「後悔」する(「過去の反実仮想」と「過去の後悔」)

副節(条件節) → 「過去の反実仮想」	主節 → 「過去の後悔」
If + 過去完了形 ,	「助動詞の過去形」 + 「have」 + 「完了分詞」
	「would have」 ~したのになあ
	「should have」 ~すべきだったのになあ
	「could have」 ~できたのになあ
	「might have」 ~かもしれなかったのになあ

If he had been at the station, he would have seen the accident.

「もしそのとき彼が駅にいたら、その事故を見ていただろうになあ。」

ここで、「副詞系」の原点に戻った注意があります

「主節」が「真意」をあらわし必須のようですが、「条件節」は「場面状況」を設定しているものであって、必須のものではありません

また、「条件節」は「副詞系」のひとつにすぎず、「If 節」は絶対なものではありません(「If 節 = 仮定法」なんて愚の骨頂にのぼりつめませんように・・・)

他の「副詞系」すなわち「If 以外の節」「副句」「副語」で言い換えられたり、挿入や省略されていたり、主語の中に条件的意味が含まれていたり、様々あるのです

以下の英文を参照してください（詳細は、別巻に譲ります）

Suppose you were a king , what would you do ?
But for air , we could not live .
I got up early , otherwiae I could not have seen him .
A Japanese could not say such a thing .

この観点からすると、「条件節」を目印とするのではなく、

もうこれからは、主節に「would」「should」「could」「might」を見つけたら、「仮想条件」を疑ってください
まず、「推量」か「仮想条件」だろうなという「あたりと攻め方」が重要です
「would」「should」「could」「might」こそが、「仮想条件提示表現」といわれるものの「正体」だというぐらいの気持ちでいてください

「would」「should」「could」「might」のいずれかの選択は、願望等の作文者の意思の内容や程度による自由な選択によるものです

⑨ 「未来仮想条件文」

「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうること」を様々な想定して言及する

副節（条件節）	主節
If + should , (万一～) 起こりうることの想定	仮定法（時制をずらす）でも 直説法（時制はそのまま）でも可能
If + were to , 実現不可能なことも想定できる（仮に～）	仮定法

「条件節」の「should」「were to」を特徴としています

If there should be any trouble, I would [will] help you.

「万一何か面倒なことがあったら、私はあなたを助けます。」

If a larege earthquake were to happen, I would fly for a moment.

「仮に大地震がおきたら、私はしばらく飛んでいるだろう。」

If the sun were to rise in the west, I would trust you.

「仮に太陽が西から昇ったとしても、私はあなたを信頼するだろう。」

⑩「未定内容提示（仮定法現在）」と「s o u l d」

以下の表にあるような「未定内容をあらわす形容詞」「未定内容に従える他動詞」とともに「t h a t 名節」を使用する場合、「t h a t 名節」の中に「提案・要望」等の意味を伝える「未定内容提示のs o u l d」と命名すべき「s o u l d」を使います

ここで注意しなければならないのが、「s o u l d」が使用されない場合でも、「三単現」「過去形」が適用されず、「原形の動詞」が使われることです（この「未定内容」に関する表現形態は「仮定法現在」といわれていますが、ここでは仮に「未定内容提示」と呼称しておきます）

I t 自 未定内容をあらわす形容詞 t h a t 主 s h o u l d 原形 ~ .

主 未定内容に従える他動詞 t h a t 主 s h o u l d 原形 ~ .

⇒ I t 自 未定内容をあらわす形容詞 t h a t 主 原形 ~ .

⇒ 主 未定内容に従える他動詞 t h a t 主 原形 ~ .

I t i s n e c e s s a r y t h a t h e b e q u i e t .

I s u g g e t e d t h a t h e g o t h e r e . (提案した)

I s u g g e t e d t h a t h e w e n t t h e r e . (示唆した)

最後の例文のように、「t h a t 名節」に「直説法」を使用すると「未定内容提示（仮定法現在）」ではなくなり、意味も変わります

未定内容をあらわす形容詞

「i m p o r t a n t」「n e c e s s a r y」「e s s e n t i a l」等

未定内容に従える他動詞

「a s k」「s u g g e s t」「r e q u i r e」「r e q u e s t」「o r d e r」
「i n s i s t」「c o m m a n d」「p r o p o s e」「d e m a n d」等

ここまでを、「入門基礎理論編」とさせていただきます

まずは、「英文法理論」の土台と骨格の構築の重要性がわかりましたでしょうか
「英文の構造」というものはつかめたですね
もう、辞書だけでの独習も可能となったでしょう

これまでで、「論理」で「本質」「実体」「基本構造」等を見極める目がかなり養なわれたものと思います（この点はあらゆる面で有効です）

これからは、「詳細知識的事項」をたくさん吸収し、実践へと向かうのです

「現代文」も「古文」も、このように「文法理論」で読んでいくと深い理解や解釈が可能となると思います（本書の理解を端緒として、「現代文」「古文」の深い読みへと進んでください）

本書を契機に、「論理思考ができる人間」「論理的結論と論理的理由を提示できる社会人」を目指してますます研鑽に励み、人生を飛躍的発展的に変え、「自己 MAX」に少しでも近づいていけるようになっていただければ幸いです

「自己 MAX」への到達を下支えするものは、「認識力」です
本書の読破を通してわかっていただけたものと思います
人は、見ているようでみていない、わかっているようでわかっていないのです
このことが、「英文法」の真の分析を通して認識理解していただけたと思います

みなさん個々人が、様々な分野で、旧来の陋習は当然ながら、あらゆることに疑問を感じ、新たなる合理的な世界を切り拓き提示できるよう頑張ってください

次講以降（別巻を予定）は、「比較」、さらには「名詞構文とやら」「複合関係詞と呼ばれているものと疑問名節の副節化」「t h a t の検討」「a s の検討」「b u t の検討」等や「副節の代用等をはじめとした（瑣末）詳細な知識的事項」に進んでいく予定です

2015年春